つまり

石本公也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
つまり

【Ｎコード】
Ｎ２９６４Ｘ

【作者名】
石本公也

【あらすじ】
高校に入って、猛は急な眠気に襲われてたおれる。そして、目が覚めた彼は女になっていた。
しかし、それは純粋に女になっただけではなくて……

プロローグ

アニメや漫画などの、「その日は朝から変だった」とか言う感覚があるのなら、俺はあってほしいと思う。
何かが起こると言うのなら、少なくとも心の準備ができるだろうし、いつもと違う事をして、その「何か」を防ごうとしたりできる。

しかし、俺にはそんな事起こらなかった。
変な感覚も無く、急に。
今ーーここで。

「っはぁ～、まったく、今日もだるいなぁ～」
学校の下駄箱からそんなのんきな声がする。
「そんな事言って、今日の授業は終わったぞ、修≪おさむ≫」
俺はのんきな声の主に向かって、軽く一言。
「まぁな猛≪たける≫、確かにもうだるい授業は去った！今日はもう自由なんだ！……しかしなぁ猛」
下駄箱で靴を取り出しながら、修はニヤリと笑みを浮かべ、軽く小馬鹿にした感じで、
「いくらなんでも背伸びして下駄箱を出し入れするってのは、どうかと思うぜぇ？」
なんていいやがった。
「うるさいわっ？俺の場所が上の方にあるってだけだろ？」
少し苛立ったので、俺は反論。
俺の下駄箱は一番上なので、普通に取ろうとすると、少し……少し

届かないのである。
「だがお前しか背伸びして取るやつはいないぞ？身長１５８ｃｍ」
「うるさいわっ？人の気にしてるところをっ！」
ウザいとは昔から思っていたが、人の気にしてる事まで言うのなら
と、俺は修のスネに向かって蹴りを入れーーー
「っだぁ！」
俺の脚は、修に届く前に、俺らに近づいて来た人に当たってしまっ
た。
「あぁっ！スミマセ……あぁ、なんだ燕≪つばめ≫か……」
蹴られた足を抱えてうずくまっているやつに向けて俺は謝罪でなく、
呆れた声を出す。
「酷くね？俺お前に蹴られたんだが！」
燕と呼ばれた男子は、顔をあげるが、
「よお燕、お前も帰りなら一緒に行こうぜ」
修も燕の足を気にしない事にすると分かり、立ち上がった。
その時である。
「……？」
俺の視界がぐらついた。
それと同時に襲ってくる、抗う事の出来ない眠気。
「？　おい、どうした？」
「……眠い……」
外にいるというのに、俺は意識を失った。

これが、高校に入ってすぐ起きた、
災難の始まりだ。

プロローグ（後書き）

初めての執筆です。
よろしくお願いします

つまり、俺は女になったのか　　１ページ（前書き）

初めての小説の、第一話で６人も出すのは、やりすぎたかなぁ。

つまり、俺は女になったのか　　1ページ

性転換
男が女になったり、その逆だったり、
クマノミとかの魚なんかで性転換する奴がいるらしい。
異性に興味を持つ年代に、興味の方向がずれて性転換に行き着く奴もいる。
まぁ実際、こんな事説明しても意味が無いのだが……

「……っあぁ～」
目を開けると、真っ白な天井が目に入る。
なんだろう、何したんだっけ？
しばらく天井を見つめてると、
「おっ猛、起きたのか。」
声が聞こえた。そして頭が活動し出した俺は、今自分がいるところが病院で、俺は学校の下駄箱のとこで眠ってしまった事を思い出す。
「返事してくれよ。無視はねぇだろ」
誰かいるのだろうか？俺はベッドから身を起こす。起き上がると見知った顔がいくつもある。
「しっかしお前が倒れたって聞いただけでも驚きだってのに、お前すごい事になったなぁ」
眼鏡をかけた男子が、何故か感慨深そうに言う。
「だよな優太≪ゆうた≫。俺まだ信じらんねぇよ」
横にいる顔の整った奴が言う。その後に
「こんな事って本当にあるんだな」

「驚いたわ……」
なんて騒ぎ出す。倒れただけで騒ぎ過ぎなきがするので、
「お前ら、不思議な物を見た感じで……」
俺が溜息をついて下を向いたときだった。
俺は固まってしまったのだ。
ベッドに髪が垂れている。
ーーー俺の、頭からーーー

「……なんだこれ？」
あまりの事に声がうわずっている……いや、俺の声が高くなっているのだ。
何が起こったわからなくなり、考えられない。パニックのようになり、ベッドがガタンと音をたてる。その音にきずいたのか
「猛っちょっと落ち着け！ちょっと鏡見せてやるから」
長身の男子ーー修が棚の上にあった鏡を俺に見せる。
そこに写ってたのは、明らかな女の子の顔だった。

鏡を見る。そこには俺の顔ではなく、女の子の顔がある。頬をつねる。鏡の中の女の子も同じ動きをする、と同時に痛い。
俺は本当に女になったのか、確認動作をする。
「どうだよ、不思議な事が自分に起こった気分は？」
眼鏡の男子ーー優太がそう言ってきた。確認動作を終えた俺はベッドに座り直し、自分で事態を呑み込む為につぶやいた
「つまり、俺は女になったのか」

今俺がいるのは病院の隅のベッドの上。
そして、俺の足元の方に俺の友達がいる状態だ。
夢ならこんなリアルじゃ無い。冗談ならこの身体はなんだ？
わからなくても、わかってても変わらないんだ。事態をなるべく早く飲みこんだ方がいい。
「なぁ燕、俺が倒れた後ってどうなったんだ？教えてくれ」
眠ったというのは少し格好悪いと思い、倒れた事にした。
「あ…あぁ、お前がドターンってなったら、ピカーってなって、ギュギュギュギュギューって、気がついたら女になってて」
「すまん、会話から擬音語を外してくれ」
子供のような説明は、理解しにくいぞ俺は、そしてその後、燕の説明を１０回位聞いた所で、ようやく俺は理解する。
説明すると、俺が意識を失った後、突然、俺の体が発光し出して、俺を覆っていた光がなくなると、そこには女になった俺がいたのだ。
「その後先生に説明して、救急車呼んで、今こうなってるんだよ」
と、燕は語り終えた。
「先生に説明って、信じてくれたのかよ」
「そりゃ、お前を担いでたから簡単に納得してくれたよ」
俺が疑問を言うと、整った顔立ちの男子ーー和樹≪かずき≫が答える。俺はさっきの答えに納得し、質問を重ねる。
「なぁ。俺が倒れた時って、お前ら以外の人達はどうだったんだ？」
「そりゃパニックだったな。なんせ目の前で人の性別がかわったんだから。」
修が腕組みしながら答えた。そして、俺の顔を覗き込むと、
「じゃあ、そろそろ帰るから」
と言った。まぁ確かに、ここは病院だし、いつまでもいる訳には行かない。時計をみると、もう8時になっていた。
「猛。明日ちゃんと学校来いよ。ここの病院、俺らの学校と関係あるとこらしいからな。明日ここからお前は通うんだと」
今まで黙ってた茶髪の男子ーー飾≪かざる≫が去りながら言った。

「学校行くって、女の姿でか？」
冗談のつもりで言った言葉に、
「「「「「勿論」」」」」
五人揃ってこの言葉。
……まじかいな。

つまり、俺は女になったのか　　1ページ（後書き）

最初の方は次々と書いて「こんな物語なんだ」ってのを定着させたいです。
さて次回は学校です！
彼らの通う学校について、ちゃんと説明するつもりです。

つまり、俺は女になったのか　2ページ（前書き）

小説は思ったより書くのが難しいですね。
ミスがでてきたり、話がとまったり、
さぁ三回目です！

つまり、俺は女になったのか　　２ページ

『私立清涼学園』えーっと、確かシリツセイリョウガクエンって読むーーは、中等部から大学部までエスカレーターの男子校。俺らは高等部になってすぐだが、中等部でもともと中が良く、今でもよく６人で過ごす。私立と言うだけあって、寮までバッチリ、施設は充実して、快適な学校である。それでも学費が年１０００万前後なのは凄いとか親が言っていたな。

４月だからだろうか、俺はそんな事を考えながら下駄箱で上履きにすむーずに、あくまでもすむーずに履き替えて、廊下を越え、自分の教室に入る。

「どうしてなんだよっ！」

教室に入り、また１分経ったかどうかと言う所で、俺は飾に怒鳴られた。耳に響く。

「うるせえな、どうしたんだよ一体。」

耳を抑えて、和室でお茶を出す心構えで俺は飾に言う。落ち着きなはれ。

「どうしたじゃねぇよ！俺ぁ昨日あんなことがあったから、学校で美少女が見れると思ったんだよ！」

昨日の事は、病院の事だろうが……ははぁん、昨日あまり喋ろうとしなかったのは、女になった俺に見とれてたという事か。ふふ……

……気色悪いな。

「でもしょうがねぇだろ？朝起きたら男に戻ってたんだからよ」

教室の自分の席に着きながら飾に簡単に説明して、一時間目の授業を確認する。

「あああぁぁああ？久しぶりの女子いいぃ？」

「男子校病だから仕方ないんだろうが、明らかな変態発言はしない

で良いだろ」
一時間目は古文で、あぁまだオリエンテーションだから楽だなと思いながら、飾をあしらう。
「変態ってひでぇ？」
酷いも何も、変態発言をしたのはお前だからな？そんな事をしていると、廊下からドタバタしながら燕が舞い込んだ。
「おー遅かったな。どうしたよ」
俺は走って来たのか、息が上がっている燕に話かける。
「また…やっちった……」
ハァハァと肩でしていた燕は、不思議そうにこっちを見る。あまり特徴の無い髪が、耳を覆っているので暑そうに思う。
「…あれ？…猛昨日女子に……？」
「ああそれな？なんか朝起きたら男に戻ってたんだよ。てか、またやったのか？」
燕は肯定の仕草をした。また中等部と高等部を間違えたらしい。
そうしてると先生がきて、授業が始まった。
その後は、先生に事情を説明しただけで、学校は終わった。授業はほとんど寝たが……
「あれ？お前寮じゃねぇのか？」
学校が終わり、帰り道。修が話しかけて来た。
「ああ、今日も病院だ。男に戻ったから行く必要無いと思うんだけどなぁ」
俺はふーっと長い息を吐く。春に似合わない行為だ。
「昨日はなんだったんだろうな、ホント冗談に思えて来た」
修が笑う。短めの髪が、ほんの少しだけ、風にそよいだ。

「俺はな、昨日ああだったから安心してしまったんだろう。でもな？」

教室の外の廊下で、飾は真剣な表情……では無く、必死に笑いを堪えた表情をしていた。
「何で俺は今女になってんだよ？」
「くくっ……し…知らねえよ……くく…あはははははっガッ？」
人の目の前で、しかも人の不幸で笑うやつには、仕置きをした。鉄拳だ。
「いってーな、殴んなよ。てか、ソワソワし過ぎだって」
飾は、殴られた頬をさすっている。
「ソワソワすんなってほうが無理だらろ……ただでさえ女になったのに、周りがさっきから見てくんだから」
なんてったってここは男子校である。
当然、女子がいるのはおかしいから、周囲が不思議な目線を送っても仕方が無い。
「たけるうううう！」
後ろから声が聞こえたかと思うと、いきなり後ろから抱きつかれた。
「っひゃあ？」
思わず素っ頓狂な声がでる。周りの生徒が一斉にこっちを見る。
「お～可愛い声だね～良いよ～イイよ～」
何処かのスカウトマンみたいな胡散臭い褒め方をした後、俺に抱きついて来た和樹は
「いや～男子制服を着た女子って、いいもんだなぁ～」
……どうやらこいつも、男子校に居続けておかしくなってたらしい。
「おい猛。昨日は女子じゃ無かったよな？」
今度はまえから、優太が話しかけて来た。
「優太……寝癖酷いな……」
飾が優太の頭を見てつぶやく様に言った。優太は飾の言葉に
「寝癖じゃ無い、決めてんだ」
なんて言うもんだから、
「「「似合ってねぇ！」」」
ツッコミが三重奏となって響いた。

その時、
『一年三組、神鎌　猛（かみかま　たける）君、神鎌　猛君、至急保健室まで来なさい。繰り返します…』
放送で名前が呼ばれた。
「猛、呼ばれたぞ」
「ああ、きこえたよ」
俺は急いで保健室まで走った。走りながら、一時間目はもうすぐ始まるものなんじゃないんだったかと考えていた。

つまり、俺は女になったのか　　２ページ（後書き）

思ったより一話一話が短いな…
これから少しづつ長くして行きたいと思いました。
さて次回は、保健室ですよ。
女になったって心境表現をもっとだせるようにしよう！

つまり、俺は女になったのか　３ページ（前書き）

更新は、結構大変な事だったんですね。
色々学んで行こうと思いました。

つまり、俺は女になったのか　3ページ

保健室に着くと、そこには校長先生がいて、他にも世界史の小鳥遊（たかなし）先生や、理科の高梨（たかなし）先生、体育の山田（やまだ）先生がいた。
俺が近づいていくと、俺に気づいた先生達は、笑顔を向ける。
「あ～神鎌君、あ～君が女の子になったといことなんだけど、え～この先転校するにしても、どっちにしろ色々あるからね、今日は身体測定みたいなのを行うんだよ」
校長先生がこっちを向いて言った。またハゲに侵食されてるし。
いやそんな事考えてるんじゃなく、
「あの、そろそろ一時間目が始まると……」
俺はおずおずと疑問を言うと山田先生が、
「一時間目は体育だから、測定にしたんだよ」
成る程、納得。
「じゃ、後は高梨先生、お願いします。」
校長、小鳥遊、山田先生の男性陣はそう言い残してさっていった。
小鳥遊先生はなにしに来てたんだろう……。
「じゃあ、入りましょうか」
高梨先生にいわれて、俺は保健室に入った。

白のイメージが強く、壁には健康に関するポスター、学校で一番清潔な場所ーーー保健室。
そのイメージに全く似合わない物があった。
清涼学園の養護教諭（ようごきょうゆ）である。
養護教諭の武川（たけかわ）先生は、何故か汚れている白衣を着ていて、タバコをふかしている。
ボサボサな頭は清涼感なんてなく、掃除ロボットにゴミと認識されてそうだ。
「武川先生、測定を始めたいのですが……」

高梨先生が武川先生に話しかける。武川先生は、フーッと煙を吐き出し、
「あいよ」
とだるそうにつぶやく。そして「よっこらせ」と爺さんみたいに立ち上がり
「保健室を使う奴は滅多にいないんだかなぁ」
と言っていた。一昨日俺が倒れた時も保健室に運んでるはずだから、珍しいのだろう。
武川先生が出て行った後、高梨先生の
「さぁ、色々測るから上着を脱いで」
と言われて、俺のぼーっとしていた頭が起きた。
いきなり放送で呼ばれたから、体育着を持っていない。俺はブレザーだけを脱いだ。
「え～っと、まずは身長を測りましょうかね」
毎回毎回、この身長測定機と対峙した時は、嫌な気分にさせられる。
しかし、今回は女になったからと言う事で身長を測るのだ、小さかろうが、「女になったから」という事で、傷付くことなんかーーー
「身長は……１５８ｃｍね」
男の時と同じって……。
そういえば、制服も男ものだが、べつにぶかぶかという訳じゃ無いし、気付くとこはあったのか。
「次は体重ね。」
傷付いた俺を無視して、高梨先生が体重計のところから俺を呼ぶ。
体重も、そんな変わってないんだろうな。
「体重は……４６ｋｇ」
いや、少し減っていた。男の時より三キロ減ってとこか……
その後の座高も男の時と同という結果だった。
その他にも色々測ったんだが、思い返すのも恥ずかしいので割愛とする。
測定が終わって、教室に戻ると、

「なぁお前本当に猛？」
「さっきまでなにしてた？」
「女になったってことは……なぁ？」
一気に質問攻めを食らった。
「うるせえよ。一気に質問すんなとりあえず落ち着けそして俺は俺だし、さっきまで身体測定だ、最後の質問には答えん」
俺は矢継ぎ早に言葉を繰り出し、飾（かざる）と燕（つばめ）の所へ逃げた。
俺が近づいていくとふたりは
「おお、終わったか。どうだった？」
「今日の体育は疲れたよ」
と、話して来てくれた。
「こっちは身体測定だった。あんまし男の時とかわんなかったな」
「男の時と変わらなかったって…ああ、だから目線がいつも通りだなぁと」
その言葉を言い終わった後、飾は腹を抱えてうずくまる。身長に触れる奴には鉄拳（てっけん）だ。
「確かに男と女だし、色々違うけど、大きな変化と言ったらこの髪位だからね。」
「でも確かにな、腰ぐらいまであるし」
燕の言う通り、女になって一番の変化はここだろう。まっすぐで、腰まである黒髪なんて、アニメぐらいのものだからな。
「にしても寮に帰ってから話そうぜ。周りのやつらも聞いてるし」
いつのまにか復活しした飾が「確かに」と思わず言ってしまいそうな事を言うので、話を切り上げた。
その後の授業中。俺はずっと目線を感じて、全く集中出来なかった。

つまり、俺は女になったのか　３ページ（後書き）

考えてみたらまだまだ序盤…
さて次回は、清涼学園の寮の話です。
猛に新たなものごとがーー

つまり、俺は女になったのか　４ページ（前書き）

この小説を少しでもよんだひとに、精一杯の感謝を。

つまり、俺は女になったのか　４ページ

清涼学園の寮は、学校の北のほうにある立派な建物である。
中等部から大学部まであるもんだから、４階建てなのにかなりの広さがある。しかも一部屋に二人という決まりがあるにも関わらず、寮は満員に近い。もう少しでかくなればイイと思うんだが、そこは予算という厳しい現実があるんだろうな。
そんな寮の一室に、俺ら六人は集まった。
「フーン、つまり、男の時も女の時も身長はたいしてっ？」
「身長だけじゃねぇよ」
和樹（かずき）が脛（すね）をさすっている。自業自得だ。
「でも他のとこは男と女でちょっと違うんだろ？全く同じなのは身長だけなんだろ？」
「うるせえよ！確かに腹とか脚とかちょっと違うし筋量も減ってたけど！でもほぼ一緒だっての！」
「うるさい怒鳴るな？」
優太が一喝し、蹴りが飛んで来る。
その後、俺と和樹は落ち着いて蹴られた頬をさすっている。
「でも体格がほとんどかわんねぇって、女になった意味なくねぇか？」
意味ないワケじゃないと思うが、確かに変化ってやつなら、もっと変化があってもよかったんじゃないかと思う。変な意味はないぞ？にしても、神様の気まぐれにしても、なんでこんな風になったのかねぇ。
その時、あまり喋って無かった優太（ゆうた）が
「ちょっと思ったんだが、この女の子の時に猛っておかしくないか？」
この一言で、状況整理（じょうきょうせいり）の為の話し合いは、
「確かに猛じゃおかしいな」

「どんな名前にする？」
「沙耶ちゃん？舞ちゃん？どうする？」
女の時の俺の名前決めの話し合いになったのである。なんなんだこれ……
……
……
……
……
……
しばらくして、俺の名前が満足いくものになったのだろう。飾がその顔に笑みを浮かべて俺の前にいる。因(ちな)みに俺は、話し合いの最初の段階ですでに弾き出されていた。
「では、お前の名前を発表する！」
声高らかにあげて飾がまっすぐに俺を見る。
俺はもうどうすればいいのか分からないから、長い黒髪の先をいじっていた。
「お前の名前は神鎌　香架(かかり)理だぁ！」
名前。当て字にも程があるだろ……
「どうだ？なかなかの物だろう」
すんごく得意なってるようなので、俺は
「かかりって名前はいいけど、漢字が適当ずぎないか？」
正直(しょうじき)に伝える事にした。するとどうだろう、飾は
「適当じゃあないっ！」
怒鳴られてしまった。めんどくせ。
飾の後ろを見ると、他四人がだるそうにこっちを見ている。こいつら途中で投げたな。
「あー、分かったよ。かかりでいいから」
てなわけで、女の時の名前は香架理になった。ぱちぱちぱちぱち…

「さあて、時間も遅いし、続きはまたにしますか」
その後、話し合いが雑談となり、しばらく経ってから修が切り上げた。
さて、少し前に書いたと思うが、清涼学園(せいりょうがくえん)の寮は、一部屋に二人という決まりがある。もちろん俺にもルームメイトがいて、そして今の俺は女である。
まあ、そのルームメイトは紹介する必要ないんだけど、何故なら
「じゃあ……かかり？こっからどうする？」
俺のルームメイトは石岡優太(いしおかゆうた)だからである。

つまり、俺は女になったのか　４ページ（後書き）

ようやく序盤から抜け出しそう。なんかやった！とテンションが上がった。
さて次回は、寮の生活をお送りしたいです。
お楽しみ［？］に～

つまり、俺は女になったのか　５ページ（前書き）

キャラが何人もいるのに、掛け合いが少ないなとかんじて反省。

つまり、俺は女になったのか　5ページ

この後どうするときかれても、返す言葉にこまるワケで、俺は何かやる事がないか考えて、ある事を思いつき、優太に言う。
「そうだな、一昨日(おととい)も昨日も病院だったから風呂に入ろうかな」
この言葉を言ったら優太が突然ブっと笑った様な音をだし、顔が赤くなったり慌てたりと、なんとも不思議な行動をしていた。新手の神様への祈り方だろうか。
俺が変な物を見る様な目をしていると、
「お前、結構落ち着いてるんだな」
優太が逆に俺の方を不思議なものを見る目でみていた。
「落ち着いてる？」
「いや、お前女になったのに取り乱したりしてないから……」
「そこは……そうだな、確かに落ち着いてるな、俺は」
いきなり、突然女になった事。それは世間の常識ではあり得ない事。なんだよなぁ。
「ま…まぁ、お前が風呂入ってる間に、俺はメシでも作ってるよ…」
優太が何故か頷(うなず)きながら言う。
「ありがたいが、わざわざ言わなくてもいいんじゃないか？」
思った事を言ってみる。
「え？あぁ、そうだな……あっじゃあなんかリクエストあるか？」
いつもは言わないような事を言う優太。
ふと、俺は優太が何を隠そう考えていたかが分かった。頭のなかでは、豆電球に明かりがついた。
「リクエストは肉じゃがと炒め物。後はきんぴらかなぁ」
「な！お、おい！なんで手間の微妙にかかるもの要求すんだよ」
優太が慌てる。どうしてかって？
「お前、覗こうとかって思ってないか？」
その瞬間、優太が固まった。フフ…どうやら図星の様だな。

「やらしい事は考えないで、美味しい料理を作ってくれ」
俺はそう言って風呂に入った。

しばらく固まっていた優太は、フーッと長い息を吐き出し、料理に取りかかった。
冷蔵庫や棚から素材を出し、包丁などの器具を用意して、彼は料理を始めた。
別に適当に作っても良い筈なのだが、リクエストを取ってしまったという理由で、彼は肉じゃがを作るらしい。
彼がジャガイモの皮を剥こうとした時、
「なぁ優太」
風呂に入ってるかかりの声がした。
「なんだ？」
作業を始め様とした手を止めて、彼は聞いた
「女の子って、どうやって髪を洗ってるか分かるか？」
質問の内容は、以外と重要なもので、しかし、男子中学から上がって来ている男子生徒をやや驚かせてしまうものだった。
「わわわわかるわけねぇよ？」
言葉が震えていた。
「風呂入ったはいいけど、髪の洗い方がわかんねぇや。
それに髪って濡れると張り付くのな。なんか気持ち悪いから身体の前に持ってってみたけど…やっぱ変な感じが「だあああぁぁぁあ？実況しなくていいから黙ってろ！」

俺が風呂に入ってる間に、食事の準備はできなかったらしい。その後俺もてつだって、本日の夕飯は完成した。夕飯を食べている時、優太の顔が少し赤かったが、どうしたのだろうか？

……なんか話しづらい。
静かな食事は悪くないが、なんか重たい雰囲気で食べていると、食べ物の味が分からなくなる。だのに、空気が重たい。
こういう時は、時間に任せるのがいいと思ったが、
「ゆ…優太」
あまりの気まずさに、俺は話しかけていた。
「なんだかさっきから［空気が］変な感じなんだが」
「へ？変って？ど…どんな」
「なんか［雰囲気が］重たいし、［安易に］動けなくて…」
「お前大丈夫か？……あっじゃあサッサと寝ろよっ。うんそれがいいそうしよう。」
優太は一気にそう言うと、俺を二段ベットに押しやった。俺はまだ眠いワケじゃないが、別に何かやる事も無かったので、そのまま寝る事にした。
疲れていた訳でもないのに、俺はすぐにねむりにたついた。

つまり、俺は女になったのか　５ページ（後書き）

自分の小説を、読んでくれている人がいると分かって超感動。その夜枕が湿っぽくなりました。
さて次回から、かかりと猛のことに触れてこうと思ってます。
おたのしみにー

つまり、この身体は……　　1ページ（前書き）

ようやく第二章。［多分……］
つたないなぁとと思える自分の文を読んでくれている人に、心からの感謝を。

つまり、この身体は……　1ページ

昨日、いつもより早く寝たからだろうか、俺は、いつもより早く起きた。外から鳥の鳴き声が聞こえるし、早起きは以外と心地いい。
俺はベットからおりて、洗面所に向かう。洗面所に着いて鏡を見る
「昨日とか三日前が夢に思えるな、これは」
鏡には、男の俺が映っている。

「つまり、朝起きたら男に戻ってましたワーイって事か？」
寮から学校に行く途中で飾(かざる)が言って来た。春の桜は、ピンクと緑が混ざった色をしている。
「一昨日も男だったぞ忘れんな」
「まぁな」
ゆったりした雰囲気と会話。陽気な天気は、色んな物事をどうでもよく感じさせてくれる。
「猛。て事は一日一日で男になったり女になったりするのか？」
優太が聞いてくるが、俺は答えない。
ついに春の陽気な空気さえ遮断(しゃだん)し、だるく、面倒で、催眠術師(さいみんじゅつし)がたくさんいる学校に着いたからである。
「今日もあの催眠術にどこまで対抗できるかだな」
俺はそうつぶやいて、校舎の中に入ってった。
俺は少し考えが甘いようだ。男に戻ったーーーいや、男の状態ならば昨日みたいに周りの視線を感じることもないだろうと思っていた。
「いや、その考えは甘いよ、女の子になった奴が、翌日には男に戻ってるとかさ、十分おかしいよ」
燕(つばめ)がこう言うまで、俺は痛いほど視線が集まる理由が分からなか

った。
「燕、いつになったら学校は終わるんだ？」
「まだ一時間目始まってねぇよ？」
その日、俺はずっと狸寝入りを決め込ーーーめなかった。
休み時間になると、飾と燕が教室を飛び出して、俺は溜息をついた
一瞬でクラスの連中に転校生の様に囲まれ、質問ぜめにあったのだ。
学校が終わる頃には俺の携帯にはクラスの連中の名前がびっしりと
埋まっていた。

学校が終わると気分がすっと軽くなる。俺にくる視線の量が減り、
先生に無駄に当てられる事も無く、春の陽気な空気に触れられる。
ああ、幸せだなぁ。
「ところでお前ら、休み時間にどこ行ってたんだ？」
俺は桜を見上げながら聞いた。
「ちょっとな、先生に確認取ってただけだ」
修が答える。
「なんの？」
「なんかの」
追求しようとして、かわされた。
俺は修の表情から何か分からないかと思ったが、１５８ｃｍと１７
４ｃｍとでは、顔を覗く事すら出来ない。しょうがないから諦めて、
後の楽しみという事にしておく。
展開が早いかもしれないが、寮の中で俺ら六人は、また話し合いを
行っている。
「男になったり女になったりってのは、やっぱり寝てる間に起きて
ると思う」
まず燕が口をひらいた。
「確かにそうだろうな」
そこに修が答える。

「こいつが寝た時にずっと見てれば、身体(からだ)が変わる瞬間が見れるのか？」
これは和樹だ。
「だったら俺は徹夜(てつや)するね」
これは俺。
しっかし、何人も喋ってると、だれが喋ってるか分からんな。
「なんで徹夜すんだ？」
和樹が聞いてくる。
「なんでって……回避出来るならしたいだろ、こうゆうものは」
俺と和樹は、呆(あき)れた目線をぶつけ合う。なんでこいつは呆れた目線を送ってくんだ？
「よし！じゃあ今日はオールだあぁ？」
飾の高らかな宣言に「おおっ！」と俺らは乗った。
この事が、後々面倒な事の引き金だった

つまり、この身体は……　　1ページ（後書き）

このあとがきも、少し寂しいと感じたりそうでなかったり、
さて次回は、友とはしゃぐオールの話。
お楽しみに。

つまり、この身体は……　２ページ（前書き）

脳みそこねくり回して考えても、なかなか浮かばない文章。
難しいですね。

つまり、この身体は……　2ページ

オールと言っても学生寮で行うから、あまりうるさく出来ない。そこで俺らがやったのは
「おい、そこ宝出て来るぞ」
「わーってるよ」
「そこ失敗すんなよ」
「うるせえよ……あ……」
「なにしてんだよー」
ゲームと、
「俺この芸人好きだな」
「？　何がいいんだ？」
「まあ見てろ…」
「……っぶっ！」
「な？面白いだろ？な？」
TVと、
「やっぱり地理の藤田（ふじた）先生はカツラだよ。じゃなきゃあんなに揺れる頭をどう説明すんだよ」
「確かにあの頭はおかしいよな、授業中笑っちゃうわ」
「なんでカツラでごまかすんだ？理解できん」
「お前は将来分かると思うよ」
「将来ハゲるって言いてぇのかおい！」
雑談をしていた。
そんな感じで順調に夜が更けていた時だった。
「？」
突然、俺をあの日、校舎を出た出てぶっ倒れた時と同じ様な、抗えないと直感で分かる眠気（ねむけ）が襲って来た。
俺はそのまま倒れ、眠ってーーー思ったより早く意識を取り戻した。
もちろん、女の身体で……

「つまり、こっから先お前徹夜出来ないな」
俺の方を見ながら、燕が言う。
こいつ、他に言う事ないのか？
「しかし驚いたな、俺が最初に見たのと変わり方が違う」
「変わり方が違う？」
修が気になる事を言うので、俺は尋ねる
「あのな、ズズズズズってなってふわーとなったとおもったら、ぱあっとなって、お前が女になってた」
燕がよくわからない言語で説明するのを無視し、俺は優太に説明を求めた。
「あー、だから…そうだな、ズズズズズってとこは、なんか黒いモヤ？みたいなのがお前の周りにでてきて、ふわーてとこはそのモヤがお前を包み込んで、ぱあっってとこはその包み込んでたモヤが弾ける様に消えたんだ、で、女になったお前がいたと」
別に燕の説明を説明しなくてもいい筈なんだが。まじめ？
え～っと、確か最初は俺の体が光に包まれたんだよな。で、今回は黒いモヤに包まれたと。……よく分からん
「おら、とにかく学校だ。準備しろ」
飾にせかされる。
「俺ら何してる？」
「たけ…かかりの準備が出来るまでのんびりしてようぜ」
「よし！ここで待ってよう「外にいろ！」
部屋に居続けようとする五人を俺は廊下へ放り投げた。

学校の事なんか書いたってしょうがない。
周りの目線がやや減って、催眠術師の前に俺はあっけなく撃沈し、
別にどうでもいい事をホームルームでやってるくらいだからだ。

そして寮の中でーーーも、あまり書く事がない。日毎(ひごと)に入れ替わり、徹夜が出来ないと知ったが、他に何をする訳じゃない。
俺が不思議な状態になってから、一週間弱経つから、珍しがらない。
ただ和樹が
「かかり、一回でいいから『お兄様』と言ってくれないか？」
なんて言うので鉄拳を与えておいた。
こっからはイベントや行事が起こるまで書くこともないだろう。しばらくは気楽にいれそうだ。

しかし、そんな俺は、本当に甘い。

つまり、この身体は……　２ページ（後書き）

暇な時、ねり消しをいじってます。
ぐにぐにぐにぐにぐにぐに……
さて次回は、ややっこしい事このうえない！

つまり、この身体は……　3ページ（前書き）

秋になって、寒くなって、長袖をよくきるようになりました。ここから朝、布団からでるのが大変になりそうですね

つまり、この身体は……　3ページ

「おい！起きろ～布団剥いじまうぞ～」
朝、俺がこの後何も無いだろうと思った翌日。俺は優太の声で起きた。
「なっかなか起きねぇ奴は……こうだっ！」
「ぐあっ！」
優太の奴、まじで布団を剥ぎ取りやがった。
俺は丸まって、優太にじっとりとした目線を送る。と、
「お前……昨日女だったよな？」
不思議そうな目線で返された。
「……そうだよ」
見事な安眠妨害を受けて、不機嫌（ふきげん）な俺は、むすっとして言葉を返す。
「今お前女だぞ……」
「嘘っ？」
一瞬の不機嫌は一瞬で吹き飛んだ。
俺はベットから跳ね起き、ドタバタしながら洗面所の前に飛びつく。
「まじか…」
ひごとに性別が変わっていたのに、ある日俺は、二日連続女になっていた。

「二日連続女になったってお前…それにしては落ち着き過ぎてないか？」
寮の中で修が苦笑いして言う。他の四人は、
少し用事があるとかで学校だ。
あと、言い忘れてたが学校はもう終わってる
「落ち着き過ぎ？」
俺を見て落ち着いてる様に見えるのか？別に普通だと思うが…

「いや普通じゃない。女の時も風呂とかトイレとかある筈なのに、抵抗が無いお前は普通じゃない」
そう言われてみれば、俺は女の時に普通に風呂に入っていた。その時困った事といえば、髪の洗い方が分からなかった事ぐらいだ。
―（あの後、ネットで探すのに苦労した）
やり方には戸惑うものの、女の時に見た裸には、戸惑う事はしなかった。
そう修に言うと、
「お前、最近自分のタンスの奥の方。ひらいてねぇな？」
修は、確認をとるみたいに質問した。
「ああ」
質問に答えると、修は溜息をついた。
「猛。お前変な身体になってからそういうモンに無関心になったんだな」
「……えっと、つまり、俺は女にも男にもなれる様になった代わりに、俺は性欲が消え失せたと」
「そーゆー事だ」
そーゆー事と言われても、納得出来ない。
俺がしばらく考えていたが、今聞こうとしていたのは別問題だと思い出した。
「で、俺が二日続けて女になってんのはどうしてなんだ？」
「どうせあの徹夜だろ。お前あの時ぶっ倒れたからな。」
答えはすぐに帰ってきた。
俺はパニックにでもなっていたのだろうか、よく考えたらすぐに当てはまる事をしていたじゃないか。
「でも、徹夜した時の反動？は、どの位続くんだ？」
「そこはしらん。けど、男で徹夜した時と女で徹夜した時とじゃその反動とかは違うのかもしれないし、色々分からない事があるな」
う～ん。この後何回も徹夜すんのか？
それって結構辛いぞ……

俺がそんな事を考えていると
「まあ、身長の事はどうせもう止まってるだろうし、徹夜しても問題ねぇよ」
鉄拳？
「うぐうっ？」
修が俺に向かって身長の事を言ったので
「まだ止まってねぇよ！」
俺はすぐに反論した。
その時、飾達が帰ってきたのだろう。
廊下の方から声と、何かをぶつけている音が聞こえた。

つまり、この身体は……　3ページ（後書き）

性転換と言うジャンルは結構好きです。
戸惑ったり、精神が身体に対応してきた時の主人公の心境がとても良いんです。
さて次回は、飾達が持ってきた物の事。
お楽しみに～

つまり、この身体は……　４ページ（前書き）

１０月１０日の１０時１０分頃に第十話を投稿。
朝から来て下さった方には申し訳ないですが、これだけはどうしてもやりたかった。

つまり、この身体は……　４ページ

飾達が帰ってきたのだろう。
廊下の方から声となにかがぶつかる音が聞こえた。
「おっ帰ってきたか」
俺がそういった時だった。
扉が勢いよく開き、飾達も勢いよく出てきた。が、勢いよく開いた扉が壁にぶつかって跳ね返り、そのまま扉の方から出てきた燕に勢いよくぶつかった。
「ったぁ～？」
燕が頭を抱えてうずくまる。
凄まじく馬鹿なことをしている奴等は、なにやら直方体の箱を持っており、どうやらそれを運んできた様で、俺はその箱が何なのか気になった。
「おい、その箱はなんだ？」
俺が聞くと、和樹が待ってましたと言う様ににたあ～っと笑った。
「気になるか？教えてやろう！」
そう言って箱を勢いよく開けた。
箱から出てきたのは、やや明るい色のブレザー、綺麗で新しいＹシャツ、そしてチェックのーースカート。
ブレザーの肩に着いている、清涼学園の紋章（エンブレム）これはーーー
「清涼学園の女子制服だ！」
ここ……男子校だよな？
「なんで男子校に女子制服があるんだ？」
俺が素直に聞くと、
「ひごとに性転換するお前の為に、校長先生が協力してくれたんだ」
素直に優太が答えた。それにしても、いつ校長先生に相談したのだろうか？
「それよりさ、さっそく着てみろよ。それ」

修が俺に催促(さいそく)を促す。
「これ……サイズ合ってんのか？」
「かかり、身体測定受けてただろ？」
そう言えばそうだった。ほんの一週間前のことなんだよな。
「さ、俺らはお茶でも飲んで「出てけ」
ほかのやつらを部屋から追い出し、俺は箱から取り出した新品の制服に着替え始めた。
「あれっ？ボタンが左右違う？裏返し……じゃないし、地味に女子と男子って違うのか」
制服の違うところなんかズボンとスカートぐらいだと思ってた。
それに、スカートにファスナーがあるだなんて知らなかったし、色々分からない事があるな。
「おーい、終わったかあー？」
そう言うと同時に部屋に入って来る和樹。ノックとか返事を待つとかしないのか、こいつは。
和樹の後から他の四人も入って来たが、その歩みはすぐに止まった。
真っ直ぐこちらを見つめる五人。
「なんだ？やっぱおかしいか？」
俺が気になって聞くと
「いやいや、女子が女物の服を着ると、こんなにも違うのかと」
こんな答えが帰ってきた。
「すっげえな。スカート折ってないけど、先生達のセンスは意外と有るのな」
優太が感心している。たしかに、オシャレとはいかないが、ダサいワケではない。
驚いたな。
「明日お前は、これを着て学校来い！」
和樹が俺に人差し指をビシッと突き立てながら言った。
女子制服にまだ慣れていない俺は、たとえ女の身体でも、それは少し恥ずかしいと思っていた。

つまり、この身体は……　４ページ（後書き）

あらすじをほんの少しだけ変えました。
キーワードとかも増やそうとか思っています
さて次回は、入れ代わる身体のいやしい実験
お楽しみに～

つまり、俺が女にしたワケで…　１ページ（前書き）

初めて読んだ性転換物は、性転換と言うより入れ替わり物で、しっかりとした形を持っている訳ではありませんでしたが、やはりそこからハマったんだと思います。

つまり、俺が女にしたワケで…　1ページ

青い空、桜舞う道を越えて、新入生達は新しい生活を、新しい気持ちで迎える。

なんてゆう新学期の腐り文句が似合わなくなる程、桜はとうに散り切って、葉桜と言った方がいいくらいに青々としている。周りも高校に上がったばかりの時みたいにしてなくて、日々だるそーにしながら、学校に向かう。
教科書は全て学校に置いてあるし、学校の敷地内(しきちない)にある寮から歩いていてもくっ付いているこのだるさは、一体なんなのだろうか？
そんな事を考えながら、下駄箱に行くと、
「どうして男になってんだ」
昨日女子制服で来いといってたからだろうか、和樹が下駄箱にいた。
「しらん。朝起きたらこうなってた。流石に男の状態で女子制服を着る訳にはいかないだろう？どうやら、徹夜で強制的に変わったら戻らないのは、一日だけらしいな」
「強制的？……」
何故そこに反応するのだろうか？
和樹はそのまま走って行ってしまったので、俺は背伸びをし、上履きを取り出すことにした。
教室に入ると、飾と燕がきていた。
「今日は久しぶりに体育に出れるよ」
そんな事をいいながら、俺は席につく。
「そうだな猛。ただ今日は縄跳びだ、縄を忘れてたら意味ねぇよ」
俺は本当に甘かった。

そんなこんなで学校が終わり、寮に帰ったが誰もいない。優太すらいなかったのはどうしたのだろう？そう思った時だった。
「猛帰ってるかー？」
皆さん帰って来ました。
「おー帰ってるぞー」
俺は的当に返事をする。
「なんか菓子でも出そうか？」
俺がそう言って振り返ると、
「……お前らなにその顔」
全員、こっちを見てなにやらニヤニヤしている。何故だろう、気持ち悪い。
「なに考えてんだよ」
「明日の事」
「明日？」
はて、明日何かあっただろうか？俺が考えていると修が
「ああ……まさか現実世界でこの謎に取り組めるとはおもわなかった」
拳を握りグッとしながら言った。
「謎？」
「ああ…考えてみたら分からなかった謎……それが今は実験することが出来る！」
実験って……なにするつもりなんだ？
「猛？お前は、徹夜をすると、強制的に性別が変わる！」
和樹……恥ずかしいと思わないのか？
言葉と同時に体も動いてるぞ？
「強制的に……この部分が、この実験で一番重要なとこなんだ」
飾……何かに感染してないか？
なんだかこいつ等のテンションがおかしい。
話をするならいつもみたくその辺に座れば良いのに、わざわざ立ち上がって、熱っぽく語る必要はどこにもないだろう。

俺は何でそんなにテンションが高いのか分からなかった。
「お前ら…実験とか謎とか言ってるけど、それは一体なんなんだ？」
その言葉を待ってましたと言わんばかりに、
俺にビシッと指を突き立てながら言った。
「〇〇〇してる時に男になると、一体どうなるのかと言う偉大な謎に取り組めるのだよ」
……そんなピーとかバキューンとかで消されそうな単語を言わないで下さい……って
「なにするつもりなんだ？」
ちょっとまて、それは最悪な実験だ。

つまり、俺が女にしたワケで…　１ページ（後書き）

きっかけの物語は、進研ゼミの＋i紹介マンガでした。また読んでみたいですが、もう記憶にしかありません

つまり、俺が女にしたワケで…　２ページ（前書き）

１０月４日にスタートしたこの小説。
作中でも一週間経ちました。
ここから小説はすごいはやさで時間が進むんだろうなぁ。

つまり、俺が女にしたワケで…　2ページ

学校で俺は考えていた。
偉大な実験とやらに付き合えば、そりゃあもう大変なことになるだろう。
そうなるのは出来れば避けたい物で、俺はあいつ等に見つからない様にどうやって外泊届けを提出しようか考えていた。
外泊届けとは、その名の通り寮では無く学校の外で泊まるのを許可するものである。
外泊届けを出さなければ学校も捜索に加わり、逃げられる訳がない。ずっと学校にいれば、あいつ等に連行されるだろう。
外泊届けを出さなければ、逃げる術(すべ)は無い。問題は、外泊届けは寮に届けなければならない事だ。
俺は頭で考えた作戦を、頭の中で復習してみる。
まず、学校が終わったらすぐに外に出て、あいつ等が帰った後、寮に行く。
外泊届けは寮の入り口にいる人に出せば良いのだから、あいつ等が帰ってすぐなら部屋にいる筈だから心配ない。
だから、実験には協力しない！
そうして、終業の鐘がなるやいなや、俺は全速力で駆け出した。
階段を降りて下駄箱に着き、靴を取り出そうとしている時だった。
「お前の身長じゃ、どんな作戦を考えてようが、下駄箱(そこ)で止まるから意味ねぇよ」
呆れた目線を送って来る五人。

こうして、俺の計画は下駄箱によって阻止された。俺はやっぱり甘かった。

「さあ、もう諦めたらどうだ？」
刑事ドラマにありそうなセリフを優太が言う。そんな俺も、死刑執行を待つ犯罪者の様な心境だ。
「まあ逃げられ無さそうだけどな」
何回か逃走を試みたが、全て失敗した。
眠ろうとしたが、叩かれて起こされる。
もう、実験に強制参加させられそうだ。
「おい、そろそろ時間だ」
修が言う。何でこいつ等は俺の起床時間を知ってるんだ？
「ふむ、いよいよか…」
その言葉は、俺には悪魔の言葉に聞こえた。

色々言いたい事はあるだろうが、作者の年齢上書くことができないので割愛っ！

「ううっ……」
最悪の気分で目が覚めた。
飾が顔を覗き込む。殴ってやりたいが力が入らない。俺は体を起こした。とーーー
「その子は……誰？」
俺の視界に、さっきまでいなかった奴がいる。
「お前らは、とても素晴らしい結果をだしてくれた」
修が言う。いやだからあれはだれだ？
「紹介しよう。……燕ちゃんだ」
……あの娘が燕っ？

つまり、俺が女にしたワケで…　２ページ（後書き）

最近は、寒いなぁと思ったり、暑いなぁと思ったり、涼しいなぁと感じたいです。
さて次回は、二人目の女子生徒
お楽しみに～

つまり、俺が女にしたワケで…　３ページ（前書き）

空に浮かぶ雲は、不思議な模様を描いたりしています。あの雲何かに見えるんだけどな～って思ったり。

つまり、俺が女にしたワケで…　3ページ

俺の視界が捉えたその子は、髪が俺の女の時みたいに腰までは無く、背中で止まっている茶が少し入った黒髪だ。
なんと言うか、美人顔。でも笑ったらかわいいだろうなーってかおをしてる。
目線がどうしても行ってしまうのは、その胸。しかも完全な男物を着ているから余計に目立つ。
「えーっと、これが燕(つばめ)？」
俺は半信半疑で聞いた。着ている物はさっきまで燕が着ていた物だからだ。
「あぁ……燕だ」
そう言った和樹ですら、まだ信じていない様だ。
「じゃあ、お前らの見たままを教えろ」
今度はしっかりと聞いた。
話をまとめるとこうなる。
俺の身体(からだ)が変化する時、俺の身体が発光して、俺の姿が確認出来なくなるほどまばゆい光に包まれ、光が消えると身体が変わっているのと、黒いモヤの様な物が現れて、俺の身体を包み込み、モヤが消えると身体が変わっているのと、二つの変わり方があるのだが、今回はモヤが現れて、俺を包み込む時、そのまま燕ごと包み込み、モヤが消えると、二人とも変わっていたとゆう。
つまり、俺がいれば、人類股間計画(じんるいこかんけいかく)は完遂出来る。
「明日もしこのままだったら、一体どうすんだ？」
不安そうに燕が聞いた。しかし、聞かれても困る。
「学校……行くしかないだろうな」
俺は最初女の状態で行った時を思い出していた。一週間、経ったのか。

「燕、我慢出来なかったら保健室行っても平気だからな？」
俺はそうこえをかけた。
教室で燕はやはり、周りの視線を集めた。
俺の時も視線があった。ヒソヒソごえも聞こえた。何を言ってんのか分からないから、どういう考えで自分を見てるのか分からなかったから、怖かった。だからこう言っておいた。
「おお…ありがとう、どうしても我慢出来なかったらそうする」
燕はそう言ったが、相当こたえてるみたいだ。俺は飾に話しかけた。
「おい、お前先生に話しつけてどこかの一時間身体測定であいつ教室から剥がしてくれ。かなり参ってるぞ」
「お前みたいに神経図太くないからな、あいつ。分かった、武川に言ってみる」
飾はそう言って教室を飛び出した。
授業はまだ三時間目なのに、燕はもう気分が悪そうだ。この後、耐えられそうには見えない。その時
「一年三組、山瀬（やませ）　燕君、一年三組山瀬　燕君、至急保健室に来なさい。繰り返します。一年三組……」
飾が上手くやれたみたいだ。これで大丈夫だろう。俺はそう思ったが、フラフラ～っと教室を出た燕を見て、少し不安になった。

つまり、俺が女にしたワケで…　３ページ（後書き）

夢で見た事もないアニメを見たりします。
この小説も夢が元だったりします。
さて、次回は、慣れも疲れも
お楽しみに。

つまり、俺が女にしたワケで…　４ページ（前書き）

一度だるいと思ってしまうと、その後の事はできなくなってしまいます。だるいと考えない様にします、

つまり、俺が女にしたワケで…　４ページ

「なぁ、俺が元に戻る方法はないのか？」
寮に帰って燕が言った。かなり切実そうだが
「考えとしては、今度は逆で○○○をすれば戻るが、今のこいつのは多分ジジイより酷そうだからな」
修が希望もなにもない事を言う。
「つまり、俺は戻れないと」
燕がうなだれる。こいつが女になってから一度寝ていて、その時変わらなかった事から、燕は俺の様に身体が変わらない様だ。
空気が重くなる。飾が落ち着き無く動き回って、カレンダーの所で止まった。
「おい、でももうゴールデンウィークだぞ。燕、この期間を使って慣れておけよ」
この一言で、重かった空気がガラリと変わった。
「そうだ！ゴールデンウィークだ！」
「遊ぶぞ！遊びまくるんだ！」
「学校が無いんだ！はっはっはっ！」
ゴールデンウィーク……五月にある連休だ……そうだ！もう五月だ。
ふと燕を見ると、まだなにかあるのか、考えている。いつまでも暗いと殴りたくなるなぁ
「休みの事考えようぜ、不安だろうが」
すると燕は、
「あ、そうじゃ無くて、夜どうしようかと」
夜？何の事だ？
「俺の相部屋、和樹なんだよね…」
……それは確かに考えとかなきゃな。
そこにゴールデンウィークで盛り上がってる飾がやって来た。
「良く見るとお前ら背丈ほとんど一緒だな」

飾は何故か陽気だが、まあ確かに、今まで見上げていたかおが、目線の先にある。
「お前身長幾つだった？」
「１５５」
短く答えがかえってきた。それを聞いて俺はガッツポーズを取る。
ついでに踊り出す。
「おい猛。お前いつ頃家に行くんだっけ？」
優太が聞いてきたが、俺の耳には入らない。
「聞けっ！」
頭を思いっきり叩かれて、俺の喜びの舞は終了した。
「家族のとこにはいつ頃いくんだ？猛？」
家族は、俺が女になったと言う事を、学校から連絡で聞いているだけだ。だから俺は家族に、ゴールデンウィークには帰ってこいと言われている。
「早めに行っておくよ。」
俺はそう言って、修達の方を見ると、和樹が縄で縛られていた。

次の日。俺達は、優太の荷物と、燕の荷物を運んでいた。昨日、和樹と同室だと危ないんじゃないかとなったからだ。（男と女なら、誰でも危ないだろうがな）
そして今日、寮母さんに許可を取って荷物を移動させる事にしたのだが、突然の事で、俺達が荷物を運ぶ事になったのだ。
しかし、日にちを間違えたな。徹夜してから二日経ったから、今俺の体は女だし、今日はお天道様も頑張って、気温が三十度まで上がる様だし、その中で働くと、汗がすごい事になるのだ。重たい物は男子共に任せて、俺と燕は小物を運んでいる。
因みに、燕は女になってからも燕だ。

俺の時みたいに名前を変えようとしていたが、燕と言うのは女の子の名前でもおかしくないだろうとの事で、燕のままだ。
「ほら後それだけだよ～頑張れ日本男児～」
なんて言葉とともに、最後の荷物が運ばれ、もう夜になっていたが、一応引っ越しは終わった。クタクタに疲れてすぐに寝ようとしていた燕を、風呂へと押し込んだ。俺も出来れば寝たかったが、風呂に入らないとまずいと思っていたので、燕が出た後すぐに入り、シャワーで済ませ、倒れる様に眠った。
明日は、家族に会いにいくーーーー

つまり、俺が女にしたワケで…　４ページ（後書き）

ゲームをしている時のタブーは、やってるときに、これ将来役に立つんだろうかと考える事です。
さて、次回は、家族登場。
お楽しみにー

つまり、ごーるでんうぃーく？　１ページ（前書き）

今日この小説は１００００アクセスを突破しました。ものすごい感動が心の底から溢れています。
ありがとうございます！

つまり、ごーるでんうぃーく？　１ページ

久しぶりの自分の家。
その前で、俺は考えていた。
前に来たメールでは、俺が女になったと知った、と言う様な内容だった。しかし、実際俺は男になったり女になったりと、色々面倒な身体になったのである。家族がこの事を知らなかったら、俺の口から説明する事になる。
だが俺は、女になる瞬間、男になる瞬間、肝心なとこは聞いた話だ。上手く説明出来るだろうか？
まあ、考えても仕方がないだろう。俺は扉を開いーーーカギが掛かってる。
気を取り直して、俺はインターホンを押した。
しばらくして、カギの空いた音がして、扉が開いた。
「猛？」
「よっ母さん。帰って来たよ」
玄関で母親と少し話してから、俺は中に入りリビングに向かった。
「久しぶりのアターック！」
「ガッ？」
弟が蹴りをいれて来た。公立の中学に通う弟は、空手部に入ってるとかで、成果を見せ付ける様に俺にぶつけて来たのだ。がはっ！
家に帰って来て一分も経ってないのに床に手を付けさせられるとはな。
「いてーよ。阿呆が…」
俺が腹をさすってるので、つまらないのだろう。弟が俺の前に来て、わざとだろう。見下ろした。因みに弟は１６７ｃｍある。
「おい、わざと見下ろすな、お前の机の下から三段目の奥にある菓子食い尽くすぞ」
「なんで知ってんの？」

そう言って弟は二階に駆け上がった。リビングを見渡したが父さんがいない。ゴールデンウィークなのに忙しくしてるみたいだな。
さて、俺も自分の部屋に行くか、
「猛。さっき翔(かける)の声がしたけど、何かしたの？」
多分お菓子を移動させてんだろう。
「別に、なんでもないよ」
俺はそう言った。
「そう。学校からね、お前の事を聞いてたけど、その、女の子にもなるってのは、やっぱり本当なの？」
にもーーーと言う事は、俺の事はしっかり伝わってる様だ。
「まあ、ホントかな」
俺はそう言って自室に向かった。

自分の部屋の扉を開ける。そこは、前と変わっていなかった。小学校のころの、自分の部屋。清涼学園で寮に入ってから、たまに帰って来ているが、あえて部屋を変えてない。
最後に来た時から、まだ一ヶ月なのにな。
本当に、懐かしい。
きっかけがあれば、昔の事も思い出せるんだな、柴田、山陰、朝道、桑原。
思ったより、思い出せた。

夜、俺は明日がどうなるか、と考えた。明日は女になるからだ、家族は一応知っているが、それでも現実として来るのは重たいだろう。
それでも、家族揃った晩ご飯は、とってもうまかった。

つまり、ごーるでんうぃーく？　1ページ（後書き）

お気に入り登録数も増えて、嬉しいです。
初めての小説でこんなになると思ってませんでした。

つまり、ごーるでんうぃーく？　２ページ（前書き）

小説執筆場所は主に布団の上です。ふっかふかでないのが残念です

つまり、ごーるでんうぃーく？　２ページ

目が覚めた。
俺は思いっきり伸びをし、手櫛で髪を撫でる。それから俺は階段を降りた。そして、
「うわっ！」
驚いた。なんてったって家族揃ってソファーに座り、皆一様にこちらを見ていたからである。
「何してんの？」
たまらず俺は聞いた。だって不思議なんだもん。
「ふむ、これが女の子になった猛か」
父さんが顎に手を当てて言う。しかしその姿は、全く渋く無く、ただの太り気味のおっさんだ。
「これが兄ちゃん？すっごく可愛い顔してるよ」
おい翔、俺は性格もいいだろうが。
「本当に……本当なのね」
母さんだけがまともなのか、未だに信じられないのだろう。
ところがすぐに、
「でも、なんで服は変わらないの？やっぱり戦隊物とかの変身とは違うのかしら」
目で見た物は全て信じ、ヒーロー物のドラマを見ている母親に戻った。ホント色々変わらないな。
「猛。もしかしてあんた、学校でも男物着てるんじゃないでしょうね」
そんな質問朝からするのか。
「まあ、制服以外はそうだな」
俺がそう答えた瞬間、うちの母親は顔を輝かし、ソファーに座っている面子（めんつ）に命令する。
「お父さん車だして、こうゆーのはさっさとやった方がいいわ、猛

はさっさと朝ご飯食べて、久しぶりの家だからって、昼まで寝てないで頂戴。翔。ついでにあんたの服も見に行きましょ、みんな早く準備して！……さてと、ポイントカードどこやったかしら」
ともまあ、急に慌ただしく家族が動いた。
「ところで、母さん。車を出すって何処(どこ)に行くんだ？」
父さんが聞くと、
「この娘の服を見に行くの！」
母さんは俺を指差して言った。

やや大きめのショッピングモールで、神鎌家の母親はウキウキしながら服を選んでいる。
今まで家に女の子がいなかったから嬉しいのだろうが、歳考えろ四十後半。
「今日お母ちゃんどうしたの？」
翔が聞いて来る。俺は
「暴走(ぼーそー)してんだよ。」
と言っておいた。すると母さんがこっちに手を振っている。俺を呼んでるらしい。
俺が近づくと
「とりあえず、これとコレと此れとこれとコレを試着室(そこ)で着て」
と、かなりの量の服を渡されて試着室に押し込まれた。普段ならあり得ない早業に、俺は呆気に取られた。
「ほら、早くして」
急かすのが早い！
じゃなくて、この服はどうやって着るんだ？俺は色々迷った末、なる様になれと適当に着た。その後母さんに怒られて、服を変える度

に注意され、着方を直し、また新しい服を渡されてと言う行動が、ずっと続いた。

「はぁ……」
ベンチに座り、俺は溜息をついた。
足下には、色んな服が入ってる紙袋がある。
女になるのは一日起きなので、そんな量はいらないと思ったので、服を色々削ったが、
紙袋はとても重たい。
母さんは、いま翔の服を見ている。翔はまた服が小さくなったらしい。俺はここ数年、服がきつくなったと感じただろうか？
「猛、お前やっぱり、明日学校に戻るのか？」
不意に父さんが聞いて来た。
俺はあぁ、と答えた。
ほんの少し、父子で話した。懐かしい話だ。
「後、時間的に門限間に合いそうにないんだよね」
柱時計を見ながら俺はつぶやいた。母さんはまだ翔の服を見てる、
「母さんには、俺から後で言っておくよ。まだ間に合うんだろ？」
父さんが言った。
俺は立ち上がって
「正月…最低でも正月には、帰れるから」
そう言って、紙袋を持って学校に帰った。
ショッピングモールで、しかも父さんにしかきちんと別れを言えなかったが、また集まれるから、気にしなかった。

つまり、ごーるでんうぃーく？　２ページ（後書き）

二度寝の心地良さはやっぱり半端無いですね
さて、次回は、たしなみでしょうが
お楽しみ、に。

つまり、ごーるでんうぃーく？　３ページ（前書き）

実はこのゴールデンウィークが終わると、なんにもネタがない状態になります。
今一生懸命探しています、ネタ。

つまり、ごーるでんうぃーく？　３ページ

「っと、おーい帰って来たぞー」
俺はなんとか門限に間に合い、寮に帰って来た。部屋が暗かったから、燕は寝ているのだろう。俺は中に入って持ち物を軽く整理し、ベットに向かった。そして疲れも手助けしてか、簡単に眠りについた。

次の日、
俺は朝早くに目が覚めた。
ゴールデンウィークは、休みが五日間だが、その間の宿題の量は半端じゃない。
とても五日で終わる量じゃないから、それをかたずけないとな。
そう思ってベットから降りると、燕の顔が目に付いた。そして、ベットに広がる髪を見て
ガンッ！
「ったぁ！」
殴り起こした。
「ったいなぁ、なにすんだよ」
頭をさすり、涙目になって燕が言う。
「こっちが聞きたい。その頭はどうしてそんなになってるのかと」
俺は燕の髪を見た。所々ゴワゴワしていて、毛先に行く程酷くなっている。多分面倒くさがって適当にやったんだろう。切らないのは、他の四人に言われたからだ。きっと。
「頭？別に普通だろ？」
なにも知らないでそう言う燕の頭を、俺は掴んで洗面所まで引っ張った。
「お前も学校で色々語ってたろ、髪は長くて綺麗なのが良いって、だのに、なんだこの痛み切ったこの髪は」

確か四日ぐらい前は綺麗に背中に降りていた。元の髪質は良い方なはずだ。
「いや、なんかグチャーってなるし、今休みだからさ」
今はパソコンがあるのに、こいつは怠けたのか。
「洗い方教えるから、頭出せ。」
洗面台に首を出させ、上からシャワーをかける。解りにくいなら、頑張ってくれ。
風呂場から取って来たシャンプーで、燕の髪を洗う。風呂に抵抗でもあったのだろう。結構汚れている。シャンプーを二度がけして、リンスをする。インターネットと実体験で学んだ事を思い出してやった。
終わったら、ドライヤーでしっかりと乾かし、その後燕に洗い方を説明した。みっちり。
「あー宿題やっとこうと思ったんだがなぁ～」
俺はふーっと息を出しながら言った。
「ところでさっきから気になったいたんだが、あれはなんなんだ？」
燕が指さした方向には、俺が昨日おいて置いた紙袋。
「あぁ、昨日家族と買い物に行って買った服だよ。見てみるか？」
俺がそう聞くと、燕は頷いたので、俺は紙袋を手に取って、中の物を取り出した。
「これ……女物？」
中から出て来た服に、燕は戸惑ってるのだろうか。目を丸くしている。
「別におかしくないだろ。まあ今日は男だしな。燕、お前きてみるか」
俺は手元にあった肩の出るタイプのシャツを見せた。燕はふるふると首を振る。
「これは？」
次は普通のTシャツとスカート。燕はこれならと思ったらしい。ゆっくりと頷いた。

燕に服を渡して、着替えてる間に服の整理をした。そのとき燕が胸の部分を抑えて
「……キツイ」
とつぶやいた。ああキツイんですかいキッショウ。

「ふーん、中々、いやかなり似合ってるな」
女物を着ている燕を見て、和樹が言った。
「確かに映えてるな」
修も賛同している。
俺は宿題を片付けている。
燕は、慣れないスカートが気になってる様だ。
「よし！私服が手に入ったなら明日ゴールデンウィーク最終日、遊びに行くぞ！」
飾はそう言った。
俺は、数学の文章題にてこずっていた。

つまり、ごーるでんうぃーく？　３ページ（後書き）

女になって、とくくられる話が一通り終わると、後は普通の学園物になりますね。
何か工夫出来ればいいです。
さあ、次回は、無駄？

つまり、ごーるでんうぃーく？　４ページ

遊びに行くと言われた。
言った本人は、すごい事を思い付いた子供の様な笑みを浮かべている。
俺らはと言うと、突然の大声に何事かと驚いて固まっていた。
「遊びに行く？明日？」
修が和樹に聞いた。和樹は笑みを崩すことなく
「ああ、明日だ」
普通に返した。修が反応出来てない。
俺は宿題をしていた手を止めて、和樹に聞いた。
「遊びに行くって何処に行くんだよ、そしてなんで遊びに行こうと思った？」
和樹は俺の方を向いて
「何処かは後で決める」
と言った。決めてないのかよ。
「なぜ明日遊びに行こうと思ったか？それは簡単。お前らが女物の私服を買ってきたからだ！」
でーんと言う効果音が付きそうな宣言に、俺らはただ呆れていた。
「この服、たけ…かかりのなんだけど…」
燕が服を弄りながら言う。
「確かにこの服は俺の物で燕のサイズに合ってるのは無いぞ」
俺は和樹にそう言った。
「大丈夫だって。着れてるじゃん」
いやそう言う問題じゃねぇよ。
燕が着ている俺のシャツにプリントされているウサギさんがすごい事になってるのに気づかないのか？
「で、遊ぶ場所はどうするんだ？」
優太がソファーから聞いた。ここは俺らの部屋だ。一応。

「それなんだが猛。お前女になってやりたい事とか無いのか？」
質問を言ったのは優太のはずなんだが、和樹は俺に言ってきた。燕が何故か恥ずかしそうにしていたのが気になったが今は関係ない。
「そうだなぁ。あんましないけど、強いて言えばカラオケで高音の歌を歌う事かな」
俺が答えると一瞬妙な空気になった。しかしその後には
「まあ、考えてみたらそれも女になってやりたい事ではあるな」
「よし！じゃあ明日カラオケで盛り上がろうぜ」
パーティーの様な盛り上がりを見せたので有った。そのパーティーは夜まで続き、俺らは寮母さんに怒られた。

「起きろ。服どうすんだよ。まだ決めてないぞ」
次の日、俺は燕にゆさゆさと起こされた。
「朝から服決めか？お前段々変わって来たな」
起こされて少し不機嫌な俺は燕に言った。
「な…変わってないよ…てか、まだ二週間だからな？」
スルーする訳でもなく、突っ込んで来る訳でもなく、真面目に返された。
どうすれば良いのかわからない俺はとりあえず起きる事にした。
たった十着程度の服を選ぶのには、そう時間がかからなかった。だって、俺も燕も、まだ女物の服に慣れていないからだ。
服を決めて、食事を取っていると、飾達が来た。
「もうちょっと可愛い服なかったのか？」
俺らの格好を見るなり飾が言った。
「残念ながらこれが限界だ」
俺らの格好は、はっきり言って男物に近い。
まだスカートに慣れたワケじゃないし、街中で着るのには抵抗がある。

だから、シンプルな感じになっている。
「まあ気にしないでカラオケ行こうぜ。昼のフリータイムに間に合わなくなったら大変だ」
優太が腕時計を見ながら言った。フリータイムに間に合わなくなったら、金がかかる……俺らは急いでカラオケに向かった。

カラオケは、別に大きな店ではなかったが、別に普通に楽しめた。高音キーの歌を歌いたかったが、残念な事に曲が分からないのだ。アニメのオープニング曲などを歌おうとしたが、一番と二番でメロディが違うと大変な事になった。半端な感じになってしまったのがなんか辛い。
そんなこんなでゴールデンウィークは過ぎて行った。

つまり、ごーるでんうぃーく？　４ページ（後書き）

勢いで書いたり、考えて書いたり、自分の中でも書き方って違うんですね。
次回、季節というもの。
お楽しみ。

つまり、落ち着きました　1ページ

「はい、ではこれでよろしいですね？」
昨日まで降っていた雨も上がり、まだ所々に水たまりがあるが、それでも久し振りに良い天気だ。すっかり緑になった桜も、太陽の光を浴びて生き生きしてる様に見える。
「はい、ありがとうございます。」
気温が高くなって来たが、まだまだ暑くは無い。それよりは、湿気が気になって来る。
「おーい、燕～届いたよ～」
俺は今受け取った荷物をリビングに運んで、燕を呼んだ。すると風呂の方から燕が濡れ髪を拭きながら出てきた。
「届いたって、何が？」
燕が髪を拭きながら聞く。俺は届いた荷物を解いて、燕に見せるように蓋を開けた。
「夏服。」
今は、六月だ。

「へえ夏服かぁ。もう届くんだね。ところで、箱が三つあるのは？」
燕が箱わ覗き込みながら言った。リビングにおいてある箱は、燕の言うとうり三つある。
「俺のと私のとお前のだと思うよ」
ゴールデンウィークから現在までの約一ヶ月。普通に日常は進んでいた。そりゃ、学校の方で色々あったりしたが、大したじゃない。大した事と言えば…
「じゃあさ、取り敢えず着てみよう。サイズ合わせてあるかどうか確かめるよ」
「その前にお前変わっておいた方が良い」

この身体、実は自分の意思で男でいるか女でいるかが決められた。
ただ徹夜した時は相変わらず変わる事が出来なかった。では徹夜しなければほとんど男ですごせるかというとそうではなくて、どうやら男で過ごした時間と女で過ごした時間のバランスらしいのだが、詳しくは分からないでいる。
取り敢えず俺は女の体だ。
シャツも半袖になると雰囲気違うなぁと思っていた時だった。
「おーいお前ら元気してるぅー？」
和樹がドアを開けて飛び込んできた。
俺らは夏服に着替えてる最中で、その格好はーーー
「やあああぁぁぁああ？」
俺の横で悲鳴が上がり、俺は部屋にやって来た男子に向かって拳を勢いよくぶつけた。

「なにもここまで…」
普段着に着替えた俺らの横で、和樹が倒れている。修は、和樹のほうをチラッと見ながら言った。
「しょうがないだろ？着替えの最中にいきなり入ってこられたら、元男子でも動揺するよ」
燕は下を見ながら言った。
俺は考えたら手を出す理由が思いつかなかった。反射的に不届者を殴っていた。
だがこの不届者も悪いワケで、気にしないでおこう。
「でももう夏かぁ～まだ四月に感じるな」
修が麦茶を眺めて言う。氷の入って無いコップの中で、麦茶は残り半分くらいだろう。その残りを一気に飲み干して、
「そういやお前らテストどうだった？」
ぶらっきぼうに嫌～なことを言った。
「お前、なんで今そんなことを……」

修を見ると、悪気がなさそうな顔をしている。そう、なさそうな顔だ。
実際あの状況でテストの結果が良いやつはいない。突然自分が女になって、そしたら今度は友人を女にして、家族に説明しに行ったら女物の服を買い、一段落と思ったら本当は自分の意思で身体を変えられますってなって、テストで良い成績なんか無理と言うものだ。
俺が愚痴っていると、燕が
「何言ってんの、お前結果貼り出された時ちゃんと名前書かれてたじゃん」
睨んで来た。
「でも二十点落としてんだよな」
「普通あり得ない事が起こったのにちゃっかり勉強して、二十点しか落とさないやつはいないとおもう」
睨み続ける燕を無視して、俺は夕飯の準備に取り掛かる。
不思議と落ち着く、ただの日常だ。

つまり、落ち着きました　　1ページ（後書き）

段々文章力がなくなっている気がします。
何とか立て直したいです。

つまり、落ち着きました。　２ページ

外は、雨が降っている。
昨日あんなに晴れていたのに、外は雨だ。
嬉しいのは、傘もさせない土砂降りでなく、傘をさそうかどうしようか迷う霧雨でも無い、雨らしい、静かな雨であることだ。
俺は大きく息を吸って目を閉じる。しばらくすると、ほんの一瞬、体の感覚が消える。そして目を開ければ鏡の中に、男の俺がいる。
自分の意思で変わるときは、落ち着いた状態出ないといけない。だからだろうか、最近、何事も動じなくなった。
「いや、元々だと思うよ」
いつの間にか燕が後ろに居た。湿気を散々吸ったようで、髪が所々跳ねている。
「雨なんか嫌いだ〜」
寝癖を直しながら燕がぶーたれる。
「知らないな、俺は。」
「お前も寝癖直しの大変さを知っておけよ」
「女の時は髪質が凄いから、寝癖が出来ない」
「ずるくないその髪？」

「雨は別にいいんだけど、ズボンの下が濡れるんだよな」
今度は和樹がぶーたれている。
傘をさしての登校。あじさいではないが、道の横にある草木が綺麗に見える。
女の時にこの状態で傘なんか回したら、結構絵になるんじゃないかな。自惚れか。

「暑いのがこの後来るんだもんな。涼しいって気分、今のうちに味わっとかないと」
飾はそう言って傘を思いっきり回した。
「なっ、　いきなり回すな！水がかかっちまったじゃねぇか！」
飾の横に居た修が飾を睨む。二人のさしている紺と茶の傘が、俺の前で閉じたり開いたり回ったり、どうやら水のかけあいをしている様だが、お前らいくつだよ。
そうしてるうちに、学校についた。
「ここに来る度に思う。なんで俺だけ取りにくい場所なんだろうな」
下駄箱を俺は恨めしく眺めた。
「普通は最上段でも取れるぞ、お前の背が低いだけだ」
優太にそう言われたが、必死に上履きを取っている俺には聞こえない。
教室。学校と言うのは案外暇でホームルームが始まる前ぐらいしか面白い事がない。
そのホームルームが始まる前、俺は携帯を見ていた。
「ん。今日の占いか…」
検索エンジンのサイトの、エンターテイメントコーナーの、占いと言う文字が目に付いた。
「占い？面白そうだな。ちょっと見てみようぜ」
飾が後ろから言って来た。人の携帯を後ろで覗き見るのはマナー違反だろう。
「おい早く開けよ」
飾にせかされて俺は占いページを開く。えーっと、射手座は……
「五位か」
半分より上だが、微妙な順位だな。
「占い？どれ……うっ十位」
燕が後ろから言って来た。こいつらマナーがほんとになってないな。
「飾、牡羊座最下位だぞ。」
「……知ってるよ」

割とこういうのは気にする方なのか？
飾はおいて置いて、俺は射手座の詳しい結果をみた。そこには、思
っても見ない事が起こるよ、と書かれていた。
思っても見ない事は、二ヶ月前に起こったよ。

つまり、落ち着きました。　２ページ（後書き）

何故か第七話がこの話で人気です。
どうしてか解りません。

つまり、落ち着きました。　3ページ

学校が終わると、俺らは自然と集まって、帰る事になる。
下駄箱からでたところで、俺は空を見上げた。
「だいぶ雨弱くなったなぁ。まだ降ってるけど」
そう言って傘を差そうとした時だった。突然、どこから飛んできたのかボールが俺の頭に直撃したのだ。
「ぐあっ！」
バランスを崩した俺はそのまま倒れ、目の前に合った水たまりにダイブした。
「おい猛。大丈夫か？」
修が顔を覗き込んでいる。
「なんとかな…」
俺はそう言って笑顔を作って見せた。
「おーい、お前らボール投げんなー」
飾が下駄箱の中に向かって言った。どうやら廊下でボールを投げ合ってた様だ。
「飾。お前もボールを投げんな」
優太が飾を注意した。
「猛、お前制服凄い事になってんな」
水たまりにダイブしたんだ、汚れて当然だろう。だがここまで見事に汚れるとはな。
「こりゃクリーニングしなきゃってレベルだろ」
修が俺の服を見て言った。俺は、朝見た占いを思い出していた。
確かに、思っても見ない事が起こった。

次の日。
男物の制服をクリーニングに出しているので、必然的に俺は今女になっていて、女子制服を着ている。
「全く、今日も雨とはね」
燕が横でぼやいてる。傘をさし、静かに雨の音を聞いていれば、雨もそれ程嫌じゃないと思うのだが…
俺がそう言うと、
「歩きにくいの嫌なんだよ」
と燕が言った。最初はよく分からなかったが、歩いていると、ひざやふくらはぎあたりに水がかかってきた。
靴についた水が、足を上げた時に飛んで、そのままひざにぶつかって来ている。
「何、これ？」
不快になって来た俺は燕に聞いた。
「男の制服はズボンだからな。気が付かなかったんだと思う」
この答えに、俺は納得した。
「女の子と歩き方もやっぱ違うんだね」
「確かに、小さな事が違うんだもんな」
青と赤の傘の中で、俺達は呟いた。

「猛、どうしたの？」
一人の男子が話しかける。教室で、俺は周りに注目されていたらし

い。
「猛さ、昨日制服汚れてその事で色々やって疲れたみたい。しょうがない事だから、そっとしておいて」
なんで注目されていたか？それはその時、真ん中の列後ろから三番目の席の奴、つまり俺が眠っていたからだ。
説明になるかは分からないが、俺の体が変わる時は、基本寝る時である（最近は自分の意思で変わっているが）。そして俺は今日、女子制服で登校している。学校について疲れて寝てしまったら。
つまりそう言う事である。
そうして俺が眠っていた時に、一人の生徒がやって来た。
「このクラスに、女子生徒がいるそうじゃないか！」

つまり、落ち着きました。　３ページ（後書き）

総合ＰＶが１５０００、総合ユニークが２５００！
テスト期間だってのに、泣けて来ました。

つまり、落ち着きました。　４ページ

朝のホームルームも始まっていないのに、疲れた体を休める事なく、俺は叩き起こされた。
眠い目をこすり、周りを見ると、俺が起こされた原因であろう人物が目に付いた。
原因と思った理由は、中の上に入るであろうその顔が、見ているだけで腹が立つ笑顔をこちらに向けていたからである。
俺は立ち上がるとそいつの前に立って－－－－
「君かい？このクラスでおぶぅっ！」
鉄拳を顔に叩きいれた。殴られた男は、そのまま仰向けに吹っ飛ぶ。
「おいかか・・・猛！いきなり殴るなよ」
飾が言った。倒された男は、周りに起こしてもらっている。
「なんかつい・・・」
俺は頭をかいた
「とりあえず、起きたんなら女になっとけ。変だから」
飾るに言われて俺ははっとした。それはやばいな。
「えぇっと、大丈夫ですか？」
燕が俺が殴った男に聞いた。男は相変わらず腹が立つ笑顔だ。
「大丈夫だよ。それより二人に、お願いがあるんだけど・・・」
男が笑顔のまま言った。こいつが最初に言った”このクラスに女子がいる”って言葉から、俺と燕に用があるようだ。
「お願い？」
「そうだ。君たち、美術部まで来てくれるかい？」
「嫌だ」
男が顔をあげたまま言ったのが気に食わなかったので、俺は即答で答えた。すると燕が
「お前顔殴っちゃったんだから、拒否するな」
なんて言ってきた。お前いつか後悔すんぞ。

ただ、殴ってしまったことは事実で、殴った理由も起こされたからでは、明らかにこちらが悪い。
少し考えて、俺は言った。
「どうして美術部に行くんだ？教えてくれ」
お願いを一瞬で拒否された事にダメージがあったのか、男はしばらくボーっとしていたが、何回か声をかけると元気を取り戻して
「それは君たちにえのモデルになってもらいたいからさ！」
拳をグッと握って言った。
「えっ？モデル？」
燕が驚いている。俺はさらに質問した。
「そのモデルってのは、なんの絵のモデルだ？」
「申し遅れた。僕は佐久間修一だ」
俺の質問を無視し、この男、佐久間が言った。
「僕が君たちにお願いしたのは、今日の朝にビビーっときたからさ。雨がしんしんと降る中で、君たちを見つけた。僕は驚いたよ。傘を持って雨の中を歩いているだけなのに、心に来るものがあったんだから！でも何か足りない。僕はそう思った。そしてきずいたのさ！あれでさらに手前にアジサイがあったなら、素晴らしいものになると！だがこの学校にはアジサイがない。けれど大丈夫！僕が所属している美術部の部員たちなら、君たちをモデルに最高の絵を描いてくれるから！」
非常にながったるしい文章を語ってくれた佐久間少年は、そう言って俺らの腕を掴んで歩きだした。
「「ふわっ！」」
俺と燕は、突然引っ張られてよろけるが、佐久間少年はお構いなしだ。
まぁ、あの話では、変なこともないだろうが。
どうでもいいが、俺と燕の腕をつかみ、強引に連れ歩いているこの佐久間少年に、鉄拳を与えてもいいのだろうか？

つまり、落ち着きました。　４ページ（後書き）

実はゴールデンウィークと今回の話は、当初物語にありませんでした。
でも最初の形で進めると四月の後、七月に…

つまり、落ち着きました。　5ページ

引きずられる様にして、俺らは、美術部部室の前にきた。
「ちょっと待ってておくれよ」
佐久間少年がそう言って部屋の中に入って行った。
しばらくして、佐久間少年が部屋から出てきた。
「入ってくれ」
力が抜けた様な声で言った。中で一体何があったのだろうか。
俺らが中に入った。中は結構明るくて、清潔感があって、それでいて何か落ち着くものがあった。
そしてその中に、優しそうな顔をした人がいた。男の人なんだが、まとってる雰囲気は母性的な物がある。ネクタイの色を見る限り、二年生だろうか？
「君たちが最近噂の女の子たちかい？」
優しい顔から発せられた声は、とても優しいものだった。これだけで、たいていの人なら心を許してしまいそうだ。
「しかしよく来てくれたね。佐久間君、すこしおかしなところがあるから」
少しをすっごくに頭の中で変換して、俺はうなずいた。俺らの後ろで「芸術家は少しおかしいくらいがいいんだ」とか聞こえてるが、無視。
「僕は森山大地（もりやま だいち）。この美術部の部長だ」
森山さんが言った。この人が部長なら、美術部員は幸せだろう。
「部長さんなんですか？！」
燕が驚いて聞いた。今日コイツ驚いてばっかな気がする。
「ああ、こんな僕だが、部長をさせてもらっている。ところで、お願いの中身は知っているのか？」
「あっ、はい。確か絵のモデルって……」
「そうか、知っているなら話は早いね。放課後、美術室（ここ）に来てくれ

るかい？」
森山さんがそう言ったのを聞いて、俺は朝のホームルームが始まる前だった事を思い出した。

放課後、俺らは、言われたとうりに美術室に来ていた。俺と燕はモデルをするため、他の四人は冷やかしの為にいる。
朝と違って、部室には結構な人がいて、俺らの方を見てヒソヒソ言い合ったりしている。
「や、遅くなった。悪いね」
ふと後ろから優しい声がしたと思ったら、森山さんがいた。
「森山部長。こんにちは」
あちこちから声が聞こえて、この人はやっぱ人望があるなと思った。
「それじゃ、え～っと…」
「あっ、神鎌（かみかま）　たけ…かかりです」
「神鎌さん。あと…」
「山瀬　燕です」
「山瀬さん。傘を持って、庭園のとこにいてくれるかい？ああ佐久間君。雨降ってるから道具を、後、篠田（しのだ）も、準備を手伝ってくれ」
テキパキ指示を出す森山さん。佐久間少年と篠田とよばれた人が、立ち上がって何やら大きなセットを持ち出す。
「手伝います」
冷やかしの連中も手伝いに行った。
「俺らも庭園に行こう」
俺がそう言うと、燕は頷いた。

つまり、落ち着きました。　５ページ（後書き）

猛達以外のキャラ（先生達を除いて）実は作中で十一月頃にやっと登場する予定でした。
でも彼らだけでは、つまらなくなってそうです。
次回。筆を取って
お楽しみにー

つまり、落ち着きました。　6ページ

清涼学園には、男子校にも関わらず、様々な設備がある。庭園(ガーデン)もその一つだ。
学園の一角にあるこの庭園は、生徒の憩いの場所として作られた。
季節によって違う花が植えられていて、年間で三百種以上植えているとか。
まぁ、花を見に来る生徒なんて、選択で理科を取ってる奴ぐらいだけどな。
「あの人達、凄いね」
「ああ、何してんだか分からないけどな」
傘を持って、雨の中庭園の入り口に立って森山さんを待っていた俺と燕は、雨に打たれながら、大きなセットを運んでいる美術部員と冷やかし四人を見ていた。セットの横で指示を出していた森山さんは、俺達に気がつくと
「やあ、待たせたね」
と言って来た。真顔で。
「大丈夫ですよ。ところで、あの大きな物はなんですか？」
俺は森山さんの後ろのセットを指さした。
「ああ、あれは画材が雨に濡れない様にする為の物さ」
森山さんが答えると、今度は燕が言った。
「部員は思いっきり濡れてますけど…」
「大丈夫！素晴らしい絵が書けるなら、多少濡れたって構わないさ！」
笑顔で言う森山さん。かっこいいな。
その後ろで和樹達が、俺等は構うと目線を送っているが、無視だ。
「さあ、早く準備しよう。雨が上がったらもったいないからね」

しばらくして、俺と燕の前に大きなセットが立てられた。はっきり言ってキャンプなどで使うタープで、その中に森山さんと美術部員が画材を組み立てている。
組み立て終えると、森山さんがこっちをみて、
「ええと、こんな感じで傘を持って」
と、ジェスチャーしながら言った。俺は森山さんがした様に、傘を両手で持つ。肩に傘を当てながら、右手で支えて、左手は添える様に。
「そう。そんな感じで、向きはもうちょっと右向きだな…そう。そんな感じ。山瀬さんは、こうやって、それで神鎌さんの横に行って。そこ！そこに立って」
森山さんの指示に従って、俺等は動いた。
「神鎌さんは、こっちをみて、不思議な物を見る感じで、…うーん、少し首動かしてくれる？…うん。それが良いな。そのままでいてね。山瀬さんは、神鎌さんの方を向いて、笑顔で、よし！じゃあ二人とも動かないでね」
まさか表情まで指摘されるとは、俺達が表情を勘でやってると、満足した様にうなずいて絵を書き始める森山さん。その後ろでこっちをみて笑いを堪(こら)えてる飾達。正直、殴りたい。
そこから長い事俺と燕は動かなかった。いや、動けなかった。森山さんがいきいきと筆を走らせているのを見ると、動こうにも気が引けてしまう。そんな光景を見続けて、雨が弱くなったとき、
「出来たっ！」
森山さんが言った。
ようやく、ようやく終わった。
フーっと息を吐き、体を動かす。あちこちの筋肉が固まった気がする。
「凄く疲れたね。帰ってお風呂に入りたい」
燕の意見に俺は同意した。ただ立ってるだけがこんなにも疲れるとはな。

「仕上げを終えたら、君達にも見せてあげるよ」
森山さんが笑顔で言った。本当に満足行く物がかけたのだろう。その顔は輝いていた。

「これが完成した絵ですか？」
数日後、俺達は、美術室に来ていた。
「凄いなぁ」
修が感心している。まぁ、その気持ちは分かるな。この絵は凄い。
雨が降っているなかで傘を差した女の子が二人。その子達の手前にあるアジサイが、大きく、美しく描かれている。
なんだかこの絵を、ずっと見続けたくなった。

つまり、落ち着きました。　６ページ（後書き）

読んでくれた方、読み続けてくれている方、お気に入りにしてくれた方、評価してくれた方、感想をくれた方に、世界規模の感謝を。

つまり、……夏か　　1ページ

窓の外で、セミがとてもやかましくないている。何故そんなに元気なのかは知らないし、とても夏らしいのだが、うるさすぎる。
しかし室内ではそんな事関係なく、俺等は学校の準備だ。…まぁ、準備なんてほとんどないがな。
「っし、今日を乗り切れば夏休みだ！」
空高く、明るく燃える太陽に向かって、学生は喜びの声をあげる。

「夏休みはやっぱし遊ぶだろ。海行こうぜ海」
飾が鞄を振り回しながら言う。何も入って無いかばんは、とても軽い。
「あぶねぇな。でも海は良いな。なんてったって」
「「せっかく女子がいるんだもんな！」」
飾と和樹がハモる。太陽にあてられておかしくなったらしい。
「お前ら…まぁ、海は良いな。他にも色んなとこ行って、忙しく遊ぼうぜ」
忙しく遊ぶってどんな意味だよ。優太。
まぁ、せっかくの夏休みだしな。遊ばなきゃそんだ。
「宿題。終わっかな？」
そんななか、修は宿題の事を考える。
「とにかく夏休みだ！どうすごすか、考えようぜ！」
俺達は腕を勢い良く突き上げた。

「やっぱり夏と言ったら海だろ」
和樹が真顔で言った。
「それと山だな。」
優太も真顔で言う。
「電車で田舎の方に行くってのもありだな」
修ですら真顔で言う。流行ってんのか？
「祭りに浴衣（ゆかた）ってのは、良いと思うんだ。」
飾も真顔だ。本気で流行っているらしい。
「虫取りとかまたやりたいな」
しかし、燕は目を細めて遠くを見る目で言った。これが限度か。
アイディアは、結構出る物だ。次にこれを、いつ行うかを決めなくてはならない。
「じゃあいつ行くかだな」
「海は早めに行こうぜ」
「山は普通に八月半ばで」
「お祭りは七月の最後にやる学校のやつで良いな」
「虫取りは山のついでに」
「旅行は断念って事でいこうか」
などと会議をしていくうちに、海に行くとしてもどこの海に行くか、どこの山に行くか、どの位行くかなどが決まっていく。
「海は三つ電車使ったあそこで、後、一泊する。これでいいな？」
「「「「「「「おーけー！」」」」」」」
夏休み第一回レクリエーションは、海にいく事になった。

つまり、……夏か　　1ページ（後書き）

今回は短くなってしまいました。
書くのはほんっと難しい。
さあ次回は、海ですよ？
おたのしみに

つまり、……夏か　２ページ

電車の中から見る景色は、町の中で、大きなショッピングモールがあったり、散歩しているひとがいたり、中々に面白い。ガタンゴトンと揺れるリズムが、座っていると心地よい。車内に人は結構いるが、今が休みだからだろう。エアコンのおかげで暑くないので、とてもいい気分だ。

「おっ！おいほらお前ら！見えたぞ。海だ！」

優太が外を指差す、建物の奥の方に、海が見えて来た。

「おおっ！」

思わず声が漏れた。

海に太陽の光が反射して、眩しい。俺達は、窓に近いて、海を見ていた。

駅について、ホテルに行って、色々と用事を済ませた俺達の目の前に、綺麗な海がある。

「なぁ」

そんな時でも、こいつらの思考はいつもと同じだ。

「なんでお前、男なんだよ？」

こんな風にな。

「前夜祭とか言って徹夜したからだろ？明日には変われる様になるけど、今日は諦めろ」

俺は笑顔でそう言った。がっくり肩を落とす和樹。俺は言葉を続けた。

「それに、６２って言われた俺なんかより、７８のあいつの方が目に良いだろ？なっそこのカ～ノジョ」

そう言って俺は少し離れたところにいる燕を見た。パラソルの下で日焼け止めを塗っている燕は、少し恥ずかしそうにこちらを睨んでいる。

「どこのチャラ男だよ」
修が後ろで呟いた。
「お前らいつまで浜辺にいるつもりだ？さっさと泳ぎに行くぞ」
声のした方を見ると、優太が立っていた。と思ったら、優太はそのまま修と飾の腕を掴み、海に一直線に走っていった。俺等は笑って後を追った。
海はやはり、とても楽しい。
気がついたら、夕方になっていた。
俺達はホテルに戻り、落ち着いている。
部屋は二つ取っているが、俺達は今一つの部屋に集まっている。
流石は私立に四年も通っている家柄だよな。ホテルで割り勘とは言え部屋を二つ取るのだから。
「海、明日も泳がないと」
そんな事を燕が呟いた。
「せっかく海に来たのに泳がないとか、そんなもったいない事はしたくないな」
俺も賛同した。今日泳いでいるが、それが明日泳がない理由にならない。
「じゃあ明日は岩場の方に行こうぜ」
飾が言った。視線は手に持ってるものに集中していて、なにか考えている。
「そういや洞窟みたいに穴空いてたな、あそこの岩場。っとウノだ」
「はいドロー2」
「大丈夫、俺は持ってたからな」
「ドロー2」
「続くね、ドロー2」
「よかった持ってたよ。ドロー2」
「……」
固まる優太。
「どした？早く十枚引けよ」

ウノを宣言した直後に、誰よりもカード数が多くなって、ダメージを受けた様だ。少し放心状態になってる。
その後、カードを順調に減らして、俺は三位とまた微妙な順位で終わった。
因みにビリは修で、本人は納得いかずに再戦を希望した。
「続きは風呂の後な」
そうして俺達は、高らかに笑いながら部屋を出た。
夜はこうして更けて行く。

つまり、……夏か　2ページ（後書き）

第一回レクリエーションはっとか言って起きながらポンポン飛ばすから人気落ちたのかな

……反省。

つまり、……夏か　3ページ

朝目が覚めれば、それはいつもと変わらない朝で、セミの大合唱が夏らしいＢＧＭとして聞こえる。朝日がとても眩しく、時計を見るとまだ六時頃で、起きようか二度寝しようか悩んでしまう。とりあえず皆が起きるまでじっとしてようかと考えていた時だった。

「か～かりちゃん。つ～ばめちゃん。お～きーて～。」

……近所の小学生だろうか？

「俺は小学生じゃないぞ～？」

なんだ？俺はテレパシーを使った覚えはないぞ？俺は声を無視する事にした。

「起きなきゃピッキングしてお前らの寝顔にチュウするぞ～」

この言葉で俺は勢いよく跳ね起き、玄関に向かった。そして玄関にいた燕と共に扉を開け、そこにいた顔に二人で拳を叩き込んだ。

「「何するつもりだ！この阿呆？」」

「全く、今日はお前らの浴衣を買いに行くって言ってたじゃねぇか」

頭をかく修。その横で、完全に伸びている和樹。

「あんな言葉を言われたら、思わず…ねぇ？」

燕が顔を下に向けつつ言った。

俺も賛同する。男子校とは言え、あんな言葉を玄関の前で堂々言うなってもんだ。

「まあいい、とりあえず、九時に出かけるから、それまでに準備しておけよ。あとかかり、お前の服を買いに行くんだから、男になるなよ」

「おー」
そう言って修は、和樹を引きずって部屋をでて行った。
「…とりあえず、飯を作るか…。燕、お前シャワー浴びて来いよ、寝癖やばいし」
「え？…ああ、そうする」
そう言って燕は風呂場へと消えてった。
俺は朝飯を作り始めた。朝飯は適当にご飯と味噌汁。シンプルな朝飯だ。
一応ここで説明。
今現在俺達は清涼学園の寮にいる。
海から帰って来て十日ぐらい経ったから、いまは七月の終わり。この後、学園主催の文化祭とは違うお祭りが開かれる。学園祭は生徒が出しものを出すが、このお祭りは、近所のお店や住民の方が屋台などを出す。今日はこの後、お祭りで着る浴衣を買いに行くことになっている。
俺が味噌汁がうまくで来たかどうか、味見をしようとした時だった。
「……かかり」
風呂場に入ってから何もしてないような気がしていた燕が、風呂場から声をかけて来た。
「ん？」
味見をしながら返事をする。すると
「なんか生理になったみたい」
「ぶっ！」
爆弾発言が降って来た。

つまり、……夏か　3ページ（後書き）

テストが終わった開放感！
ゲームをクリアした達成感！
自然と溢れる満足感！
気持ちがいい！

つまり、……夏か　　４ページ

燕の言葉に、思わず味噌汁を吹いてしまった。慌てて口をぬぐい、燕に聞く

「え～っと、何になったって？」

俺は風呂場の方に目をやらながら聞いた。

「…だから……生理」

風呂場から声が帰ってくる。

俺はまだ事態を収集し切れていないが、指示を出した。

「とりあえず、上がれ」

そう言った後、俺は携帯を取り出し、相手が電話に出たのを確認してから言った。

「緊急事態発生」

今現在俺達は、寮の一室にいる。

「緊急事態って…確かにそうだが…」

集まった俺達は、先程起こった緊急事態について話している。

「でもこいつは女になって二ヶ月経ってんぞ。何で今さら…」

飾が不思議そうに言った。確かに、燕が女になったのはゴールデンウィークの少し前だから、今更って感じだな。

「とにかくこの現状を何とかしないと」

優太が言う。しかし、男子校に寮暮しの俺達は、何一つ解決策が浮かばない。

「かかり、お前は今まで生理とか無かったのか？」

「無いよ」
和樹が俺に振って来たのを流した時、ふと俺は解決策が浮かんだ。
「そうだ！高梨先生だ！」
思い出そう。高梨先生は、四月に女になってすぐの頃、身体測定をしてくれた理科の先生だ。男子校にいる話し掛けやすい女性。おばさん先生じゃないから、相談するのにピッタリである。
「おおっ！確かにそれが良いな。この時期なら祭りの事で多分学校にいるだろうしな」
そうして俺達は、浴衣を買うのを延期して、学校に向かった。

「だからと言って、六人でくる事無いでしょうに」
高梨先生は呆れた顔をして言った。俺達は、高梨先生に相談しに来たのだ。
「まあいいわ、とりあえず燕さん。ここに残ってね。他の人たちは、えーっと山田先生ーっ！この子達に祭りの準備を手伝わせてあげて下さい」
……ついてこなきゃ良かった。
燕以外の俺らは、山田先生に　そうか手伝ってくれるのか　と感心されながら、引きずられて行った。
「そこにテントを建ててくれ」
山田先生に指示されて、俺達は鉄の棒を持ち上げる。祭りの準備を生徒が手伝うなんて事が今まで無かったのか、力仕事が俺達にまわってくる。周りも組み立てている最中で、結構騒がしい。
「ふぅ……やっぱまだ準備中だな。組み立てかけの屋台とかがあちこちにある」
教員が使うテントを建て終え、周りを見ながら優太が言った。
「ホントだ、…あっでもあそこは完成してるよ」

「この祭りって、やぐら建てる意味あんのかね？」
なんて雑談を楽しんでいると、
「神鎌。高梨先生が呼んでたぞ」
後ろに小鳥遊先生がいた。小鳥遊先生は俺を見て、
「家庭科室で待っているそうだ」
と言った。俺は和樹達にその事を言って、小鳥遊先生にお礼をいい。
校舎のなかに入って行った。
家庭科室に向かいながら、俺はどうして呼ばれたのだろうと考えた。
生理についてなら、さっき燕と一緒に話を聞いている筈だ。それに
家庭科室でと言うのは何故だろうか。
家庭科室の前についた俺は、少し息を整える様にして扉を開いた。
「失礼します。先生ーーー」
俺は言葉が止まった。家庭科室には高梨先生がいた。そして先生の
横にどこにあったのか、浴衣を着て恥ずかしそうにこちらを向いて
いる燕がいた。

つまり、……夏か　5ページ

「……」
俺が固まっていると、燕は恥ずかしそうに俯いて
「変じゃないか？」
と言ってきた。
「いや、…驚く程似合ってる」
燕が着ている浴衣は、深い黒の色の生地に、赤いラインが走っている。それでいて振袖のトコに白も入ってるから、まんま燕だ。
「これどこにあったんだよ？」
俺が聞くと、高梨先生が答えた。
「それね、なんでかこの学校にあったやつなの。さぁ、貴女のもあるから着てみましょう。ちょっと待ってね」
そう言って奥の部屋に消える高梨先生。なんでかこの学校にあったやつって、不気味じゃね？そう思っていると、燕が耳打ちして来た。
「高梨先生少し怖くなった」
どーでもいい報告だ。
そうしてると高梨先生が布を持って帰ってきた。
「さぁ、試着するから、着てる物全部脱ぎなさい！」
……は？
俺は固まった。
「え？先生なんて？」
「着てる物全部脱いでって言ったの。浴衣は素肌の上に着るものだから。さぁ、自分で脱げないなら……身ぐるみ剥ぐ事になるわよ」
そう言うやいなや、先生は俺の制服（念の為に言うが、今は女だ）に手をかけた。
「あの…先生？何を…」
「せいっ！」
「？」

「測定の時も思ったけど、やっぱりね」
「服！服を！」
「あ、ごめん。っと」
「？、え？え？」
「やっぱり可愛いわぁ」
本の数秒で、俺は浴衣に着替えていた。高梨先生の変な特技を知ったな。確かに怖いや…。
俺が着ている浴衣は、よくある紺の生地に綺麗な花が描かれている物だ。
「……燕、どう？」
高梨先生の後ろに薔薇が見えた気がしたので、俺は燕に聞いた。
「うん。凄い似合ってる」
燕は笑顔で言った。……なんか恥ずかしいな。
「……照れてる？」
「なっ！」
「照れてるのか、可愛いよ～似合ってるよ～」
「やめい！恥ずかしい」
「顔赤らめちゃってまあ」
俺達が妙にきゃぴってると、高梨先生が俺達に向かって言った。
「二人ともお祭りに出るんでしょう？その浴衣あげるわ」
「「え？」」
俺達は固まった。この浴衣、学校の物じゃなかったか？
「貰っても大丈夫なんですか？」
燕が言ったが、今の言葉は貰いに行ってる気がした。
「大丈夫よ。倉庫から出て来た物だし、ここは男子校だから、着る人いないもの。遠慮なく貰って頂戴」
そう言って微笑む高梨先生に向かって
「「ありがとうございます！」」
俺達は頭を下げた。高梨先生はまだやる事があるでしょうと言った。
俺達が首を傾げると、先生は笑って言った。

「じゃあ、着付けを覚えてね」

つまり、……夏か　5ページ（後書き）

三十話めです！
思えば投稿し始めてもうそろそろ一ヶ月。
なんか嬉しいです！

つまり、……夏か　６ページ

「「「「……」」」」
「なんだよ、ボケーっとしちゃって」
祭りの日、飾達の所に遅れた俺と燕は、息を整えながら聞いた。
一同、固まって動かない。ポカンと口を開けている。人形か。
「まさかここまでとはな」
和樹がしみじみ言う。おっさんか。
「でもスゲーカワイイよ。似合ってる似合ってる」
飾が調子良く言う。チャラ男か。
「いや、やっぱこんな美少女と回れるって俺らついてるな」
「ついてるなって、友達だろうに」
優太が呆れた声を出す。まったくだ。
「とにかく祭りに行こう。今年は花火もやるみたいだし」
俺がそう言ったので、俺達は会場である時計広場に向かう。
「やっぱり歩きずらいな」
歩きながら、俺はぼやいた。すると横にいた修が
「しょうがないだろ？浴衣なんだし。それにその方が綺麗だからな」
と言って来た。カッコカッコとぽっくりの音をたてながら歩く俺。
「小股になるのも歩きづらい理由の一つだけど、何より下着を着ないってのが落ち着かない」
俺は髪を弄りながら言った。そうかと短く答えが返ってくる。修を見ると、普通の顔だ。
全く、からかいがいがない奴だ。
そうしているうちに時計塔広場に付いた。
「やっぱりスゲーよな。これは」
優太が感心している。でもこの祭りは確かに学校で行うレベルじゃないしな。俺も頷いた。
祭り会場は賑やかで、夜店が立ち並ぶ。中等部や大学部の生徒もい

るので、かなり混んでいた。俺達は祭りを楽しもうと、夜店を見ている。
「くじ引きやってるぞ」
飾が屋台を指差して言った。目を向けると、中等部の子達がくじを引いている。ゲーム機を狙っている様だ。
俺はハズレ商品を眺めて言った。
「やめよう。ハズレた時に嬉しくない」
「もうちょっと良いトコあると思うぜ」
和樹も言った。二人に否定されて黙り込む飾。
「ねぇ、ヨーヨーすくいしよう」
ふいに燕が言って来た。俺は燕に向かって
「すくった後ヨーヨーって邪魔じゃない？」
と言って流そうとした。しかし
「夏らしいからいいじゃん。ほらいくぞ」
と言って俺の腕を引っ張る燕。お前、今までもの買う時、役立つかどうかとか考えてから買ってたじゃんか。夏らしいからって…どうした燕？
「おっちゃん。二回分」
そう言って小銭を渡す燕。まあいいか。俺もおっちゃんから道具を貰った。

「やっぱ暑いなぁ」

せっかくの祭りにこの言葉は興醒めだ。俺は綿菓子を食らいながら思った。
横にいる燕は、飴細工で作られた蝶を食べている。和樹は焼きそばパックを大量に買い込んでいるし、修は射的で取ったトランプとゲーム機を持ちながらポップコーンを持っていて、飾はチョコバナナとかお好み焼きとか、食べ物類を買っていた。優太の手には焼き鳥だ。
「見事に食べ物ばっかりだなぁ」
綿菓子をつまみながら俺は言った。と、飾が、
「この後花火だろ？少し離れて見るから買っといたんだよ」
と言った。しかしこの量は多過ぎるだろ……
ふと見ると、手元の綿菓子が無くなっていた。
「なぁ、花火が始まるのって、何時だ？」
花火が始まる前に、もう一本、綿菓子を買っておこう。

つまり、……夏か　６ページ（後書き）

すみません！
昨日同じ話を二回投稿していました。
三十話はこちらでした。

つまりは文化祭！　1ページ

夏休みが明け、ガヤガヤと騒がしい清涼学園。なんせ二学期最初のイベント。文化祭が近づいているからである。生徒一丸となって取り組むこのイベントは、どこの高校でも盛り上がっているのだろう。ーーーさて、少しばかり、回想に入るとしよう。なぁに、ほんの三ヶ月程前にーーーー

文化祭が行われるのが、二学期始まってすぐだと、一学期、六月頃からどの出し物をやるとか、そんな事を決め始める。

「はい。それでは文化祭の出し物について、何か意見あるか？」

文化祭実行委員に、ついさっき決められた加藤誠吾（かとうせいご）は、クラスメイトに向かって言った。俺は珍しく起きている。

「はい」

後ろの方の席から声が上がった。真面目な意見を言う奴じゃない様だが、

「高田（たかだ）か。何したいんだ？」

クラスのお調子者だから多分却下されるだろうな。そんな事を考えながら高田の言う事も上の空で聞いていた。

「やっぱりメイド喫茶がいいです」

……やっぱりな。

「俺も賛成します！」
和樹、賛成するな。だが、俺は甘かった様だ。ここは男子校であり、クラスには普通男子しかいないはずなのだ。
「「「俺も賛成します！」」」
和樹が最初に便乗して、じゃあ自分もと言う奴が出て来た。
「ちょっとまった！なんでメイド？」
燕が慌てて立ち上がり、否定するが、
「クラスに女子がいるんだぞ！」
と、クラスメイトの反発にあって黙ってしまった。かと言って俺も黙っていたら、あんなフリフリした物を着なきゃいけなくなる。俺は立ち上がって、教室の前に行った。加藤に教卓の前を開けてもらい、俺は言った。
「クラスに女子が二人しかいないのに、どうやって成り立たせるんだよ」
教室中の目線が俺に集まった。
「たった二人で喫茶店やるのは無理がある。そんな事をすれば、当日俺と燕は回れないだろ？」
とにかく理由を確立させる。で、確かにと頷かせる。こうすれば納得してくれるからな。
「確かに、二人に二日間働かせる訳にはいかないし…」
ふぅ……これで落ち着いたな。しかし、一度燃え上がった男子は、結構しぶとかった。
「じゃあ劇だ！劇をやろう。これなら二人でもできるだろうし、最悪三人にして一人ギャグでやれば問題無いはずだ」
納得出来る意見を飛ばして来た。糞、こいつ等どうしても［女子がいる事］と言う事を使いたいらしい。
劇と言うのは普通面倒がる物だが、俺が反論出来ないでいると、ここぞとばかりに押して来た。
「劇なら良いだろ！」
「そうだ。これで当日も回れるじゃねぇか」

迫って来る男子たちに、俺は頷いていた。

つまりは文化祭！　２ページ

次の日、
文化祭で劇をやる事になった俺のクラスは、多分他のどのクラスよりもやる気に満ち溢れている。
「では、どの様な内容にするか話し合うぞ」
加藤が声を張り上げる。おおーっ！っと盛り上がるクラス。盛り上がり切れない俺と燕。
「女子が一人しか出てこないから、結構難しいな」
まともな意見が出た。登場人物に女子一人は、物語として成り立つのだろうか？……まあ、男子が一人しか出てこない物語もあるから大丈夫か。
「男子が女子になっちゃった話は？」
「それ俺のリアルライフ」
ベターで一人しか女子がいなくても大丈夫だが、俺が今その状況だ。
「うーん、どんな話にしようか」
思ったより物語に作るのは難しいな。三人よれば文殊の知恵とか言うが、何人いても出てこないぞ。それでも内容を考えるのは執念なんだろうなもう。
「とりあえずみんな考えついたら持って来てくれ。その中から選ぼう」
今悩んでも出て来る事は無いと思ったのだろう。加藤が言った。
その日の話し合いは、これで終了した。

「成る程、劇か……これは文化祭大賞今年は決まった様なモンだな」
優太があごに手を当てながら言った。今居るのは寮の一室だ。
清涼学園の文化祭、水連祭(すいれんさい)は、毎年学園で最も人気だったクラスに文化祭大賞を与える事になっている。この賞を取ったクラスには、何故か豪華賞品がでる。賞品は毎年その時の校長先生がくれるのだ。
「女子がいるってのは強いな」
修も頷く。まあ、高等部と大学部の生徒だけですごい事になるしな。
「でもまだ劇の内容が決まってないんだよな」
燕がため息を吐く。女子がいるだけでかなり人気を集めるだろうが、劇の内容が悪かったら保護者人気で負ける。
「お前らは何をする事にしたんだ？」
俺は三人に聞いた。燕と飾は同じクラスだからな。
「俺んとこは超縁日とか言うやつ。はっきり言って微妙かな」
修が笑って答えた。
「俺は焼きそば屋さん」
和樹が答える。
「お化け屋敷」
優太は疲れたように言った。俺は少し気になった。
「優太どうした？元気ないな」
俺がそうきくと、優太は足を投げだしながら言った。
「文化祭実行委員なんだよ、俺。なのにまとまらなさすぎて疲れるっ！」
優太が文化祭実行委員……これは手強(てごわ)い。
「猛、劇の練習とかって決まってんのか？」
燕が聞いて来た。暑いのか髪を上に結び上げている。
「練習も何も内容がまだだろ。一週間後位にはきまってるさ」
俺は呑気に答えた。

つまりは文化祭！　２ページ（後書き）

総合ユニークは４０００を超え、アクセスは２６０００を抜いた。
やっぶぁいすごく嬉しい。

つまりは文化祭！　３ページ

「劇の内容が決まったぞ！」
実行委員の加藤が高らかに宣言したのは、劇をやると決めた五日後の事だった。
「そうか、勿体(もったい)ぶらずに教えてくれ」
クラスの誰かが笑顔のまま動かない加藤に向かって言った。
「おおそうだな。じゃあ大まかな内容が書かれた紙を配るから、それで確認してくれ」
そう言って紙を配る加藤。俺は回って来た紙をとりあえずの体(てい)で眺めた。

［主人公の女の子はある時異世界に行ってしまう。そこは荒れ果てた森が広がっていて、生命の気配が感じられなかった。女の子がしばらく歩いていると、騎士の格好をした人達に囲まれる。
「ここで何をしている？」
騎士の一人が問いかけたが、女の子は答える事が出来ない。女の子はそのまま城に連れていかれた。
城について、王様の前に連れていかれた女の子は、王様の言葉で死刑を宣告される。
連れて行かれそうになった時、突然侵入者が現れて女の子を救出した！
城から出る事が出来た女の子は、自分を助けてくれた男から『歌姫』として異世界にやって来た事を知る。
歌姫の歌は、再び世界に命を与える。女の子は、命の歌を世界に響かせる事になった。
しかし、ただ歌うだけでは世界に届かない。世界に響かせる舞台に、なんと城から歌う事になった！王様、騎士、城の人間は女の

子を捕らえようとする。女の子と男は城の警備をかいくぐり、バルコニーから歌を歌った。
するとその歌声は世界を巡り、命が広がっていった。
　こうして異世界を救った女の子は英雄としてもてはやされるが、女の子は元の世界に戻りたいと考え、男にその方法を教えてもらった。
　元の世界に戻った女の子は、また静かに日常を過ごして行く。」

……どこが大まかにまとめたんだよ。
紙に長々と書かれた文章を読んで、思ったことがこれだ。だが俺の周りの奴らは真剣に読んでいた様で、次々と意見がで始めた。
「これって大道具とか難しくね？教室だとしまう場所もないし……」
「これを実際にやるとしたら、結構時間かかるな。三十分位になりそうだ」
「この設定からセリフとか広げていくから、脚本を考えていかないとな」
逞(たくま)しいな。放って置いても素晴らしい劇になりそうだ。
「とりあえず脚本を完成させないと、実行委員とクラス委員とあと数人選んで話し合うよ」
飾が大声で言った。この言葉にクラスは納得して、脚本作りの人を決めた。その中に飾かわ発案者として入っていたが気にしないで行こう。

つまりは文化祭！　３ページ（後書き）

筋肉痛が三日間取れません。
体鍛えなきゃ

つまりは文化祭！　４ページ

「どうしてここの草木はこんな風に枯れているの？」
そう言って、空中に手を伸ばす。
「この花も、とても綺麗な花を咲かせていたはずなのに…」
慈しむ様に花に顔を近づける。その時、
「誰か居るのか？」
ふいに後ろから声がする。振り返るとーーー
「ぶっ！」
「笑うなよ！」
「だったらそのへんなキメ顔やめろ！」
劇の台本も出来、誰がどの役をやるかも決まり、いよいよ練習に入った我が一年四組。
今は台本を読みながら一通り流しているのだが、騎士役の宮田の妙なキメ顔で思わず俺は笑ってしまったのだ。
「かかりぃ、お前言葉遣い。普段も女口調でって言ったじゃんかよ」
「るっさいな。通してる時は出来てんだから良いじゃねぇか。それに、女口調に慣れ過ぎると男の時でも女口調で喋りかねないからな」
俺は右手をひらひらさせながら言った。
「まあいい、じゃあ今やったグループはセット作りに移って、セット作ってるグループは通しをやるよ」
加藤が指示を飛ばす。俺らは元気良く返事をして燕達と交代した。
「水連祭は九月だからな。練習時間短いからしっかりと練習しろよ」
そんな声を聞きつつ、俺は絵の具で木を描いてく。上手くは無いが、後ろの方にちょこんと飾っておけば良いだろう。
作業をしていると、廊下から、俺たちとも、燕達とも違うギャグパートグループが飛び込んで来た。
「服のデザインこんなんでどうだ？」
息を切らしながら服のデザインが書かれた紙を出すギャグパートグ

ループ。クラスにいた人達は、作業をやめ、紙を覗き込んだ。
「この服……ヤバくね？」
そこの紙に書かれた服を見て、俺は絶句した。
それは、どう考えてもやり過ぎと思えるデザインだった。……男って、馬鹿だね。
「いや大丈夫だろ」
周りの男子達は言う。俺は溜息をついて、声を低くして言った。
「こんな服で劇をしたら、トラウマが来るだろうな」
言った瞬間、男子達の顔がみるみる青くなっていく。
　さてこのトラウマとは、清涼学園にごく最近から伝わるもので、なんでも先代校長が、
「優しさあふれる人であれ」
って人だったらしい。その結果、清涼学園には謎と言える独自の格闘技があって、街中にいる不良ならあっという間に飛ばせる。だがその格闘技を使ってやましい事をすると、先生方からトラウマを植え付けられる。らしい。
　そのトラウマがどんなのかは知らないが、植え付けられた先輩はその後、日常生活ですらまともに過ごせなくなったと言う。
　……今回は文化祭だし、まあ普通はお咎めなしだが、こんな大胆な服は着たく無いので少し脅しをかけた。
　その日ずっと、男子達の顔が青くなっていたので、俺は心の中で謝罪した。

つまりは文化祭！　5ページ

どんな劇だろうと主役を貰うと、セリフを覚える量が多い。主役であまり喋らないのは、ゲームの主人公位だろう。つまるところ、この前置きの意味はーーーー

「疲れた！」
その声とともに中を舞う台本。俺はソファにもたれ、天井を見つめた。別に天井を見つめて何があると言う訳じゃないが、とにかく台本から目を逸らしたかった。
「私の歌で世界が救えるの？」
キッチンから声が聞こえる。燕が多分、料理しながら台本を読んで練習しているのだろう。俺は燕の声を聞きながら、ソファの上で横になる
ほんの数日前に美術部に駆り出され、普段の授業と文化祭とで疲れた俺の頭では、寮に戻ってまで台本を読む気になれなかった。今俺の頭は、糖分を求めてる。
「確かに私はこの世界になんの思い入れもないけれど、こんなにも荒れた景色を見たら、何もしないでかえれ・・・ってあぁっ！」
キッチンからあわただしい音がする。
「どうした燕？」
俺はソファに寝転がったまま聞いた。
「・・・・・・・焦がしちゃった・・・」
申し訳なさそうな声が返ってくる。俺は寝返りを打って
「いいよー別に。それよりメニューなぁに？」

と言った。別にメニューなんてどうでもよかったが、何か話さないと燕が謝ってきそうだったのだ。
「メニュー？ただのフライだけど・・・」
「ふぅん」
生返事を返しながら俺は、なんのフライが焦げてしまったのか気になった。

「授業がようやく終わったか」
俺がため息をついたのは、帰りのホームルームが終えた時だ。この後にある文化祭練習の為に、俺は女子制服の入った袋を持ち上げた。さすがに男のまま女口調でしゃべる気は無い。
「猛。お前劇の練習で必ず女になるんだから、最初から女でいればいいじゃねぇか」
席を立とうとすると、飾にそう言われた。俺はそのまま立ち上がって言った。
「飾。女でいたら体育参加出来ねぇじゃんか。」
今日の練習は外でやるらしい。なぜかというと、背景に使う絵を描くために、人が大勢いると邪魔なんだそうだ。しかし、いくら六月の終わり七月の初めといえど、もう夏であり日差しが強い。そこについ昨日まで降っていた雨の湿気が追い打ちをかけるように俺たちのやる気を奪っていった。
その環境に全員耐えられず、木陰で休んでいると、背景を書いているはずの生徒が何かを持って走ってきた。
「えーっとかかりと燕。お前らが歌う歌ができたから、教室に来い」

歌とは、多分台本に書いてあった命の歌とかいうやつだろう。・・・・・しかし歌が出来たか。どこかから引用すればいいのに、このクラスは自分たちで作っちまったか。

とりあえず、俺は立ち上がり、燕と一緒に教室に向かった。

つまりは文化祭！　６ページ

ーーーーーさて、
この後も長々と練習風景を描いたってつまらないだろう。実際ただの日常風景を描いていくのとおんなじだ。登場人物がおかしい性格の人たちならそれでも楽しいのだろうが、ここにはそんな人はいない。従って、夏休みを全て素っ飛ばすことにする！

てなわけで、二学期の頭。
教室はもうすぐそこまで迫った水連祭に向けて熱気が溢れている。燃えているのは学園全体なんだが。なんせ中等部から大学部まであるもんだから当然一日で回れる訳がない。従って、水連祭は保護者観覧が二日、生徒のみの日が一日、計三日行う。
「もう文化祭はすぐそこだ！緊張で今まで練習して来た事をわすれるなよ！」
加藤の声も力が入っている。おおっ！と盛り上がるクラス。
「今日は放課後。みんな倉庫のところに行く事！」
加藤がそう言った瞬間、教室中にあった熱気が一気に冷めた。みんなが考えている事が手に取る様に分かる。なんで倉庫のところに行かなくちゃいけないんだと。
そう思いつつも、始業の鐘が鳴ったので、俺らは授業の準備に移った。

放課後。
言われた通り倉庫の前に来た俺たちに、加藤は笑顔で待っていて、それを見た俺たちは、全員回れ右をして今来た道を引き返した。
「ちょ、ちょっと待った！この倉庫の中にあるのは劇で使う衣装だ！」
その言葉で、引き返す足は全員止まる。そして倉庫へと突進して行った。
「どれどれー！」
「うわっ！この騎士の服かっけえ！」
「この男の格好も良いな」
「おい！女の子の衣装だ！」
「なにぃ？早く燕かかかりに着せるんだ！」
最後の言葉は何と言った？
このたった一瞬の現実逃避をしていたせいで、俺は気が付くとクラスの連中に囲まれていた。不敵な笑みを浮かべながら近づいて来る連中。と、ドンと何かが背中に当たった。振り返ると燕がいる。顔が青くなっていたが、落ち着け、これは衣装合わせだ。その時俺はある事を思いつき、顔を上げて前を向いた。
そして、少し腰を落とし、両手を口元に持って行き、大きく息を吸ってーーーーー

ーーキャァァァァア！！ーー

できる限りの悲鳴を上げた。
すぐに後ろからドタバタと音がして、他クラスの連中がやって来た。
「なんだ今の悲鳴は！」

「お前ら学園の花になんて事を！」
「お、俺らは衣装合わせを…」
目の前で始まる乱闘。普通に受け取れば良かったのだが、
まぁいいや、し～らねっ！

つまりは文化祭！　7ページ（前書き）

気が向いたらで良いので感想等を書いてくれたら嬉しいです

つまりは文化祭！　7ページ

どこもかしこも騒がしい。
廊下を歩けば肩がぶつかり、立ち止まれば客引きに出会う。廊下にはスタンプラリーのクラスだろうか、酷い格好もある。
そんな物を横目に、俺は掲示板の前で突っ立っていた。さて、何をしよう。
文化祭当日、俺は無計画でいたため、楽しむどころか暇になっていた。なので掲示板の前で面白そうなクラスを探しているのだが、これと言って面白そうな物がなく、困っていた。
一体何をしよう。そう思って掲示板を眺めていると、俺らのように劇をやっているクラスを見つけた。俺は暇つぶしになればいいなとそのクラスに行くことにした。場所は一年一組だ。
一組の前につくと、人が少なかった。遠目に見える俺らのクラスでも、結構人がいるのに。
「中、はいれますか？」
俺は受付の人にそう言って中に入って行った。中にはさすがに人がいたが、席がまばらだ。俺は適当にあいていた席に座る。劇の内容はどうやら有名なおとぎ話で、面白いとは言えないが、俺はボーっと見ていた。
劇が終わり、再び暇になった俺は、ただなんとなぁく四組の前に来た。並んでいる客は、ほとんどが学園の生徒だ。その中に、人気があるのだろうかと足を止めたらしい保護者の方々がいた。
「猛、どうした？」
受付をやっていた奴が話しかけて来た。
「あぁ、暇でな」
俺は適当に返した。周りはお祭り騒ぎで盛り上がっているのに、イマイチ楽しめない。俺はフーッと溜息をついた。時計を見ると、十一時五十分だった。俺の担当は十二時からだから、ここで待ってる

か。
壁にもたれていると、中から笑い声が聞こえる。今やってるのは全員男のギャグパートらしい。
「お、猛。もういるのか」
声がした方をみる。そこには、同じ十二時から劇をやるメンバーがいた。
「この後交代だからな。もう中で待ってようぜ」

「よく一教室をこんな豪華な感じにしたよな」
舞台の袖から教室見て、俺は感嘆の声を上げた。ギャグパートだというのに、この人気。すでに客席は満員だ。
劇はもう最後で、男に女の子が元の世界に返してもらうとこだ。
「かかり、こっちこい。円陣やるぞ」
客席から拍手が沸き上がった時、後ろから声をかけられた。振り返ると、メンバーが輪を作っていた。俺は頷き、皆と肩を組んだ。
「大賞を取れる様に、しっかり行くぞ！」
「おお！」
円陣をほどき、いよいよ俺の出番だ。
俺は深呼吸をして、舞台の上に駆け上がった。

つまり、他校交流会？　１ページ

十月はごくごく普通に過ぎ去って行った。テストに追われ、衣替えをして、ハロウィンをする事無く、十月は平凡に普通に何事も無く平和だった。だが周りの男子達のテンションは日に日に高くなっていった。制服をオシャレに着こなそうとしていたり、普段何もしていないのにワックスで頭を固めたり、ソワソワしっ放しだ。まぁこれも、仕方の無い事なのだろう。何故なら、この後にあるのは二学期最大の重要イベント。温華女学院（おんかじょがくいん）との、交流会があるのだから。

「俺はこの時をずっと待っていた」

真面目な顔をして和樹が言った。因みにこの交流会は高校からなので、中等部（ちゅうとうぶ）を男子のみで過ごして来た連中が思い上がらない訳がない。

「待っていたってなあ。俺は知らない人と話せる位にしか思わないな」

俺は椅子にもたれ掛かりながら言った。

「ハン！お前はそんな心意気で女学院のお嬢様方を落とせると思っているのか？しっかり狙いを定めてだなぁ」

「そんな心意気で行ったら引かれそうだな」

熱弁（ねつべん）する和樹にそう言って、俺はクラスを見渡した。もう十一月なのに、なんか暑い。

「皆楽しそうだね」

燕が笑いながら言った。
「お前は楽しみじゃないのか？」
優太が疑問に思ったのか、燕にきいていた。
「あぁ。先生に止められて、なんでも男子校なのに女子がいると問題になるとか…」
その答えをきいて俺達は納得（なっとく）した。燕は元が男子だから清涼学園にいるが、この事を知らない第三者（だいさんしゃ）には、おかしく見えるのだろう。半年でセミロングからロングになった燕の髪を見ながら思った。
「そりゃ残念だな。お前の分も楽しんでやるよ」
伸びたと言えば修もそうだ。身長が確か１７４ｃｍから１７７ｃｍまで伸びている。俺は変わっていないと言うのに……ノヤロウ。
「女学院のお嬢様かぁ。どんな人達なんだろう」
飾が頭の中で何かを広げているようだ。そっとしておこう。
「今こそ！俺等のなかに眠ったモテる才能を解き放つ時だ！高校生だというのに、女子と触れ合えないのは拷問だ！この一年に一度しかないこのイベントで、死んでも彼女ゲットするぞー？」
「おおー？」
教室の中央で雄叫（おたけ）びを上げる男子達。俺は彼等を横目で見ていた。交流会でどんな人達に会えるのだろうか、学校で会える同年代の人を、俺は頭の中で思い浮かべていた。

つまり、他校交流会？　２ページ

「えー、お前らも知っての通り、明日、温華女学院の生徒と交流会を開く。くれぐれも問題を起こさないようにな」
担任の先生の注意は、生徒の耳に入っているのだろうか？
「会場は、パーティーみたいになってるから、自由にいられる。ただし制服で参加する事」
パーティーみたいって事は、ご馳走が出るのだろうか、なんだか楽しみだ。俺は交流よりもご馳走に心奪われていた。
「ではこれでホームルームを終える。礼」

その盛り上がりは、寮に帰ってからも続いた。
「やっぱボタンは第二まで開けて、ブレザーの前は止めないよな」
ここまで来るとこいつら、期待しすぎのような気がするのだが。
無駄にカッコつけようとするやつらを無視して、俺は燕に話しかけた。
「なぁ燕。お前俺達が交流会に行っている間、どうするつもりなんだ？」
「どうするって・・・別に何も」
燕は目線を馬鹿共に向けながら言った。
俺はどう返そうか迷ってしまった。俺らがパーティーを楽しんでる間、こいつは一人でお留守番。心配することはないのだが、少し引っかかる。
馬鹿共を見ながら、俺は少し不機嫌になった。

パーティー会場は、学園のそとで行うらしく、俺たちはバスで会場に向かう。バスに揺られながら思うことは人それぞれらしく、身だしなみの最終チェックをしている奴、カラオケと言って騒ぐやつ、なぜかトランプをしている奴など、それぞれが好きなように過ごしていた。
「猛。会場が学園の外って事は、一体どんなとこなんだろうな」
俺が窓の外に目を向けていると、前の席から優太が頭を出した。
「確かにな。相手側(あいてがわ)の学校も私立なのに、わざわざ外でやるんだ。なんかとてつもない建物かもしれない」
俺は外から優太に視線を移して言った。
「やっぱそう思うか？だとしたら、どこに行くか予想がつきそうだけどな」
「でも温華って隣町(となりまち)だろ？だったら学園じゃなくても不自然じゃない気がするけど・・・」
「だとしたら温華でパーティーをするのか？それはすごく良いな」
「何考えてんだ。女学院が男子招き入れるのかよ」
「家庭の事情とかあれば…」
「ある訳ないから。……っておいあの建物…」
俺は窓の外に映った大きな建物を指差した。
その方向を見て固まる優太。バスの中も、建物に気づき始めた様で、驚きの声が上がっている。
「……あんな豪邸でパーティーするのか」
優太がポツリと呟(つぶや)いた。

つまり、他校交流会？　３ページ

バスから降りた俺達は、目の前にある大きな建物を見上げた。白い壁には汚れが見えず、城の様な門を構え、庭はとてつもなく広い。

「……なんっつー所だよ……」

もう感嘆の声しか出てこない。同じ私立でも、ここまで差があるのか。温華女学院。

俺達は、そのまま会場の中に入って行った。

会場内は外見に劣らない程豪華で、眩しいくらいに輝いている。壁に一列に並ぶウェイトレス。そして、俺達が入って来た入り口の向かい側に、このイベントの相手、温華女学院の生徒達が、ずらりと佇んでいたのだ。

瞬間、固まる清涼学園の生徒達。なんかピシッって音が聞こえて来そうだ。そんな中、両校の先生が、中央で互いに挨拶をしている。その中にいた会場の管理人だろうか？が、マイクを持って喋りだした。

「えー、温華女学院の生徒の皆さん。清涼学園の生徒の皆さん。本日のパーティーを楽しんでいって下さい」

管理人の挨拶が終わると、会場内に音楽が流れ出る。音楽が流れるだけで、雰囲気がちがうな。

俺は固まっている男子達を放っておいて、近くのテーブルに行った。すると温華の生徒も動きだした。

段々騒がしくなっていくパーティー会場。気が付くと、男子達もテーブルに食べ物を取りに来ていた。

「なあ、あの女の子可愛くないか？」

俺がテーブルから美味そうな肉料理を取り寄せていると、飾が話しかけて来た。飾が指差した方向を見ると、遠くの方に、ボブカットが似合う女の子がいた。その子は友達と話している様で、時々見せる笑顔が可愛らしい。

「気になるなら話かければ良いじゃんか。交流会なんだし、変に思われないだろ」
「そうは言ってもよ～」
飾はおどおどしている。ヘタレめ。
俺はもう一度その女の子の方を見た。温華の長いワンピースの様な制服が似合っている訳ではないが、それは明るい色をした髪のせいだろう。
食べ物を口に運びながらその子を見ていると、その子の周りにいた子達がこちらに気付いた。変な空気になりそうな気がして、とりあえず手を振る。すると向こうも手を振りかえして来た。俺はポテトを取ろうとしていた左手を止め、飾の襟（えり）を掴んで女の子達の所へと歩いて行った。

つまり、他校交流会？　３ページ（後書き）

この物語を書いて一ヶ月。
作中では七ヶ月。
とんでもないスピードだ…
次回は、話してみましょう。
おったのしみに

つまり、他校交流会？　４ページ

俺らが近づいて行くと、向こうが会釈をしてくる。こちらも会釈を返し、話しかけてみる。と言っても初対面でどんな事を話したら良いのだろう？

「こんにちは」

とりあえず、挨拶。

「こ、こんにちは」

女の子達も返してくれたが、

「……」

「……」

会話が続かない。チラッと飾の方を見てみたが、凍ってしまって使えそうにない。ってか、お前が話したがったんだろう。

「あ、あの…秋永栞です」

何を話そうか迷っていると、ボブカットの女の子ーーー秋永さんが口を開いた。正直、凄いホッとした。

「神鎌　猛。えっと…よろしく」

自己紹介と微妙なものだが、話題がないので仕方がない。自分のことを伝えて、握手。

「門松飾です。」

解凍された飾が俺の横から手を差し伸べた。秋永さんがそれに応える。

「駒野絢香。こちらこそよろしく」

秋永さんのよこにいた人が言った。

自己紹介が終わると、話題がなくなってしまうので、俺は急いで話題を探した。ふと、自分達以外の生徒が、このパーティーで交流できていない事に気が付いた。さっきからチラチラ見てくる。

「その制服って、どうしてそんなデザインなのかって、分かる？」

声がしたので振り返る。見ると、飾が秋永さんと話している。

「いえ、考えた事も無いですけど、そう言われれば珍しいですね」
秋永さんだけでなく、駒野さんも制服を見ている。確かに制服っぽくないな。
「清涼学園(せいりょうがくえん)の制服は、ブレザーでシンプルなんだね」
駒野さんが言った。
「ん？あぁそうだな。なんでかこういう所には金かけないからな」
意外にも、飾見つけてくれた話しで会話が弾んでいた。その後も色々話していると、会場の管理人さんが、再びマイクを持って会場の中央に来た。
「本日は時間ですので、ここらでお開きになります。明日、明後日(あさって)もありますので、皆様、楽しんで下さい」

「あっ、じゃあ、また明日会いましょう」
秋永さんが言った。俺はもうお開きかと思って時計を見て驚いた。あくまで学校の交流会なんだし、すぐに終わると思っていたが、時計は七時をとっくに過ぎていたのだ。
「神鎌ァ。おいて行くぞ」
俺は、先生に呼ばれるまで固まってしまっていたらしい。お陰で恥(はじ)をかいた。

つまり、他校交流会？　５ページ

「ぶふぅ～。たっだいまぁー」
バスに揺られて学園の寮に帰って来た俺は、疲れた様にドアを開けた。
「疲れた様に見えたのは声だけかい」
元気良くリビングに入ると、燕が呆れた声で言った。俺はその言葉を流して風呂の方へ向かう。
「パーティーはどうだった？」
服を用意していると、燕が話しかけてきた。
「やっぱりパーティーは凄いな。ご馳走の量が半端ない」
「そうじゃ無くて、温華の子達とはどうだったって事」
「あぁ、なんだかギクシャクしてて交流できて無かったな。クラスの意気込んでた奴も、空回りしてるみたいだったし」
「ところで猛。なんで女物の服用意してんの？」
「交流会は七時まであるからな。気を抜くと時間的に強制的に女になる」
そう言って俺は風呂にはいった。

交流会会場は、今度も大きな所で、またしても豪華な料理が並んでいる。俺ら五人は、会場をまわっていた。和樹達もついているのは、初日に温華の生徒と話したのが俺と飾だけだったかららしい。下心は凄いな。
「神鎌くん？今日は大人数でまわってるんですか？」
四人の後ろについていると、秋永さんが話しかけてきた。振り返る

四人。
「ああ。秋永さんは一人？」
「いえ、皆の飲み物を」
「そっか」
俺は踵(かかと)で後ろにいる奴らの足を踏んづけながら言った。
「せっかくの交流会なんですし、一緒に行きましょう」
「「「はい！」」」
俺の代わりに元気良く返事をしたのは、後ろにいるやつらだった。

秋永さん達のグループと話しているとき、ふと周りを見(み)てみると、俺達の様に温華の生徒と話している男子がいた。流石に二日目という事もあってか、話せないでいる奴は少ない様だ。
「へー、じゃあその文化祭は、劇をやった四組が大賞をとったんだ」
秋永さんといた草野さんが関心(かんしん)した様に言った。
「おい！俺の事話したのか？」
俺は小声で修に聞いた。
「いや、お前と燕の事を隠しながら文化祭の事を伝えたんだ」
修も小声で返して来た。その答えを聞いて俺はほっと安心(あんしん)した。俺の事を正直に伝えても、信じる人はいないだろう。下手すると、変な誤解を持たれてしまう。クラスの奴らが簡単に信じたのは、俺が実際に女になったり男になったりしていたからだ。
「その劇見たかったですね」
秋永さんが本当に残念(ざんねん)そうに言った。他の女子も頷いている。俺は相槌(あいづち)をうちながら聞いていた。
気が付けばもう時間で、俺達はまた明日と秋永さん達と別れた。
その帰りのバスの中で、隣の奴がメアドをゲットしたと無駄に自慢してきて、非常に鬱陶(うっとう)しかったのは余談である。

つまり、他校交流会？　６ページ

清涼学園と温華女学院の他校交流会。最終日。三日間の交流会(こうりゅうかい)も、今日でお終いだ。この交流会で気になったり好意を寄せている人がいた場合、生徒(せいと)の多くはお互いの連絡先を交換している。一方的に女子の連絡先を聞こうとしてる男子は突っぱねられているが、逆だとなんとも無いようだ。ここから先の事は個人(こじん)の事だが、先輩達の中で続いているのは四、五人位しかいないらしい。まぁどうでもいいか。

「へェ～。じゃあ、温華の生徒から見てもこの交流会は重要(じゅうよう)なんだ」
「はい。みんな気合いれてますからね」
人ってのは知らない人達の中に知ってる顔を見つけると、ついつい
その知ってる人に話しかけてしまう。てな訳で俺達は今日も秋永さん達と共にいる。昨日と同じ様な他愛(たあい)ない話しをしていると、駒野さんが横にいた。
「神鎌さんは、よく食べるね」
駒野さんが言った。
「猛でいいよ。こう言うとこの料理は美味いからな」
「そうなんだ。神鎌……猛君は、連絡先とかいろんな子と交換したの？」
「いや。交換したのはアンタらだけだな」
「そうなんだ」
「ん」
俺は話している飾達を見ながら、皿にとってあった料理(りょうり)を食べなが

ら言った。
少し名残惜しそうな雰囲気が流れるパーティー会場。そんな中、突然先生達が何故か会場の中央にマイクを持って出てきた。まだ終了の時間では無いのだが……。そう思っていると、先生達が口を開いた。
「え～、皆様、今日は交流会の最終日という事で、会場の中央スペースでダンスをしませんか？え～踊る人はこの中央スペースで、踊らない人はその周りのテーブルの所にいて下さい」
先生がそう言い終えると、会場に流れていた音楽が変わる。最後にダンスとはなかなか良い物だが、説明口調では興醒めだな。
「ねぇ、踊らない？」
横を見ると、駒野さんがこっちを見ている。
「そうだな。せっかく舞台があるんだし誘われてるし、踊らないと勿体無いな」
俺はそう言って手を出す。中央では、何人かのペアが踊っている。ノリの良い音楽に合わせて人が動いている。制服では格好が着かないが、気にする人はいない。俺は、俺が差し出した手に駒野さんが応えた事を確認すると、その手を持って、中央に向かって行った。

つまり、他校交流会？　６ページ（後書き）

そろそろ暖房が欲しくなって来ました。
ところで次回は、コールします。
お楽しみに。

つまり、大変なことに…　1ページ

ピリリリリリリ。

ピリリリリリリリリリ。

他校交流会から数日が経ったある日、俺の携帯がけたたましくなり響いたのは、学校が受験準備とかで暫く暇になると分かり、喜んでいた時だった。

「猛。携帯鳴ってるぞ」

「分かってる」

携帯を取り出してディスプレイを見る。そこに映っていた文字は、

『駒野　絢香』。俺は通話ボタンを押した。

「あっ、もしもし猛君？」

スピーカーから聞こえた声は、何処か安心した様だ。

「もしもし？どうした？」

俺は聞いた。向こうは、しばらく沈黙した後、

「にっ二時頃に保灯駅の前に来て。お願いね！」

ブツッ。

……なんだ今の。俺は携帯の画面をしばらく見ていた。

「なんだって？」

修が聞いてくる。

「いや、駒野がさ、保灯駅に来いって……」

携帯をしまいながら俺は答える。なんか一方的だったな。俺が忙しいとか考えないのか？まぁ、暇だけど。

「で、どうするんだ？行くのか？」

「暇だからな。それよりも呼ばれた理由が気になるね」

「どうせ荷物持ちじゃねぇの？それともデートか？」

「そーゆーのって男子から誘うよね。普通。ただの用事ではなさそうだけど…」

「ともかく、二時に来いって言ってたからな」
俺は少し溜息をついた。

「早いね。まだ二時になって無いよ？」
駅に三十分前に行くと、駒野がすでに居た。聞くと、電話した時にはもう着いて居たそうだ。だが俺が電話を受けた時間は十二時。一時間は待って居たことになる。
「よくもまぁ女子一人で一時間も駅前にいれたなぁ」
そう言うと駒野はピシッと音を立てそうな感じに固まった。俺は呆れた。何してるんだこいつ。
「で、今日俺を呼んだ理由はなんだ？」
俺は固まっている駒野に聞いた。しかし返事が無い。
「おーい」
頬を軽く叩くと、駒野ははっとしてこちらを見る。
「で、俺を呼んだ理由は？」
俺が改めて聞きなおすと、駒野はフフフと微笑んで、
「ちょっと買い物に付き合って」
と言った。
「買い物？」
なんか凄い事を言いそうだったから、俺はその答えに拍子抜けしてしまった。
「そう。買い物。分かったらさっさと行くよ」
そう言って駒野は俺の腕を引っ張り出した。

俺は引っ張られながらどうして俺を呼んだとか聞こうとした。
「歩きながら話すわ」
駒野は引っ張りながら答えた。

つまり、大変なことに…　2ページ

街の中でも有名なショッピングモールで、俺は駒野と共にいた。歩きながら駒野から聞いた話を言うと、こうなる。
「もうすぐ天冠さんの誕生日なの。あ、天冠さんは交流会の時の赤いストレートの髪してた子で、プレゼント決めたいんだけど、毎年私センス無いって言われてたから…」
だそうだ。その言葉にどうして呼んだのが俺なんだと聞くと、
「だって友達も誕生会に参加するし、言われると恥ずかしいし……それに、猛君ってなんか女の子っぽい時あるし」
と返して来た。傷付くな。確かに俺は身体の都合で女の子になったりしていて、文化祭の劇でそう言うのが貼りついた所はあるが、面と向かってはっきり言わないで欲しい。
　で、俺は今婦人服売り場にいる。プレゼントに服を贈るのだろうか？そう思って見ていたのだが、服を当てて、姿見を見ている駒野を見ていると、どうも違う気がする。
「ねぇ。どっちの方が似合うと思う？」
「プレゼントは？」
「あっそうだった」
こんな会話がさっきから続いている。このままだと時間がすぎるだけになりそうなので、俺は駒野に近づいた。
「誕生日プレゼントなら、小物にしたらどうだ？ストラップとかさ」
「うーん、ストラップとかさ、どこかに行った記念品とかの方が付けたいと思わない？」
そんなもんなのか。よく分からん。
再び服を見ていく駒野。俺は近くにあった服を見てみる。あったかそうなダウンのジャケットだ。これからのために一着必要か？
「何見てるの？」
後ろから声をかけられた。振り返ると、駒野がこちらを見ている。

しかも変な物を見る目で。
「いや、その…あははは」
誤魔化し方が悪過ぎるが、良い言い訳が思い付かなかった。俺は急いで離れた。
駒野は不思議そうな目を向けた後、再び服選びを始めた。

「ふーっ、これで大丈夫かな？」
買い物が終わって、ベンチに俺らは座っている。
「良いもんが選べたのか？」
「うん。今年はプレゼントを渡して苦笑を返されるなんて事にならなさそう」
その言葉に俺は苦笑する。服選びしている時、駒野が選んだ服を組み合わせてみると、可愛い服が変に見える。コーディネートがダメなんだなこいつ。
「……失礼な事考えてない？」
おっと、顔に出ていたか。にしても疲れた感じがするな。
そう思っていたら、駒野が立ち上がった。
「今日はありがとうね。おかげで良い物買えたし、じゃ、また明日」
そう言って走り去って行った。駒野が人混みに消えて行ったのを確認して、俺は立ち上がった。そのまま伸びをして、出口に向かって行った。

つまり、大変なことに…　3ページ

ピーんポーン
昨日の疲れが残っていたのか、俺が起きたのは午前十一時。そして惰眠(だみん)を貪っていた俺を起こしたのが、このインターホンである。
「ふぁい？」
欠伸をしながら扉(とびら)を開けると、なじみの四人が居た。
「このメール。どう思う？」
そう言って携帯を突き出す和樹。俺は携帯を受け取って、画面(がめん)を見た。メールの送り主は温華の皆様。内容は、
『休みを使って遊びませんか？』
と言うものだった。
「どうって…別に普通(ふつう)のメールだと思うが…」
「そのままスクロールしてみろ」
は？スクロール？俺は不思議に思って画面を移動させる。文字のしたの方に、添付(てんぷ)ファイルがあった。
『一泊二日、団体(だんたい)で山の宿屋にご招待！』
添付ファイルには、そう書かれたポスターの様なものだ。だがつまりこれは……
「お泊りで遊びませんか？って事(こと)だよな」
「そうなるな」
俺らは、少しばかり固まった後、
「「「「「マジでかああぁぁぁああ？」」」」」

絶叫(ぜっきょう)した。
「こんな昼間になに叫んでんの？」
俺達があたふたしていると、中から燕が出て来た。俺は携帯を黙って燕(つばめ)に見せた。
「……やっぱり、この時期はこうゆーのが多いんだね……」
燕は携帯(けいたい)を見て、不思議な表情をしたが、
「で？行くの？」
すぐいつもの調子に戻って聞いてきた。
「え？……この旅行にか？」
「それ以外に何かある？」
あ、確かにそうだな。
「ああ行って来る。一泊(いっぱく)お泊りしてくるぜぇ」
答えたのは、俺では無く飾だった。
「そう…わかった」
そう言って燕は、部屋の中に戻って行った。
「じゃあかかり、猛になって準備しろよ」
優太達は、すでに大きな荷物(にもつ)を持っている。
……先に起こせよ。

「ようやく来たんだね」
集合場所(しゅうごうばしょ)である保灯駅に着くと、皆さんもうすでに集まっていた。
「そっちも五人か？」
修が黒髪を頭の後ろでくくっている女子、佐山(さやま)さんに向かって言った。

「見たら分かると思けど…」
佐山さんは苦笑で返した。駅前に大きな荷物を持っている十人の子供。しかも十一月の平日だから、周りの大人の目線(めせん)がある。
「揃ったのなら行こう。電車だし、中で話さない？」
どこか不安そうなな声で言ったのは、天冠(てんがん)さん。驚くっつーかあり得ない名前だと思うよ。
「そだね～。行こっか！」
呑気な声で彩森(あやもり)さんが言って、改札へと歩く。俺達もそれに続いた。
このお泊りは、色んな事が、起こりすぎたが。

つまり、大変なことに…　３ページ（後書き）

４００００アクセス突破！
嬉しいです。凄く嬉しいです！

さあ次回は、宿屋にＧＯ，
おたの。

つまり、大変な事に…　４ページ

電車に揺られ、一時間。
今俺達の目の前にあるのは、山の中、古めかしく趣がある建物だ。
「ここが泊まる宿屋？」
俺は秋永さんに聞いた。
「そうですよ。良い所でしょ？」
そう言って笑う秋永さん。俺はもう一度宿屋を見た。看板には、「ととのい」と書かれている。…確かに、良さそうな所だ。
宿屋に入ると、着物を着たお婆さんが出迎えてくれた。宿屋の中はやっぱりと言うか和装で、でもフロントにあるソファが不思議な雰囲気を出していた。
「ではお部屋に案内させて頂きます」
今度はお姉さんという感じの人が出てきた。
廊下を通って、部屋に着く。
「じゃあ、私達はこっちの部屋だから」
佐山さん達はそう言って、部屋の中に入って行った。俺達も、その隣の部屋に入る。
　部屋の中も和風で、畳の匂いがする。落ち着くなぁ。
「荷物は置いたか？しっかりしてないと盗まれるぞ」
修が先生みたいな事を言う。まぁ俺達も元気良く返事をしたが…。
時計はまだ三時、確か夕飯は七時に食堂でと言われていたし、それまで暇になるな。
そう思った時、ドアからノックの音がした。
「散歩でもしませんか？この季節は、山は凄い綺麗ですよ」
ドアを開けると、秋永さん達が居た。山が綺麗、か。確かに、今は十一月だから、良い景色が見れそうだ。
「良いですね。何か持って行く物とかは？」
「いえ、ありませんよ。山の中にある散歩コースを回るだけですか

ら。じゃあ、他の子読んで来ますね」
短い会話の後、秋永さんは部屋の中に戻って行った。
俺達も軽く準備(じゅんび)をするか。
「散歩行くの？」
部屋の中の男子の反応は、どこか面倒そうだ。風情の無いやつめ。
「発案者は秋永さ「行くっ！」
今度は飛び起きる。この反応の差はなんだろうな。
俺達はバックから菓子(かし)などを取り出し、フロントに向かった。フロントにはもう秋永さん達が居て、俺達が近くと、
「早いですね。私達は準備出来てから読んだのに」
と言った。横に居るのは温華の五人。
「では、行きましょう」
そう言って、俺達(おれたち)は秋終わる山を見に、宿屋を出た。

つまり、大変な事に…　４ページ（後書き）

総合ユニーク６０００突破！
皆様、本当にありがとう！
次回、山で。
みてね

つまり、大変な事に…　5ページ

十一月と言えどまだ秋。山は、葉をつけた木が並んでいる。だが、俺達が歩いて居るのは落ち葉の上で、どこを見ても赤、黄色の綺麗な景色が広がっていた。
「凄く綺麗だな」
「来て良かったって気になるね」
「……なんか落ち着くなぁ」
「あ、なんと無く分かります」
「疲れたなぁ」
「日頃動いてなさすぎなんだろ」
散歩コースを歩いている人は、俺達の他にも数人いたが、やはり平日だからか、そこまではいない。俺は整備されたコースの脇にある木々を眺めていた。
「あの…えっと…神鎌君」
ふいに話しかけられた。見ると、天冠さんが居る。
「ん？どうかしたの？」
俺は木の根っこを跳び越えて聞いた。
「その服、少し気になって」
「？」
「いや、なんか他の男子と服の感じが違うから」
「ああ、成る程」
俺の格好はジーンズ、長袖のシャツ、そして青い羽織もの。特徴が無いにも程があると言う様な格好だ。だが
「天冠さんも似た様な服装だよな」
そう言って天冠さんの方を見て、俺は固まった。この人、俺よりも身長高い……
「あの、大丈夫ですか？おーい」
放心状態になっている俺の肩を叩きながら、天冠さんが問いかける。

「……大丈夫です」
「暗くなってますよ？」
俺はなんとか作り笑いをして、歩き出す。前のグループも、会話が弾んでいる様だ。
俺は、そのグループに近づいて、会話の中に入っていった。

散歩を終え、宿屋に戻った俺達は、部屋の中に戻ってすぐ、ゴロンと横になった。時計は五時をさしていて、もう外も薄暗くなっている。
「意外と疲れたなぁ」
優太が寝転びながら言った。その横で修がお茶をいれている。
「山道だからな」
俺は部屋の中央に置かれているテーブルに菓子を出しながら言った。菓子が拡がると、ゴロンとしていた奴らが起き上がって来た。
「こうやって男子校に居ながら女子と出かけられるってのは幸せだねぇ」
菓子を食べながら飾が言った。こぼすなよ。
「男子校どうのはともかく、大人数でこう言う所に来れるのは良いよな」
俺はお茶をすすりながら言った。
「夕飯前に風呂に行こうぜ」
ふと、和樹が言った。テーブルの上の菓子が無くなった頃だ。時計は五時半をさしていた。
「ん、風呂か。良いな。行こうか」
夕飯は七時だし、まだ余裕がある。俺達は、必要な物を持って宿屋

の大浴場へ向かった。

つまり、大変な事に…　6ページ

「気持ち良かったなぁ」
ドライヤーで髪を乾かしながら、俺は呟いた。
「確かに良い湯だったな」
修も同意した。和樹達も髪を乾かしている。
宿屋だからか、とても広い風呂を使えるのは、凄いよな。さっぱりした。
俺達は、荷物を持って、脱衣所から出た。すると、俺達が出て来たところの右隣、つまり、女湯の方から、秋永さん達がでてきた。
「あ、そちらもお風呂に入ってたんですか？」
秋永さんが言った。
「はい。…えっと…天冠さんはどうしたんですか？」
「あ…あの子は今日は…その……月もので」
ああ成る程と、飾達は頷いた。
「じゃあ、この後食堂でね」
彩森さんが、そう言って俺達にウィンクした。

食事を終え、部屋に戻り、後は自由にした後眠るだけの俺達は、暇を持て余し、部屋にあったテレビを、なんとなくつけてなんとなく眺めている。もう何杯飲んだか分からなくなったお茶をすすりながら、俺は、テレビに映るタレントを見ていた。

ピリリリリリリリリ

突然、優太の携帯が跳ねた。優太は携帯を持って開く。そして、

「別に電話(でんわ)じゃなくても良いんじゃないか？」

と言った。俺達は聞き耳を立て、相手が誰か探ろうとした。優太はそんな俺達に気がついたのだろうか、クスッと笑って壁を指差した。その壁の向こうには、秋永さん達が居るはずだ。俺達は納得(なっとく)して、テレビを消し、優太のそばに行った。静かになった部屋の中では、少しだが、相手の声が聞こえる。

「あれ？そっち急(きゅう)に静かになったね。どうしたの？」

優太の携帯から秋永さんの声がする。

「いやな、男共が聞き耳を立ててるんだよ」

「えーっ？人の会話聞くの？」

優太が苦笑(くしょう)する。何も言えない俺達。

「それで、わざわざ電話じゃなくても良かったんじゃないの？」

「私達は今寝巻きだもん。だからちょっとね」

ふーん。だからか。っておい和樹何唾のんでんだよ。

「それでさ、そっちは今何してるの？」

「今は携帯の音を聞いてるよ」

「あっ、じゃあ今まで何(なに)してた？」

「テレビ見てたな。何となくで」

電話の向こうからそうなんだと聞こえてくる。

「ところで、なんで電話掛けてきたんだ？」

「それこそなんとなくだよ」

なんとなくで掛(か)けてくるか。凄いな。

「日付変わってヤッホー。元気か？」

突然、電話から聞こえてくる声が変わった。誰かと代わったのだろうが、ノリがラジオです。

「元気ですよヤッホー。そちらはどなたですか？」

優太から携帯を奪(うば)った修が、同じ様なノリで返す。

「なっ、そちらこそどなたですか〜？」
なんか、和む。その後も携帯を使ってお喋りしていたら、何時の間にか朝日が窓から差し込んだ。どうやらかなりの時間喋っていた様だ。電話の向こうと和樹が、長電話（ながでんわ）し過ぎたと悲鳴を上げた。

つまり、大変な事に…　　7ページ（前書き）

なんとか今日中に書き切れました。

つまり、大変な事に…　7ページ

日が登っては仕方が無い。俺達は着替(きが)えて、ロビーに向かった。
別にロビーで何がある訳でもないが、唯(ただ)なんとなく暇を潰したかった。ロビーには、雑誌や軽い小説などが置いてあり、俺達は適当な雑誌(ざっし)を取って、クロスワードパズルを解いたりしていた。俺はうーんと伸びをした。そして、ふとフロントの方を見ると、秋永さん達がやって来た。時計を見ると、七時を指(さ)している。成る程。朝食か。
「こっちにいたの？探したよ。部屋に居なかったからさ」
佐山さんがこちらに気がついて話しかけて来た。
「暇(ひま)だったもんで」
雑誌をしまって俺達は立ち上がった。
朝食を終えた後も、俺達は適当に部屋に居た。暇だなぁと思っていると、時間がとてもゆっくりに感じる。窓の外は、木々が葉っぱを落としていた。
「……？」
突然、頭が重たくなった気がした。それと同時にもの凄(すご)く眠い。だが別に暇だし、眠っても良いか。だが、このどうしようも無い眠気。どこかで体験した気がする。そう、結構前に……
「暇だからちょっと遊びに来たよー」
部屋のドアから秋永さん達の声を聞くと同時に、俺は畳(たたみ)に倒れ込んだ。

「う…うぅん」
目が覚めた。起き上がる。周りを見ると、秋永さん達が驚(おどろ)いた表情をしている。修達は、呆れた顔をして俺を見ている。なんだろう。
「その…猛君なの？」
秋永さんが不思議そうに見ている。頭をかこうとして、量が多い髪に触れて、俺はどうして秋永さん達が不思議(ふしぎ)な表情をしているのかが分かった。
俺は不思議な体質だったと。
さっきまで忘れていた。そうだった。あの眠気は徹夜した時に起こる強制変化だ。もちろん、温華(おんか)の人達には教えていない。まったく、凄いドジ踏んだもんだ。
「あ……あの…」
呆然と俺を見ている秋永さん達に説明しようと口を開いた時だった。
「っかわいい！」
彩森(あやもり)さんが、佐山さんが、草野(くさの)さんが、俺に飛びついて来た。
「ふわっ！」
押し倒される俺。
「何この髪。どうやったらこんなに綺麗(きれい)で真っ直ぐでいられるの？」
「しかも真っ黒。濡烏色(ぬれがらすいろ)ってこんな色の事を言うんだろうなぁ」
「顔が何より美人！このほっぺ！可愛い！」
「ち、ちょっと、少し落ち着いて…」
「男物の服なのがなぁ」
「じゃあ着替(きが)えさせれば良いじゃん」
「「賛成！」」
「さ、男子達は外いった！」
佐山さん達にまくしたてられ、部屋の外に行く和樹達。何故か天冠(てんがん)さんも出て行ったが、助けてくれよ。
「さあ、どんなお洋服を着させようかしら」

笑顔を浮かべる彩森さん。それは俺には、悪魔の様に見えた。

つまり、大変な事に…　7ページ（後書き）

第五十話？
文字数は少ないのに無駄にページが多いこの小説ですが、五十話と言う節目に来ました！
次回は、知った事。
おたの。

つまり、大変な事に…　8ページ

この体質になってからだいたい七ヶ月経っていて、別に女物の服に慣(な)れていない訳じゃないが、このミニスカートと言う物、全く落ち着かない。

今までは、見た目の違和感(いわかん)を消すために女物の服を着ていたから、殆どがズボン系だ。スカートなんて、制服と劇の衣装位(いしょう)でしか着た事ない。それに、男子校に居た為に女子のオシャレと言うものを全く知らない。だから、この黒タイツも落ち着かない。

服が一通りコーディネートし終えた様で、今度は髪が弄(いじく)られる。落ち着かない。全く持って落ち着かない。

「やっぱり髪の毛の先端は少し内側にクリンってさせた方がいいなぁ」

体の前におりている髪を、ヘアアイロンで整えて行く彩森さん。されるがままの俺。

「これで良いかなぁ？」

俺の顔を見て呟(つぶや)く女子三人。

その後これで良いかと頷いて、外で待っている人達を呼びに行った。しばらくして、俺の所に戻って来た彩森さん達は、俺を見ると、

「えっ？なんでもう落ちてるの？」

声を上げて目の前に迫って来た。本当に目と鼻の先にだ。俺は驚(おどろ)いて仰け反る。だが彩森さんは俺の肩をガシッと掴んで更に顔を近づける。

「ちょ…ちょっと…」

俺が困惑の声を上げると、彩森さんは胸におりている俺の髪を持って、

「さっきかけたはずなのに…」

と呟いた。

「凄く強いストレートだね…」

佐山さんも呟く。見ると、先程少し丸めて貰った毛先が、今はもうまっすぐに降りている。驚いている理由はこれかと思っていると、後ろから男子達がぞろぞろとやって来た。奴らは俺を見るなり

「……誰？」

記憶喪失になった様だ。

なんてのは嘘で、すぐに、やれ可愛いだのなんだの散々聞かされた褒め言葉を言い出した。

俺は鏡を見ていないから何とも言えないが、まぁ多分大丈夫だろう。こいつらも褒めてるし。それよりも、彩森さん達が離れてくれないと、俺、動けないんだが。

「で、どうして急に女の子になったの？」

ずっと部屋の中でこちらを見ていた秋永さんが問いかけてきた。

「そうだった。ねぇ、さっきまでホントに男の子だったよね？」

彩森さんが俺から離れて、座りなおして聞いた。

「今から軽く説明するよ」

俺も座りなおして、そして、まっすぐ彼女たちを見て、説明を始めた。

「ふぅ～」

一通り説明をして、落ち着いた俺は、何か飲み物を飲もうとロビーに出た。温華の五人も、納得してくれたようだ。さっき部屋に戻って行った。自販機でカフェオレを買って、椅子に座ろうとした時、天冠さんが目に入った。隣に座ると、天冠さんも気がついた様だ。

「そのカフェオレ、最近発売したやつだよね」
話しかけて来た。
「うん。天冠さんは…コーヒーなんだ」
俺はカフェオレにストローを差し込みながら言った。
「まぁね」
そう言って天冠さんは笑った。
「どこか中性的な話し方をするなと思っていたから、何かあるんだろうとは思っていたけど」
「まさかこんな体質だとは思わないよね」
俺は天冠さんの言葉を引き継ぐ。天冠さんは笑ってコーヒーを口に含んだ。俺は気になっていた事を聞いてみた。
「ところで、天冠さんって……男性？」
「ぶっ？」
コーヒーが吹き出る。俺は驚いて天冠さんを見るが、噎せてしまっている様だ。背中をさすってやって落ち着かせると、天冠さんはこちらを向いた。そして、

「……何で分かったの？」

と言った。
「えと…なんて言うかな。女子の振る舞いとかを強制された人って、どこか硬いと言うか、不自然って言うか……」
俺がそう言うと、彼は不安そうな顔をする。
「でも、俺…私以外気付いてないみたいだし、ほ、ほら、こっちも女子になったり男子になったりで色々やってるから……」
そう言うと、少し安心した様で、彼は座り直した。いつから行っているのかその姿勢は、女の子のそれである。
「でも、どうして温華に？」
そう尋ねると彼は、息を吸って、天井を見た。
「……交換条件みたいな物で、家が財政的に危なかったらしくて、

それで、学校に相談に家族で行ったらさ、その時に校長先生に、『その子を我が校に入学させると言うのなら、協力致しましょう。入学させるだけで良いので』って……」

「……」

近くで見ても、確かに『美少女』だよなぁこの人。天冠さんには申し訳ないけど、その校長先生の判断、正しいと思う。

俺はカフェオレを飲みながら思った。

ピリリリリリリリ

その時、携帯(けいたい)が鳴った。みて見ると、そろそろ宿屋を出るから部屋に戻ってこいと書かれてある。俺はその事を天冠さんに伝えて、荷物を取りに部屋に向かった。

「じゃあ、またね！」

佐山さんがそう言うと同時に、電車のドアが閉まった。俺達はその車両を見送って、今学園に帰っている途中だ。

宿屋は結構楽しんだな、やっぱり。

「たった二日で、駅前もこんなに変わるのか」

不意に修が呟(つぶや)いた。顔を上げると、イルミネーションがあちこちに飾られている。

「本当だ。まだ十二月はいるって時なのにな」

飾が言った。

俺はふぅっと息を吐いて、見えにくいものの、息が白くなる季節(きせつ)である事を確認した。

つまり、大変な事に…　８ページ（後書き）

五十話超えて浮かれて少しだけ長いです。
が、何かやっちまった感があります。
さぁ次回は、季節の行事。
お楽しみにね。

つまり、クリスマスって訳。　1ページ（前書き）

いよいよ物語が現実を抜かしましたw

つまり、クリスマスって訳。　1ページ

町が、国が、人が、どことなくウキウキして見える。駅前を通れば輝かしい光の装飾があり、お店には大きな偽物の木が売り出される。そう。十二月にある、子供の頃にほとんどの人が楽しみにしていたであろう、クリスマスが近づいているのだ。

だが、高校生になると楽しみになるクリスマスも、妬ましいものにしか感じない人達もいる。それは、教室を見渡せば、嫌でもわかる。先日の交流会で、はたまた他の場所で出会いをして、予定が埋まっている者もいるが、それは少数だ。

歓喜と怨念の混ざったような教室から逃れるように、俺と燕は屋上の前の踊り場にいた。屋上の外に行ったほうが安全なのだが、外は寒いし、第一鍵がかかっている。教室はストーブがついていて暖かいのだが、昼休みに教室にいたら、怨念渦巻く生徒にまとわり憑かれるので、寒い中マフラーに顔をうずめて、誰も来ませんようにと願いながら過ごしている。無駄に広いこの学園にも始めて感謝した。

「はぁ～っ」

かじかんだ手先に息を吹きかけて暖める。

「寒いねぇ」

屋上のドアに寄りかかりながら燕が言った。そうだねと俺は返した。

「クリスマスだからって、少し浮かれる程度でいいのに、みんな躍起になってさ」

俺はため息がちに呟いた。お祭り的みたいにさわぐですませられないのかねぇ。

「無駄に外がロマンチックに装飾されているからってね」

燕も困ったように笑う。

「みんなムードに流されるんだよな。まぁ、恋愛にはムードも重要なのかもしれないけど」

「どこかに出かけるのも疲れるし、寮でゆっくりするのがいいね」
「それは年末が自然と寮でまったりすることになるよ。せっかくだし、イルミネーションを眼下に時計塔から星でも見ようか」
「それもなかなかロマンチックだね」
話していると、鐘が鳴ったので、俺と燕は教室に戻る事にした。

「つまり……どうゆうこと？」
「ゆっくりしたいってこと」
和樹たちに俺達の意思を伝えると、ほんの少し和樹たちは固まった。またどこかに連れていく計画でもしていたんだろうが、教室の男子達から刺さるような目線を浴びている俺たちは小さいぱーちぃーで十分だ。
「しかしクリスマスだってのに部屋でゆっくりするだけだなんてつまらんな」
優太が顎に手を添えて言った。
「でも遊びに行くのはいやだって言うしよ」
とぶぅ垂れる飾。
「ほかにはないのか？クリスマスらしいことって」
修が言った。イベントには手を抜かないなぁこいつら。
そう言いながらも、俺もこのままだとなぁ、的なことは考えていた。しかし案が思いつかない。どこかに遊びに行かなくても、クリスマスらしい雰囲気が楽しめるものはないのかな？
「えーっと」
不意に、燕が声をあげた。

つまり、クリスマスって訳。　2ページ

「何？」
俺は燕の方を向いて言った。
「ケーキでも作れば良いんじゃないかな？」
その一言が、俺達をその場に縫い付けた。
クリスマスケーキ。サンタのマジパンが乗っかった可愛いらしくデコレーションされたケーキ。クリスマスにしか顔をださない、子供の目を輝かせる存在。それを
「俺達で作ろうってのか？」
俺は燕をまっすぐ見て言った。
「俺達？ケーキ作るのにそんな人数要らないから、［私達］で作るつもりだったんだけど…」
燕は人差し指を口に当てて、小首を傾げながら言った。いつ覚えたそんな仕草。
それよりも、こいつの言ったと言葉。明らかに、俺と燕でケーキを作りますと公言したな？
「まじか？なら俺達は装飾品パーティーグッズを揃えるか」
修が飾達を見渡して言った。頷く飾達。
「んじゃ、百貨店とかで揃えるか」
「かかり、どんなケーキを作るか考えない？」
「え？あぁそっか。デコレーションするなら、やっぱりサンタとトナカイは必要かな？」
「そっちもだけど、普通のクリームかチョコクリームかとか、フルーツを乗っけるかとか、そっち」
「あ、そっちか、……そうだね。生クリームでいいと思うよ。普通ので」
クリスマスパーティーの事について話す俺達。たった一日のための話し合いは、面白く進んで行った。

「二十五日迄にやる事が結構あるな」
やる事を書き出した紙を見て、勇太が言った。装飾品一式。ケーキの材料。クラッカー（食べる方では無い）。思ったよりも忙しくなりそうだ。だが、今年のクリスマスは、とても面白くなりそうだ。

クリスマスケーキかぁ。どんなのにしようかな。紙に理想を描いてゆく。白いケーキの上には、サンタとトナカイと、メリークリスマスと書かれたチョコレートでも乗っけて……
「落書きをするなっ！」
バンっ！と頭を叩かれた。顔を上げると、少し怒った先生の顔。やべっ見つかっちった。
俺はページを変えて、黒板に書いてある事を急いでかきうつした。飾が横から視線を送って来たので、俺は首をすくめてみせた。
とにかく今は、数学を頭に入れないとな。考えたら、明日から期末テストだ。クリスマスはその後。
俺がそんな事を考えていると、先生が、黒板の、まだ俺が書き終えていない所も黒板消しで消し始めた。

つまり、クリスマスって訳。　3ページ

「ふぅー、終わった～」
期末テストの最終日。無事に学校を終えて、もう気がかりが無くなって、クリスマスの事に考えを巡らせる事が出来ると安堵していた俺は、気の抜けたこえを出した。
「お前……いくらテストが終わったからって、そこまでいかないだろ…」
飾が呆れた声を出す。俺はくたっとしたまま、
「良いじゃん。少しは力抜いてゴロゴロしても！」
と言い返した。そして
「ところで、パーティーの道具とかなに買うか決まった？」
と質問した。この問いに答えたのは、飾ではなく、奥から出て来た燕だった。
「一応決まってるよ猛。だだ、パーティーってなに？」
燕は不思議そうなめを向ける。
「パーティーはパーティーだ。それよりも、修達はどうしたんだ？」
俺は堂々と言い返してみる。
「さあな、掃除当番なんじゃねぇの？」
飾は気にしないで答える。
「成る程…で、買い物はやっぱり今日行くのかな？」
俺は少しスルーされた事にショックを受けながら質問する。
「だとおもうよ。猛。ケーキどんな風にするか決めた？」
燕がそう聞いて来た時、玄関の方から、声が聞こえた。振り返ると、修達が立っていた。
「買い物ついでに駅前イルミネーション見に行こうぜ」
修が、呟く様に言った。声がなんとか聞こえる程度に呟いたのだ。
その後、俺達は防寒対策を施して、寒い寒い外に、パーティーの準備をするために出かけた。

「スーパーの中は暖かいね」
燕が買い物籠を持ちながら言った。流石に店内は暖房が効いていて、コートに羽織っている必要もなさそうだ。修達はさっき近くの１００円ショップに行った。俺達は、パーティーで出す料理の材料を買うため、スーパーにいる。
「とりあえず、卵と小麦粉…あっ薄力粉ね。と、鶏肉のドーンとしてるやつと、野菜も欲しいなぁ。冷蔵庫ガランとしてたし」
卵を籠にいれながら燕が言った。
「成る程…で、道具とかは？」
俺は周りを見渡しながら聞いた。スーパーも、クリスマスカラーに装飾されている。
「道具？生クリームぶにゅうって出すやつとかスイッチ入れてブウィーンってするやつとかの事？」
「よくわかんないけど多分それ」
なんでこいつの説明は擬音語が多いんだろうな。と、視線を横にずらすと、
「キャベツが一玉８６円？」
「うそ？安っすいじゃん！かわないと買わないと」
素晴らしい物を見つけた。

つまり、クリスマスって訳。　４ページ。

キャベツは残りが数えられる程度だったが、その中でもなるべくおおぶりな物を選んだ。
俺達は得した気分になって、スーパーのなかを歩いた。そして、予定していた物を全て買って、スーパーを出ると、修達がコートにくるまって震えながら待っていた。
「……お、おせせぇよ」
震えた声を発しながら睨んでくる。
「すまんな。予定よりも多く買っちまった」
俺はレジ袋を掲げて言った。
「んじゃ、イルミネーションの観覧をしましょうか」
和樹が言った。俺達は頷いて、駅前の大通りに向かって歩き出す。
「こうしてみると、普通の家も飾られてるな」
大通りに向かう途中、路地を歩いていると、優太がそう言った。いつもと変わらない路地の中に、一軒だけイルミネーションを施した家がある。周りが暗いから、とても綺麗だ。
「おっ見えたぞ」
飾が指差した方向は、夜なのにすっごく明るい。俺達は、その明るい方へと歩いて行った。そしてーーーー
「……？？」
そこは、ファンタジーの様に幻想的だった。
夜とは思えないほど綺麗に彩られたイルミネーションは、サンタや雪だるま、雪の結晶などを模したものが多かった。しかし、そんな中、一際目立っているものがある。駅前にいつも突っ立っている大きな木だ。
　いつもは唯突っ立っているだけでなんの変哲もない大きな木だが、このシーズンは見事に装飾されている。そして、この木が、この存在が、町の景色を幻想的に変えている。

「……きれぇ」
横で燕が呟いた。道ゆく人は、イルミネーションを見ずに歩いて行く。とても綺麗なのに、目を向けないのは、見慣れてしまったからか、見ても何とも思わないのか。俺は少し考えた。

「さむっ……ストーブ…」
外から帰ってきて、真っ先にストーブのスイッチを入れる。そして、ストーブが暖まる迄に買ってきた品物を冷蔵庫に入れる。コートをクローゼットにいれて、そろそろ暖まったかなとリビングに戻ると、
「ストーブの前を陣取るなっ！」
五人に向かって一喝。
「部屋が暖まらんだろうがっ！」
そう言ってストーブの前から引き剥がす作業に入った。

十分後……
「あったかいなぁ」
俺は、ストーブの前に座っていた。
　寒い中、ストーブの前にいる人を引き剥がすのは無理な話で、それでも何とか引き剥がそうとしていると、何時の間にか自分もストーブの前で暖まっている。不思議だ。
まぁさっきのやつらは時間も時間って事でそれぞれの部屋に送り込んだが。
そうしているうちに、なんだか眠くなってきた。このまま寝たら火

傷しそうだが、ストーブの前から離れたくない。俺はそのままウトウトして、ウトウトして……

つまり、クリスマスって訳。　４ページ。（後書き）

土、日曜使って貯めてたストックが切れました。なのに話が浮かんで来ない。
明日、投下出来ないかもしれません。
取り敢えず次回は、へっくし。
おんたのしみに

つまり、クリスマスって訳。　5ページ

「っくしゅん！」
十二月の第二週。ストーブの前で居眠りをして、案の定風邪を引いた俺は、ベッドの上でただただ天井を見つめていた。只の風邪の筈なんだが、無駄に身体が重たい。指ですら意識を向けないと動かせない。
「猛～起きてる～？取り敢えずおじや作って……って、今はかかりか」
頭の上から燕の声がする。と、目の前に燕の顔が出てきた。少し心配そうに顔を覗き込む燕。顔色を伺うのは良いのだが、燕の頭から垂れる髪が、俺の鼻をくすぐって…
「っくしゅ！」
「うわっ汚っ！」
ひどい事になった。
「かかり、いくらなんでも人の顔の目の前でくしゃみしないでよ…」
「……ごめん」
呆れた様な、困ったような顔を向けられて、俺は謝った。
湯気の立つ鍋を机に置いて、燕は顔を拭いた。俺は腕に入らない力を入れて、上体をお起こす。
「ホントにただの風邪？すごく顔色悪いよ？」
燕が鍋の中身を口に運びながら訊いてきた。ところでその鍋、俺のってさっきいってなかった？
「インフルとかじゃないのは確か、重たい風邪じゃないって言われたんだが…」
「ふーん。とりあえず、おじや食べなよ」
燕が言うので、俺はさらに腕に力を込める。が、上手くいかずにベッドから転落してしまった。
「だあっ！」

「だ、大丈夫？」
そのあと燕に助けてもらい、無事に昼食を終えた。
体が動かないってのは、それだけでかなりつらい事なんだな。
そして目が覚めてしまうと、なかなか寝付けない。ただただボーっとしているしかないのだ。と、
「見舞いに来たぞー」
玄関のほうから、声が聞こえた。
そしたドタドタという足音の後、部屋のドアが開き、和樹達が部屋に入って来た。
「見舞いって、別に骨折った訳じゃないんだからさ」
「な。早速そういう事言うなよ」
部屋に入って来た四人に向かってやる気のない疲れた声を出すと、優太に睨まれた。
「とりあえず、果物とか買って来たよ。かかり、体動かないんだったら、あーんしてやろうか？」
飾がバナナを取り出しながら聞いて来た。
「……じゃあ食べさしてくれ」
「えっ？」
さっきの言動は冗談だったのか、飾が驚いた声を出した。
「どうした？くれるんなら早くくれ。出来ればそこのミカンが良い」
「お、おう」
仰向けで寝ていると、目の前にミカンが出てくる。俺は口をあけ、ミカンが口の中に入ると、ゆっくりと咀嚼した。
「体が動かないのは嘘か？元気そうだが」
「ん、体が動かないんじゃなくて、上手く力を入れられないだけだよ。頑張ればそりゃ動く」
最後のミカンを食べさしてもらいながら俺は言った。
「じゃあ寝るか」
「は？ちょっと人が見舞いに来てるのに眠るか普通？」
俺の言葉に、修がつっかかった。

「いいんだよー別に。それに今寮にいるんだし見舞いもなにも無いでしょうに」
そう言って俺はめを閉じた。修達がまだ何か言っているが、無視する。暫くして、俺は深い眠りに落ちていった。

つまり、クリスマスって訳。　５ページ（後書き）

昨日５００００００アクセス達成したのに投下出来なかった。なんか悔しい。
次回は、まだ未定です。

つまり、クリスマスって訳。　６ページ

「もう大丈夫なのかよ」
「見てみろ。ピンピンしてる」
次の日、昨日の風邪が嘘のように体の具合は快調。俺達は、別に何をする訳でも無いが、集まっていた
いやね、まだクリスマスまで日にちあるし、遊園地でもないのに今から盛り上がるのもどうかと思う訳よ。今から浮かれてもなんかなぁ～って感じだしさ。
とにかく、暇になった俺達は、カレンダーをボーっと眺め、床に寝転がり、ゴロゴロしていた。
「暇だ～」
「ひまだね」
「暇だな」
発する言葉もこれくらい。まったく、しょうがないのでクリスマスまで日にちを飛ばすか。

そんな訳で十二月の、二十五日。
外は幸せムード満載。寮内は恨みのムード満載でやって来たクリスマス。

「あいつらこれ見てどんな反応すると思う？」
「普通に食らいつくとおもうな」
完成したケーキを箱にいれて、パーティー会場となる優太達の部屋に向かう。学校内もＢＧＭでクリスマスソングを流していた。
「雪とか降らないかな？」
「空を見なさい。快晴ですよー」
「夢が無いなぁ」
浮かれているのかピョコピョコ跳ねる１５５ｃｍ。ケーキは俺が持っているから大丈夫だが、目を離せば転びそうだ。
だが浮かれていたのは気分だけの様で、危なっかしかったものの、一度も転ばずに優太達の部屋に着いた。なんだか、子供を見守る親の気持ちがわかった気がする。
「みんないるー？」
ドアを開けて、玄関から問いかける。
「「「「みんないるー！」」」」
中から、元気な声が聞こえた。
部屋の中に入ると、リビングに堂々飾られている偽物の木があった。テーブルにはいつ作ったのかピザやチキンがあり、豪華だ。俺はケーキの入った箱をテーブルの上において、修達の方を見た。修達は、ゲームで盛り上がっている。
「今誰が一位？」
持ってきた物を全てテーブルに置いて、俺は飾に話しかけた。
「優太。以外とこいつ強いんだよ」
目線はゲームに向けたまま、飾は答えた。
「お前このゲームやり込んでるとさ言ってなかったっけ？」
「っるっさい！」
だいぶのめり込んでるな飾。と
「お？修が一位になった」
床に座ってゲームを見ていた燕が言った。言わなくても分かるんだがな。

数分後……

ゲームは結果、突如這い上がって来たダークホースの和樹が戦いを制した。

つまり、クリスマスって訳。　7ページ

ゲームをやめて、テレビをつける。テレビの内容もクリスマススペシャルだらけだ。
「料理暖まった？」
振り返って俺は聞いた。
「おう。さっさと席つけよ。じゃねぇとチキンやらねーから」
「それは困る」
チキンが無くても腹一杯食べれるだろうが、チキンを食べなくては雰囲気が出ない。
「いただきます」
テレビから流れるスペシャル番組を尻目に、俺達は食事を始めた。コップに入った炭酸飲料で乾杯し、ピザをつまむ。食事の最中も会話が弾み、楽しい雰囲気が崩れぬままにパーティーは進んで行く。ケーキを食べながら、いつからか信じなくなったサンタに会えなくても、クリスマスは楽しめるものなんだな。そう思ったその時、

パァン。

と言う音とともに、俺の顔に何かがかかった。そして鼻にくる火薬の匂い。
「和樹、クラッカーを人に向けて打つな」
俺は目の前に座って居るやつを睨んだ。睨まれた和樹はふいと視線を外した。
「でもボーっとしてるやつが目の前にいたら悪戯したくなるだろ？」
目をそらしたまま和樹が言った。したくなるだろってお前なぁ。
俺は溜息を着いて、ケーキの最後の一口を口に運んだ。

「なぁ、ホントにいくの？」
コートを羽織って、暖かい格好をして玄関に居る俺達。
「行くの？って、かかりお前が言ったんじゃねぇか」
靴を履きながら飾が言った。俺は冗談のつもりだったんだがな。
「飾、そうは言っても俺は本当に行くとは思わなかったぞ。……
時計塔に星を見に行くなんて」
そう、俺達は今から、イルミネーションを眼下に星を見ようと、時計塔に行こうとしているのだ。
「なんだ、冗談だったのか。でも行くぞ、暇だから」
表情をまったく変えずに修が言った。
「暇だからって…まぁ良いか、綺麗だし」
「なんだ、結局行くのか」
優太のつぶやきを無視して、俺達は玄関を出る。俺は大きく息を吸った。外のつめたくてかんそうした空気を吸い込んで、肺が心地よい。
「うう～寒い。早く行かない？」
マフラーに顔をうずめた燕が言う。よく見ると、鼻頭が真っ赤だ。
俺達トナカイかと笑って移動し始めた。
「あーなんかテンション上がって来た。よし！なんか歌うか」
時計塔に向かう途中で、和樹が突然言った。
「歌うのは別に構わないが、和樹、お前まともに歌わないだろ」
修が前を歩きながら言った。
「アレンジだ、アレンジ。それに正しい歌詞歌おうがなにしようが、楽しければ良いんだよ」
「聞かせて和樹。なんか楽しくなる歌」
「なんだよかかり。…お前、俺のファンになったのか？」

「それは無いよ」
その後、時計塔への道から歌声が流れ始めた。それは一人が声を出しているのではなく、何人かが歌っている声だった。
夜道に響くクリスマスソングが、晴れ渡った夜空に溶け込んで行く。

つまり、里帰り。　1ページ（前書き）

この話はちゃんと「つまり」です。

つまり、里帰り。　1ページ

「そういや、おじさん達はお兄ちゃんがお姉ちゃんになったのをまだ知らないんだよね？」
一月、玄関のまえで翔（かける）がふと言った一言に、俺、母、父の三人は固まった。
　新年になって、だいたい八ヶ月振りに家に帰った俺は、今度は親戚に会うとかで、母方の実家に向かおうとしている。翔の狙いは確実にお年玉だろうがな。
でも確かに叔母さん達は俺が女にもなる事を知らない訳で……
この先何回ぐらいこの身体の説明するんだろうな。
「猛、どうするんだ？」
親父が俺をまっすぐに見ながら言った。
「どうするって…普通に説明するよ。幸い俺は自分の意思で男になったり女になったりするから、見せた方が早い」
俺はぶらっきぼうにそう言った。
やろうと思えば、その場で性転換出来るから、人に説明するのは簡単だ。まぁ、変わるのは身体だけで、服は変わらないから変態の構図はどうしても出来てしまうのだが…。
大きな鞄に、男物と女物の服を入れて車に乗り込む。
車が発信すると、俺は外に目を向ける。そういや、まだ今年雪降って無いんだよな。
「兄ちゃん。陽君どんな反応するかね？」
車の中で、翔がニヤリとした顔で聞いて来た。陽君ってのは、いとこの事だ。
「この一年でいろんな事知ったかもしれないしなぁ。驚くだろうけど、もう弄れないだろうな」
陽は俺と同い年なのに、ウブな奴だったからな。でも流石に高校生になると無駄なもん覚えてるだろう。今年は去年みたいな慌てぶり

は見れないだろうな。
「そうかなぁ？だとしたらつまんないね」
翔は笑ってそう言った。
　車で家から二十分。案外近いところに、母の実家はある。
車から降りて、玄関から中に入り、リビングの扉を開けると、親戚の顔が幾つも並んでいた。
「おっ猛君。明けましておめでとう」
まず最初に叔父さんが口を開いた。
「あっ明けましておめでとうございます」
後からリビングに入って来た翔と共に新年の挨拶。
「おばあちゃん明けましておめでとう」
翔が祖母に向かって言う。俺の後ろから両親も入って来て、リビングが騒がしくなる。
「明けましておめでとうタッケ」
声をかけられて、横を向けば、従姉妹の愛香が居た。
「明けましておめでとう」
なんだか印象が変わったなぁと思いつつ、俺はそう返した。
するとだ、いきなり愛香が
「タッケ、……身長、まだ１６０行かないの？」
ニヤニヤしながらそう聞いて来た。
「……っるっさい」
思いっきり反応したらずっといじられてしまう。我慢だ…我慢だ。
「あら～愛香ちゃん、綺麗になったね～」
その時、俺の後ろから両親がやって来た。
「あ、叔母さん。明けましておめでとうございます」
「明けましておめでとう。はい、これお年玉」
「あ、ありがとうございます」
目の前でお金の入った袋が手渡される。

つまり、里帰り。２ページ

まぁお年玉だから可愛いイラストがはってあるんだけど、
「みんなぁ、ほらお餅焼いたよぉ」
そう思っていると、キッチンから祖母がお餅がたくさん乗ったお皿を持って出て来た。まだ背筋がピンとしてるから、長生きしそうだ。
そう思いながらテーブルに近づき、置かれた餅に手を伸ばす。と、
「やぁ、皆、明けましておめでとう」
玄関から複数の人が入ってくる。その中には
「陽君！」
もいた。陽のおじさんおばさんに挨拶して、お年玉を貰い、翔を見ると、陽に話しかけていた。その様子をしばらく見ていると、翔が陽に耳打ちをした。そして
「え？猛がお姉ちゃんにもなる？」
陽が驚いた様子で言った。しかも大声で。
その瞬間、空気が固まった。俺ら家族は翔を凝視していたし、親戚一同聞いてはいけない言葉を聞いてしまったように動かない。そんな中愛香は、
「……えっと…そうゆー趣味？」
と、遠慮がちに聞いてきた。
「早とちりしないでくれ。今説明するから」

「男にも…女にもなるか…成る程ね」
口頭の説明だけで、愛香は納得した。不思議だな。普通納得しない

よ。
「いや、でもあり得ないし…」
陽の叔父さんは普通の反応だ。俺は取り敢えず周りから見えていそうな場所に移動して、目を閉じ、大きく息を吸った。息を止め、一瞬身体の感覚がなくなったのを確認し、目を開く。視界に映るのは、驚きで目を見開いている親戚の顔だ。
「……」
皆口をあんぐりと開けている。うちの両親は笑いをこらえてる。
「さっき翔が言ってたのは、こういう事です」
固まった空気に耐えられなくて、俺は口を開いた。それに反応したのは愛香で、俺の目の前に立つと、色々と質問して来た。
次に動いたのは両親で、おじさんおばさんに早口で何かを言って、リビングの外に出て行った。おばあちゃんは鼻歌交じりに料理を作って居るのがキッチンから聞こえてくる。
で、今リビングに居るのは子供達。四人だけだ。
「えっと…その…猛？」
陽が戸惑いながら言った。なんだろう。今までこんなに普通の反応ってなかった気がする。今までの反応って確か
「タッケ可愛い顔してるね。良いなぁ羨ましいなぁ。あ、ねぇねぇ、せっかくだからオシャレしない？」
こんなだった気がする。
そんな事を考えていると、愛香が正面から俺の服の裾を掴んでいた。
「？どうした？服になんかついてるのか？」
気になって話しかけると、
「取り敢えず、この男物の服は脱いじゃって！」
「ひゃぁ？」
「「なっ？」」
愛香はガバッとお俺の服を脱がしにかかった。その後ろで陽と翔が突然の事に驚いて居る。

「ちょ…ちょっと後ろ！」
「後ろ？……あんたら、女子高生の着替えを堂々見る気？」
愛香がそう言って睨むと、二人は慌ててリビングを飛び出した

つまり、里帰り。　3ページ

着せ替え人形になるのは、嫌なもんだ。
「こういう服を着てみたいと思う？」
ってフリフリがついた服を持って聞いてくるから、俺の意思を尊重してくれているのかと思うのだが、俺が口を開く前に
「ほら早く着替えて！」
と服を押し付ける。
これでは着てみたいも何も無い。だがそう言う服に限って第三者の反応は
「凄く似合ってる」
「可愛い…」
だから困ったもんだ。
「まさかゴスロリまでも可愛く着こなすとは思わなかったわ。完璧にネタだったもん」
笑いながら愛香が言う。俺はこんな服をどうして所持していたか気になるんだが、質問してもはぐらかされてしまった。
「愛香、人で遊ばないでくれ」
俺は溜息を吐いた。その時、リビングのドアが開いて、大人達が帰って来た。
　大人達は俺の方を見て、
「…猛、なんだその服は…」
と困惑しきった表情で言った。
俺はどう答えたら良いかがわからなかった。

「しかし、着物もかなり似合ってるな。二人とも綺麗だぞ」
陽の叔父さんの、どうせ色々と着替えさせているのなら、正月らしく着物にしたらどうだと言う意見により、親戚揃っての初詣。
俺と愛香は、振袖姿で歩いている。俺らのすぐ後ろに陽と翔。で、更に後ろに親達。空は見事な快晴だ。
「よくもまぁこんな綺麗な和服が幾つもあったな」
俺はそう呟いた。神社に近くに連れ、段々と人が増えてくる。流石は新年だな。
「今年はおみくじ、誰が一番良い結果なんだろ？」
後ろから翔が話しかけて来た。
「そうだね、去年は確かタッケが中吉で一番よかったんだよね？」
愛香が言った。しかしよく覚えてるなぁそんな事。
「大吉も大凶もいなかったからな。叔父さん達含めて」
陽はそう言って笑う。お前もよく覚えてるな。
「少なくとも去年は、こんな身体になるとは書いてなかったよ。神籤（くじ）ってのに…」
「猛、占いだから、予言じゃないから」
などと話しているうちに、神社に着いた。別にたいして大きくも無い、どっちかと言うと小さな神社だ。
「さぁ、今年は誰が一番良い結果かな？」
「その前に参拝するよ。ほら、向こう最後尾だから」
参拝客の一番後ろに並んで、俺は横にいる愛香に話しかけた。
「やっぱり正月だね。和服の人が結構いる」
「確かに。でもタッケ見たいに黒髪で腰まであるって人はいないね。ってより、タッケ並に真っ黒な人も少ないね」
「愛香も真っ黒じゃん。短いけど」
「まぁね」
愛香はそう言って、毛先を指でくるりと弄った。

つまり、里帰り。　４ページ

初詣の帰り道、信号待ちをしていると、不意に、陽がこんな事を訪ねてきた。
「なぁ猛。お前なんて言うか、その、元に戻りたいとかおもわないのか？」
信号が青に変わり、周りの人が歩き始める。
俺は驚いて、隣に立つ陽を見た。
「戻りたいって、どう言う事？」
横断歩道を渡りながら聞き返す。
「いや、お前って、不思議な体質だろ？なんて言うか、性転換しない、普通の身体に戻りたいとかって思わないのか？」
歩みを止めず、俺の前を歩いたまま、陽は言った。
「でも普通は戻りたいと思うでしょ。ねぇタッケ？」
愛香がそう言って俺の方を向く。
　元の、普通の身体に戻りたいと思った事…か。最初に性転換したのが四月の後半。そこから、もう十ヶ月経っている。
「思い返してみたら、戻りたいって考えた事無いかもしれない」
ポツリと、呟く様に俺は言った。
「えっ？思わないの？」
愛香は驚いた表情で俺の顔に迫ってきた。あと少しで頭突きを喰らいそうだ。
「……でも、私の知ってる子もタッケと似た様な体質だけど、普通の身体になりたいって言わないわね…」
愛香は俺の目の前から離れ、顎に手を当ててブツブツ言っている。
「って事は姉ちゃん、このままでも良いの？」
「今のところ、元の体質だろうと今の体質だろうとどっちでも良いかな」
「普通そんな体質になったら精神が参っちまうだろうよ。全く、ど

んだけ神経図太いんだか…」
翔と陽がそう言って溜息をつく。
この身体、どっちかと言うと不便だろう。新しく買わなきゃいけないのもあったし、その時の性別で行動が変わるのだから。
「でも、私は女の子の時の方が良いかな〜。服を着せるのが楽しくて」
後ろから愛香が言ってきた。飛び掛かって来ないのは、和服だからだろうな。
「あー俺はやっぱり男の時の方が良いかな。いじられないし、おだやかに過ごせるしね」
苦笑しながら俺は言った。その時、前を歩いていた陽が、振り返って、こんな事を言った。
「なぁ愛香、将来猛は、嫁を貰うのかな？それとも嫁に行くのかな？」
「はい？」
なんだそれは。なんでそんな事をいうんだ。
「姉ちゃんは普通に独りでいると思うよ」
「私も……て言うかそれ相手が絶対まともじゃないでしょ。…行くにしてももらうにしても」
二人は呆れた表情で陽を見ている。その反応がつまらなかったのか、陽はそっぽを向いてしまった。

「それじゃ、また来年に」

「そうね。また来年ね、猛君」
おじさんおばさん祖母いとこに別れをつげて、車に乗り込む。まぁまた来年会うのだけれど。それに、これ以上この身体の事を説明する事もないだろうし、少しばかり気楽だ。
そんな事を考えながら、俺は車のシートにもたれかかった

つまり、里帰り。　４ページ（後書き）

なんか自分の文章読んでいると、キチンと締めが書けていないんです。あやふやに終わらせているのが多かったり、終わりよければ全てよし。頑張らないと。

さぁ次回は、新学期ですよ？

お楽しみに～

つまり、取るに足らない他愛も無い日常　1ページ

三学期が始まる日、始業式の朝。その日は、こんな会話から始まった。
「燕よ、男子高校生って言葉は、二つの意味があるよな」
朝、二週間振りに制服に袖を通しながら、俺は燕に話しかけた。
「二つの意味って？」
まだ眠いのだろうか、目を擦りながら燕が聞き返した。
「一つは、男子校に通う高校生。もう一つは、男子の高校生だ」
「いや、どっちでも男子じゃん。ていうか、男子高校生じゃ無くて男子校生でしょ？前者は」
眠そうながらも、燕も着替えていく。
「そうか、では燕。俺達、いや私達は、男子校生？」
「それは、男子校に通っているんだし……でもあれ？周りからしたら女子高生な訳で…」
「考えてみれば、面倒な立ち位置に居る訳よ」
そう言いながら俺は、パンをトースターにセットし、フライパンに卵を落とす。
「かかり、昨日マフィン買ってなかった？」
「買おうとしたけど、値段が高いからやめたじゃん。普通の八枚切りだよ。……あと、寝癖」
「毎朝苦労するよ、これ」
苦笑しながら洗面台の方へと消えていく燕。俺は焼けた卵を皿に移して、パンも皿に乗せて、テーブルへと運ぶ。そして冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップに注ぐ。その時、洗面所の扉が開いた。
「まだ寝癖残ってるよ」
俺は椅子に座りながら指摘する。
「少しくらいならご愛嬌」
燕はにゃりんって感じで微笑んで、トーストを食らう。俺も朝食を

食べ始める。
「まだカーディガン着ないと寒いなぁ。昨日は雪降ったし、男子になっておけば良かった」
最後の一口を飲み込んで、俺は呟いた。外は、この冬ようやく降った初雪で、所々雪が残っている。
「もう制服着ちゃってるじゃん。確かに、足寒いけど」
その後、朝食の片付けをして、歯を磨く。今日は始業式で九時半登校だから、のんびり出来るんだよな。
「ふぉーふぃふぇふぁふぁぁ」
歯磨きをしながら、横に居る燕が話しかけてきた。
「？」
俺は言葉にならない音を出して反応する。燕は歯磨きをやめ、口をゆすいでから
「今日提出しなきゃいけない宿題ってなんかあったっけ？」
と聞いてきた。
「んーふぅひゃふほ、ひひふぉ……ペッ……あと古典だった気がする」
「地理ってプリントだけだったよね？」
「そうだよ。さ、そろそろ登校のお時間だ」
歯ブラシを元の位置に戻し、少し髪を整えて、玄関へ向かう。バックの中身は空っぽに近いので、持つのが楽だ。
そう思いつつ靴を履き、まだ寒い冬の空気の中へと、扉を開けた。

つまり、取るに足らない他愛も無い日常　2ページ

昨日降っていた雪は、一面に積もる程降らなかったらしい。俺と燕は、寮から校舎に伸びる一本道を歩いていた。
　やはり外は寒い。幸い今日は風が吹いていないので、凍える事は無いが、それでもやっぱり肌寒い。
「おーお二人さん。今日から三学期ですなぁ」
うしろから、ノリの良い声が聞こえて来た。振り返ると、和樹、飾、修、優太が立っていた。これでいつもの六人集合だ。
「三学期かぁ。楽しみだった様な、来て欲しくなかった様な…」
「俺達高等部には入学も卒業も関係無いからな。面倒ごとが無くて気楽だ」
「そうだな修。卒業式練習とか、新しく入ってくる子達に、とかないから気楽だよ」
修の意見に優太が同意する。
そうこうしているうちに、俺達は校舎にたどり着いた。建物の中に入っても、まだ下駄箱だから寒いもんだ。
「今日体育館だから、上履き要らん気がするな」
下駄箱で靴を履き変えながら飾が言った。
「確かにね、体育館で鬱陶しい話聞くだけなのに、わざわざ教室行くだなんて」
と優太が同意すると、
「提出物とか、色々あるんだろ？仕方ない事だと思うけどな」
と和樹。そこに燕が
「始業式って無駄に視線集まるから、本当に嫌になるよ」
と溜息を吐く様に言った。そして俺は…
「で、かかり、上履きは無事に取れたか？」
「もう……少しっ……よしっ取れた」
下駄箱と格闘していた。

久しぶりー久しぶりと、教室からは色んな声が聞こえた。その中には新年のあいさつも含まれている。
俺、飾、燕は四組の教室へと向かった。
「さすがにこのクラスは慣れてるね」
隣で燕がぼそっと呟いた。まぁ、その意見には同感だが…
「やー姫君達、あけましておめでとう！」
俺たちに気づいた宮田が、なぜか敬礼しながら挨拶してきた。俺達も挨拶を返し、教室の中に入っていく。とその時後ろから
「や、や、皆。時間的にはまだ早いが、席に着け―」
四組の担任。地理の先生、上田先生が入ってきた。
「先生早すぎない？」
「体育館には九時半に行くんだろ？」
「まだ九時になったばっかだぞ…」
あちこちから声が上がるが、皆席についていく。教室が落ち着いてきたところで先生は
「生徒の集まりが予想より早く集まったので、始業式を繰り上げるらしい。じゃ、今から廊下にせいれーつ」
と言った。
　どうして生徒の集まりが早い事に気が付いたのだろうか？普通は生徒が何人きたか、とか、分からないと思うんだが…
取り敢えず、皆廊下に背の順で整列し、先生の後ろについて体育館に向かった。

つまり、取るに足らない他愛も無い日常　3ページ

「みなさんまだ少しお正月気分でいるでしょ。えーでもね、えー今日からみんな気を引き締めて行かなきゃ……」

禿げ上がった。　　頭。

「それからね、えー、新聞でみた話なんですけどね、えー……」

段々と眠くなってくる。　　話。

「えーこんな風にえー、君達も、えー、一生懸命に物事に取り組めば、えー無理だと思った事も達成出来る。えーそう言う事なんですよ……」

始業式、や終業式、はたまた学校の集会で、『生徒が思う無くてもいいもの』。校長先生のお話は、俺達に怠慢感を感じさせる。

何時の間にか後ろの方から会話が聞こえ、ガヤガヤと騒がしくなっている。

（いいなぁ～）

俺はあくびを噛み殺しながらそう思った。背の順に並べば、必然的に俺は、列の前、校長先生の表情を確認出来る位置にいるからだ。そんなところで雑談なんか、出来る訳がない。

「じゃあ、これで話はお終いね。えー副校長先生。次お願いします」

ようやく終わったか。あんのハゲ、たっぷり十分も話しやがって。後ろからも、ほっ。ッと声が上がる。校長先生がマイクの前から離れて、代わりに副校長先生がマイクの前に立つ。

「みなさん、三学期も怠けないように。それじゃ、諸連絡は教室で担任の先生から聞いて下さい。これで始業式を終わります」

副校長先生は、とっても良い先生だ。

教室で放課後。
ガヤガヤとした空気の中、俺は宿題を吐き出してさらに軽くなった鞄を抱えて立ち上がった。別にこれから何をする訳でもない。ただ寮に帰るだけだ。
　飾と燕も加わり、三人になった暇人達は、寮に向かう道を、のんびりと歩いている。
「そーいえば、この冬休みで戸籍変えたんだよね、私」
ふと、俺の横を歩いている燕が言った。
「えっ？戸籍を変えた…？」
反対側に居た飾が驚きの声を上げる。
「そうだよ。男から女にね。今まで寮ぐらしだったから、戸籍とか考えて無かったし、えらく慌てたね」
「ほーう。てことはもう普通の女の子になったのか、かかり、お前ももしかして…」
「変えてねぇよ。性転換する度に戸籍変えてたら、面倒とかそういうレベルじゃないよ」
俺は空を見上げる。青い空の中にポツンとある雲が、なんだかたい焼きの形に見える。お腹減ったなぁ。
「戸籍変えたって事は燕さ、清涼学園にいられないんじゃない？」
俺は空を見上げたままポツンと言った。
「あぁ、それは大丈夫みたい。なんでか良くわかんないけど、例外って事で良いでしょ」
燕は笑顔で言った。明るい、やや茶が入った黒髪が風で揺れる。俺は、暴れる自分の真っ黒な髪を抑えつけて、飾と燕と、寮の中に入っていった。

つまり、取るに足らない他愛も無い日常　４ページ

寮に帰り、制服から着替えると、俺達はリビングでまったりとしていた。俺は窓に結露した所を拭き取ったりして遊んでいた。
「ところでさ、かかりはチックリしたっけ？」
そんな時、これまた燕が話しかけて来た。
「チックリ？」
俺は振り返って聞き返す。燕はお正月の時に食べ切れなかったお餅を食べながら、ソファに座っている。
「予防接種でさ。チックリしたかって、ほら、子宮頸癌の」
「してないよ……ってか、なんで今そんな話題を？」
「お正月に家帰ったら色々とあってね」
燕はケラケラと笑って最後の一口を喰らう。
「お前、正月凄く忙しがったんだね…」
ふぅ、と息を吐いて、俺は言葉を続ける。
「でもさ、予防接種って、普通子供の時にやっておくんじゃなかった？年齢的に駄目なんじゃ…」
「高校一年生がギリギリだって。…でも後二日チックリしなきゃいけないんだよね」
「三回すんの？……注射……」
「そういえば……注射駄目だったね。…感情的に」

「この寮って、考えたら一つの部屋が大きいな」

先ほどの会話から暫くして、俺は独り言の様に呟いた。早く学校が終わってしまい、とても暇なのだ。
「そう？リビングとお風呂と物置と部屋。……あ、確かに大きいね」
俺と同じ様に横で暇している燕が苦笑する。
「一人一部屋ってしないのが不思議だよね。今更だけど」
「一人一部屋にすると生活がズボラになるからって聞いたけど？」
「あぁなんか分かる気がする。『どうせ自分しか食べないんだから』とか言ってずっとカップラーメン食べたりしそう」
そう言って俺は、この学校に入学して三年。ようやく寮が二人組の理由を理解した。
時計を見て、ふと、俺は立ち上がった。燕はどうしたのかと思っているかの様に俺を見上げる。俺は燕の方を見て、
「さ、部屋少し片付けておくよ」
と言った。
「え？どうして？」
「そろそろ……そろそろ暇するのに飽きた奴らがやって来ると思うから」
俺の説明を聞いて、燕が「あっ」っと短く声を上げたと同時に、玄関の方から音がする。その後、リビングの扉が開き、男子四人が部屋に飛び込んで来た。
「暇だぁ！遊びに来たぞ！」
和樹が声をあげる。
「はいはい」
俺は適当に菓子でも出そうと、キッチンに向かう。後ろからギャーギャーとした音を聞きながら、俺は溜息を吐いた。
だが、なんだろう。この雰囲気は不思議と落ち着く。そう。いつもと変わりない、ただの日常なのにーーーー

つまり、取るに足らない他愛も無い日常　４ページ（後書き）

あけましておめでとうございます。
今年もどうか、彼等を見て楽しんで頂けたら光栄です。

つまり、レク大会だよレク大会　１ページ（前書き）

今回は会話が多すぎて、そして誰が喋っているのか分かりズラいです。
ホントすみません。

つまり、レク大会だよレク大会　１ページ

一月半ば、学校の、滅多に生徒が出入りしない清涼学園の施設の一つ、中庭広場に、この日、清涼学園の生徒のほとんどが集合していた。この日はクラス対抗学校全体レク大会。

企画はなんと教師陣が考案したものである。

基本はマラソン大会の様な物だが、中等部、大学部、高等部をそれぞれフェアにするための工夫が色々施されている。そして、見事レク大会を制したクラスには、豪華商品が送られるらしい。その商品は毎年違い、賞品の豪華さも毎年違う。例えば、ある年はテーマパークチケット。またある年は新品のシャープペン。と言う風にだ。

中庭広場で各クラスがストレッチを行っている時、スピーカーから音が流れた。

ガガッ……『えー聞こえてますでしょうか、こちら放送部。今年も我らは、レク大会の事をクラスのみんなに押し付けて、解説、実況をつとめていきます。

えーいつもはこの放送を聞いてくださっている方が少ない様なので、今年はスペシャルゲストを迎えております。学園の花。校内に二人しかいない女子！一年四組の神鎌　…えーっと、かかりで良いんでしたっけ？…はい。神鎌　かかりさんと、山瀬　燕さんですどうぞよろしくお願いします』

『こちらこそよろしくお願いします。…レク大会の実況って難しくないですか？色々関門があるし…』

『こんにちは。確かに言葉で伝えにくい関門がありますよね。どうするんですか？』

『そこは放送部の意地ってやつです御二方。さぁ、スタートラインから情報です。

どうやら後五分程で始まる様ですね。皆さん準備運動はしっかりしましたか？

……ところで御二方。目の前のモニターが珍しいのは分かるのですが、喋って貰わないとこちらは色々と困るのですが』
『あっすみません。中等部の頃は放送を聞いていただけなので、まさかこんな風になっていたとは思わなくて』
『予想外でしたか。なんせこのレク大会をしっかりと実況するためにカメラを六十台使っているのですから』
『『六十台？』』
『ええ、凄いでしょう？カメラの設置場所は言えないので話を変えますが、かかりさん。新聞部や我ら放送部の情報によりますと、普段は髪をそのままおろしている様ですが、今日のハーフアップはどうしてなのでしょうか？』
『別に、ただ横の方が鬱陶しいだけですよ。最近ようやく綺麗に髪を結べる様になったので』
『そうなんですか。私としては、ハーフアップの時はヘアゴムよりバレッタでとめている方が好みです。それに対して燕さんは、切ったんですか？大分短くなった様ですけど』
『切ったって言っても肩までありますけどね。でも５ｃｍくらい落としましたから、軽くなった感じはしますけど…』
……
中庭広場に居た生徒の中の誰かが、一言ポツンと呟いた。
「スタートしないの？」

つまり、レク大会だよレク大会　2ページ

俺の目の前には、幾つかのモニター。
俺の横には、燕と、放送部の八津さん。
俺が今現在いる場所は、いわゆる放送席。
学校で、教師陣が最も盛り上がるイベント。清涼学園のレク大会。
俺は燕と共に、ゲストとしてここに招かれた。
「さぁ、少し遅くなりましたが、間もなくスタートです。各クラス気合いが入った様子でスタートラインに並んでいます。
……今スタートしました、清涼学園レク大会。清涼学園レク大会。只今始まりました」
八津さんがマイクに向かって喋る。モニターでは、大量の生徒が中庭広場から駆け出して行く。
「うっわぁ、凄い気合」
俺は思わず声を上げていた。
「おや？去年はあなた達も参加されていたのですよ？」
八津さんが聞いてくる。そっか、喋った事全部放送されるんだっけ。
「こうやって改めてモニターから見てみると、驚くほど気合入ってるんですね。あの中にいると分かりませんけど」
「成る程。外から見て始めて分かる事ですか。そうやってみると面白いですね。
　さて、今現在のトップは大学部電工科。これは以外ですね」
モニターを見ながら、入ってきた情報を整理し捌いていく八津さん。
「清涼（うち）学園の電工科って、あまり運動してるイメージ無いんですけどね」
今度は燕が喋る。モニターには、大勢の生徒が写っていて、誰がそのトップなのか分からない。
「今回のゴールはおなじみ時計塔。その円盤前の踊り場にいる先生に、合言葉を言えばゴールです。因みに合言葉は五つです」

「まさかそのまま『合言葉』じゃ無いですよね…」
「……違います」
「……そうですか」
「あっ、四組いましたよ」
気まずい空気になりかけた瞬間、燕がモニターを指さしながら言った。八津さんはこれに反応し、つなげた
「そう言えば御二方は一年四組でしたね。…となると、四組の生徒には今回の賞品は微妙かな？」
「今回の賞品って、もう決まってるんですか？」
「えぇ。なんでも今回は、生徒会も協力する様で」
「へェ～、どんな賞品なんでしょう」
「さ、そろそろトップが第一関門。『やさしいなぞなぞのほん』から出題されるなぞなぞを解く。と言う関門にたどり着きました」
「「……」」
言葉が出ない。
「因みにこの関門の担当者は、中等部数学担当。林先生です」
「生徒を舐め切った関門ですね…」
「先生もよくやりますね…」

つまり、レク大会だよレク大会　3ページ

「さて、ここで今回の賞品について話しましょうか」
第一関門の様子を実況していた八津さんが、俺達の方を向いて言った。
「えっ？いつも賞品って、優勝クラスが決まってから発表するんじゃ……」
燕が驚いた声を上げる。
「今回は途中発表しても構わないそうです。御二方は、少し講義するかもしれませんが、生徒会と教師陣で既に決定していますので」
「え、少し講義するかもって…？」
一瞬、嫌な予感がした俺は、八津さんに聞き返した。
「はい、今回の賞品は、優勝クラスに授業2コマ分、カフェでくつろいで貰います。御二方にはそのカフェのウエイトレスを。まぁ俗に言うメイドカフェのメイドさんですね。」
八津さんは、笑顔でさらりとこう言った。
校内の、至る所に設置されたスピーカーから、俺と燕の絶叫が流れるまで、後数秒。

「ちょっと待った！え？なに？つまり、俺等賞品？ふざけてんでしょう！」
「そんな事今知ったよ？メイドさんって何？何の罰ゲーム？」
「落ち着いて下さい御二方」
「「無理？」」

「いやーハモりましたねぇ」
「呑気か！てかよく学校側が許可したな！」
「それよりも二人じゃ三十人も捌けないから！料理も出来ないから！」
「あー御二方に説明しますと、料理の方は生徒会の方が作られるそうですよ。御二方にはウェイターをしてもらうだけです。メイドですが。それにですね」
「それに？」
「強制的ってとこと、急に知らせるって所で、バイトみたいに賃金出るそうですよ。安いですが」
「「……」」
「おや？二人共金で転ぶんですか？」
「そう言う訳じゃないけど…燕、どう思う？」
「やっぱり忙しいと思うよ。十人五人ならまだしも、三十人だしね。でも強制的何でしょ。やるしかないよ」
「ありがとうございます。っと、御二方が了承してくれた時点で、ペースアップした人が何人か居ますね。……えっーっと、あれはアニメ研究会、漫画研究会、イラスト研究会の皆さんですね」
「「……」」
「引かないで下さい御二方」
「似たような研究会があるんですね」
「かかり、そこ？」

つまり、レク大会だよレク大会　４ページ

学園主催のレク大会は、なかなかに白熱した試合を見せてくれた。関門の一つ、百マス計算は、高等部や大学部より早く、中等部が素早く突破したし、体力系勝負の関門では、運度系の部活に入っている人が最も少ない高等部三年二組がチームプレーでトップ通過したりと、意外な展開で進んで行った。パスワードが懸かっている関門では、迷路早抜けと言ったややこしそうなのもあれば、先生とのジャンケンというシンプルなのもあった。いよいよ、この大会もラストスパートだ。

「おおっと？ほとんどの暮らすが各関門からパスワードをもらっている中、高等部二年二組は、他クラスのパスワード伝達を盗み聞きしているっ！これは反則ではないし、関門をクリアする必要もない！」

八津さんは、最初と変わらず実況を続けている。

「ずる賢いって感じですね…」

俺は人がとにかくたくさん映っているモニターを見ながら呟いた。

「もうどこが優勝するかわかりませんね」

燕もコメントしている。

しばらく三人で実況をしていると、八津さんの横にいた数人の放送部員が、急に忙しく騒ぎたした。何だろう？そう思って見ていると、放送部員の一人が、八津さんに一枚のかみを渡した。

「さぁただいま情報が入って来ました。時計塔入り口に中等部三年三組、高等部三年五組、大学部心理学科の人達が現れたようです。どうやら優勝はこの三クラスに限られたようだぁ！」

紙をもち、マイクに向かって叫ぶ八津さん。

そんな八津さんの目の前のモニターが切り替わり、時計塔広場が映し出される。

その画面を見て俺は気になったことを、八津さんに聞いてみた。

「あの……時計塔内部にはカメラは無いいんですか？」
そう、映ったのは、時計塔広場。つまり、時計塔に入る入口である。そのため選手がモニターに映って居らず、どこのクラスが一位なのか分からない。
「内部と、ゴールの文字盤前は、学校側の許可が下りず、設置していませんよ」
俺の質問に八津さんが答える。その後
「さぁ再び情報が入ってきました。一位でゴールしたのは中等部の三年三組、三年三組が優勝です！」
マイクに向かって叫ぶ八津さん。
「続いて二位は大学部心理科、三位に高等部三年五組と続きます」
「中等部が一位なのは意外…ですね」
俺は時計塔広場の定点観測カメラになりかけているモニターを見ながら言った。
「確かに高等部の方が有力でしたね。さぁ、優勝したクラスは、明後日土曜日の十時から二時間。無料カフェをご利用できまーす。事情があって参加出来ない方は、当日までならアイスがもらえますよー」
八津さんはそう言って、この放送を締めくくった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2964x/

つまり

2012年1月12日18時58分発行